569-142
1200501517639
569
142
複写

158
+298-20

改造文庫

第一部　第五百十篇

涯生がわ

（中）

著ーキツロト
譯吉季野青

改造社出版

納本

改造文庫
第一部第百五十篇

涯生がわ
（中）

著ートロツキー
譯吉季野青

改造社出版

昭和十二年
帝國圖書館藏

569
142

目次

第一章　二度目の外國亡命。ドイツ社會主義……七
第二章　新しい革命への準備……三五
第三章　戰端……五三
第四章　パリーとチンメルワルト……六七
第五章　フランスから放逐さる……八〇
第六章　スペイン通過……八九
第七章　ニユー・ヨーク……一〇七
第八章　捕虜集合收容所で……一二〇
第九章　ペトログラード入り……一三〇

第十章　逆宣傳問題……一四九
第十一章　七月から十月まで……一六九
第十二章　審判の夜……一八四
第十三章　一九一七年の『トロツキイズム』……一九六
第十四章　權力を握る……二〇三
第十五章　モスコウで……二三五
第十六章　ブレスト・リトウスクの商議……二四六
第十七章　媾　和……二七一

わが生涯（中）

第一章　二度目の外國亡命。ドイツ社會主義

一九〇七年の黨大會は、ロンドンの社會主義者教會でその會合を催した。それは長びいた、賑やかな、激烈な、渾沌とした大會であつた。第二國會（ダーマ）は、依然としてセントペテルスブルグで生存を續けてゐた。革命は鎮まりつゝあつたが、それはまた、英國の政治界にまで大きな興味をひきおこしてゐた。著名の自由主義者は、有名な代表者達を自分の家へ招待して、お客にみせびらかした。革命の退潮は黨資金の減少の中にも既に明らかであつた。歸路の費用の不足はおろか、會議を終りまでつゞける費用さへもなかつた。この悲報が××××の議論を急に中絶させて、教會のアーチの下に鳴りひゞいた時、代表者は仰天してお互ひに顔を見合せた。どうしたらよいのか。勿論、私達は教會にとゞまることは出來ない。ところが、一つ、方法が見付かつた、しかも全く思ひもかけない形で。或英國の自由主義者がロシア革命家のために、たしか三千磅貸すことに同意した。しかし、彼は、革命の約束手形にはこの會議に出席してゐるすべての代表者が署名しなければならぬと要求した。そこでその英人は、ロシアの全人種がそれ〴〵特徴のある調印をした、數百人の署名のある證書を受取つた。然し彼はその手形の支拂を受けるのに、長い間待たねばならなかつた。××と××との間、黨はそんな巨額な金を夢みることさへ出來なかつた。そのロンドン會議の時の約束手形

を買戻したのはソヴイエット政府であつたのだ。××はその債務を實行する。だが、延引はありがちのことだ。

會議の初めの或日、私は教會の車寄で、丸い帽子をかむつた、丸顔で頰骨の張つた、背の高い、痩せた人に呼止められた。

『私はあなたの讃美者です。』とその人は愛嬌よくクツ〳〵笑つた。

『讃美者だつて？』と私は驚いて繰返した。その挨拶は、私が獄中で書いた政治上のパンフレットについてゞあるかのやうであつた。話相手はマキシム・ゴーリキイであつて、私がゴーリキイに會つたのはこれが始めてゞあつた。

『私があなたの崇拜者であることは、今更申上げなくつてもいゝでせうね。』と、私はその人の挨拶に答へて相手に云つた。

その當時ゴーリキイはボリシエヴイキに近かつた。彼と一緒に有名な女優アンドレエヴアがゐた。私達は一緒に倫敦の街を歩きまはつた。

『あなたは本當にしないかも知れないけれど、』――ゴーリキイは驚いたやうな眼で、アンドレエヴアをちらりと見ながら言つた。

『アンドレエヴアさんは各國の言葉を喋るんです。』

さういふ彼自身はロシヤ語でばかり話してゐたが、ロシヤ語はなか〳〵上手であつた。ある乞食が吾々の後で辻馬車の扉を閉めようとする時、ゴーリキイは力をこめて言つた。『吾々は乞食に少

し位の銅貨を與へるべきだ。』アンドレエヴアは之に答へて言つた。『貰つてゐますよ、ね、アリョーシヤ、貰つてゐますとも。』

ロンドン大會の時、私は、一九〇四年以來知合ひになつてゐるローザ・ルクセンブルグとの舊交を温めた。彼女は小柄な、弱々しい、殆ど病的な面貌の女であつたが、貴族的な顏と、聰明を反映する美しい眼とを持つてゐた。その心や性格の淸らかな勇氣は人の心を捕へた。態度は率直で、はげしくて、少しも容赦しない無慈悲なところがあり、常に彼女の勇敢な精神を表す鏡であつた。彼女の天性は多角的で、微妙な陰影を豐かに有つてゐた。革命とその情熱、人と藝術、自然、鳥と植物――これらすべてのものが、彼女の魂のもろ〳〵の琴線をふり動かした。彼女は嘗てルイゼ・カウツキイに宛てゝかう書いた。『私はだれかかういふ人が欲しい、といふのは、私が世界の歷史のかやうな渦卷の眞中へ這入つてゐるのは全く私の考へ違ひからで、ほんたうは、私は野原で蒼鷺の世話でもするやうに生れついてゐるだと言ふ時、私の言葉を信じてくれるやうな人が欲しい。』

私とローザとの間柄は特に、目立つほどの友情關係があつたわけではない。吾々は極くたまにしか會はなかつたし、會つてもほんの僅かの時間であつた。私は彼女を遠くから尊敬してゐた。それでも尙私は、その當時彼女を十分に知らなかつたのかも知れない。所謂永久革命といふ點に就ては、ローザと私は同じ立場にあつた。この問題に就て、嘗てレーニンと私は控室で半ばユーモラスな會話を交へたことがある。代表者達は吾々のまはりに圓く詰めかけて立つてゐた。『それは要するに彼女がロシヤ語が十分よく喋れないからだ。』レーニンはローザのことをかういつた。『それはさ

うかも知れないが、彼女の語るところは立派なマルキシアンだ。』と私が抗辯すると、委員達が大聲で笑ひだした。そのために私達も哄笑した。

大會で、私はも一度××××××に於けるプロレタリアの役割、特に農民に對するプロレタリアの役割の關係に就て、私の意見を發表する機會を得た。論爭の締め括りをつけるに當つて、レーニンはこの問題に就てかう言つた。

『トロツキイが懷いてゐる意見では、プロレタリアと農民とは今日の××に於ては××××××を持つてゐるといふのである。』從つて『ブルジョア政黨に對する吾々の態度の根本に於ては、斯樣に吾々の意見は一致してゐるのである。』レーニンのこの言葉は、一九〇五年に私が農民を無視したといふ傳說になんと似ても似つかないものであらう！　一九〇七年、ロンドンでの私の綱領演說――之は今日に至るまでも私は絕對に正しいと信じてゐる――は、農民及びブルジョア階級に對するボリシエヴイキ黨の態度の一例として、十月革命の後で特に引離して印刷されたといふことを、こゝに書添へておきさへすればいゝと私は思つてゐる。

私は妻に會ふためにロンドンからベルリンへ行つた。妻はセントペテルスブルグからベルリンへやつて來ることになつてゐた。その頃までにパルヴスも亦シベリヤから逃げて來てゐた。彼はドレスデンで私の小册子『往復』をカーデンの社會民主黨出版會社から出さうとして準備してゐた。私はこの書物の中で、私の逃亡のことを取扱つてゐたので、ロシアの革命そのものに關する序文を書くことを承諾した。その序文からして二三ヶ月のうちに、私の書物『革命にあるロシア』が出來上

つた。私の妻とパルヴスと私と三人一緒でサクソン・スキスを通つて徒步旅行に出かけた。それは夏の終りのことで、天氣はすばらしく好く、來る朝も來る朝もすが〳〵しかつた。私達は思ふ存分に山の綺麗な空氣を吸ひ、思ふ存分のミルクを飲んだ。本道から脇道にそれて深い谿に下りようとしたので、妻も私も殆ど死ぬやうな苦しい思ひをした。その後吾々はボヘミヤへ行き、小役人どもの避暑地になつてゐるヒルシュベルグといふ小さな村へ行つて、そこに五六週間滯在した。吾々の資金がだん〳〵無くなりかけたし、それに支拂日ごとにめつきりと減つていつたので、パルヴスか私が危險を冒してまでも社會民主新聞へ原稿を送つて費用を作らねばならなかつた。ヒルシュベルグに滯在してゐる間に私はセントペテルスブルクのボリシエヴイキの出版所で印刷する爲に、ドイツ社會民主黨に關する書物を一册書いた。その書物の中で再び――第一回は一九〇五年であつたが――私は、ドイツ社會民主黨といふ巨大なる機關が、××××××××××××××××には、××××××××××××××××ものになるであらうといふ事を述べた。尤もその頃では、この理論的な臆測がどの程度まで事實によつて裏書きされるかといふ事は判らなかつた。ヒルシュベルグから、私達は各自別々の道をたどつた――私はスツツトガルトの大會へ行き、妻は子供を連にロシアに、パルヴスはドイツへ向つて出發した。

此頃なほ國際社會主義大會（インターナショナル・ソシヤリスト）のうへに一九〇五年のロシア革命の暴風雨の響がたゞよつてゐた。社會主義者達の誰もかもが、左翼の人達と步調を合せようとしてゐた。然し××的方法に就てはみんな既に失望を感じてゐることがみとめられた。ロシアの革命家達は、その當時もなほ人氣を呼んだ

が、しかしその人氣のなかには一味の皮肉がたゞよつてゐて、彼等は口をそろへて、『やあ入らつしやい、又ぞろ後逆り。』と言つてゐるかのやうであつた。一九〇五年の二月ロシアへ行く途中ウキンナを通つてゐた時、私はヴイクトル・アドラーに、臨時政府に社會民主黨が加はることを貴方はどう思ふかといつて尋ねた。アドラーは彼一流の言ひ振りで私に答へた。

『君はあんまり現政府のことで忙しいから、將來の政府のことなんか考へられないよ。』

私はスツツドガルトで、アドラーに彼の以前の言つた言葉を思ひ起させた。『僕は明らさまに言ふが、君は僕の豫想以上に臨時政府に接近してきたね。』アドラーは常々私と非常に親しい間柄であつた、と同時に、もつと深く觀察して見るならば、オーストリヤの普通選擧は、ペテルスブルグの勞働者代表ソヴイエットの手によつて成就されたものではなからうか？

スツツドガルト大會の英國代表クエルチ――一九〇二年に大英博物館への入場券を私に貰つてくれた人である――は會議の席上で、遠慮會釋もなく外交會議を××の集りであると罵つた。このことがビユーロー公爵の機嫌を害した。ベルリンからの壓迫によつてウユルテンベルヒ政府は、クエルチに退去を命じた。すると直ちにベーベルの機嫌がおだやかでなくなつた。しかし黨はクエルチの退去に對して手段方法を講ずる程の勇氣が出なかつた。一つの抗議的なデモンストレーションもなかつた。國際大會は學校の教室のやうだつた。行儀の惡い者は教室から出て行くやうに命じられ、その他のものは默つておとなしくしてゐた。ドイツ社會民主黨の數の大勢力の背後に、いとも明かに、無能力の影を認めることが出來た。

一九〇七年の十月には私は、既にウキンナに來てゐた。間もなく私の妻が子供を連れて來た。私達が革命の新しい潮時を待つてゐる間、私達は市外のフユツテルドルフに住居を始めた。隨分長いこと待たねばならなかつた。私達は七年後全く違つた潮流のためにウキンナから連れ去られた――歐洲の全土を血に浸した潮流だ。他の外國亡命客がスキスやパリーに集るのに、どうして吾々はウキンナを選んだのか？　當時、私が一番接觸してゐたのはドイツの政治生活であつた。しかしそこには警察があるから、ベルリンに落着くことは出來ない。それで私達はウキンナに家をもつたのである。しかしその七年間、私はオーストリアよりもドイツの生活をずつと注意して見守つてゐた。オーストリヤ生活は籠の中の栗鼠をあまりにも思ひ起させたのである。

黨の公然たる指導者であるヴイクトル・アドラーを私は一九〇二年以來知つてゐた。今回は、私にとつて彼を取卷く人々や、彼の黨員全體と親しくなるべき時である。私達はカウツキイの家で一九〇七年の夏に、ヒルフアデイングと知合になつた。彼は當時革命主義の尖端に立つてゐた。それでも彼がローザ・ルクセンブルグを憎むこと、カール・リーブクネヒトを蔑むことに變りなかつた。ロシアがなかつたら、彼は當時、他の人々と同樣に、最も急進的な結論を受入れる用意が出來てゐたのだ。彼は『新時代』（ノイエ・ツアイト）誌が私の外國へ出る前に、ロシアの新聞紙から飜譯した私の論文をほめた。そして私としては、全く豫期しないことであつたが、最初から彼はお互ひに『お前』と呼ばうと云つてきかなかつた。といふのは、私達の外面的關係はいかにも親しさうであつたからだ。しかし、それには何等の道德的な、又は政治的な根柢はなかつた。

ヒルフアディングは當時のいやに落着いた、消極的なドイツの社會主義を非常に輕蔑し、それをオーストリヤの政黨の活潑さと比較した。しかしながら、かうした批判もやはり書齋的な性質を脱却してゐなかつた。彼がウキンナを訪ふ時にはいつも私に會ひにやつて來て、夕方になるといつも私をカフエーにつれて來て、そこで、オーストリアのマルクシストである彼の友人達に、私を紹介するのであつた。ベルリンへ旅行したとき、私はヒルフアディングを訪問した。私達は、一度、ベルリンのカフエーでマクドナルドに會つた。エドワード・ベルンシュタインが通譯をしてくれた。ヒルフアディングが質問し、マクドナルドが答へた。今日、私はその質問も、答をも覺えてゐない。しかしいづれも平凡であつた、とだけははつきりしてゐる。私はこれらの三人のうち誰が一番、私が常に社會主義と呼んでゐるものからかけ離れてゐるであらうかと、自分自身に問うてみた。しかし私はその答へを得るのに困つてしまつた。

ブレストの媾和會議の最中、私はヒルフアディングから一通の手紙を受取つた。彼から何んらか重大なことを聞かうとは期待してゐなかつたが、それにもかゝわらず私は興味をもつてその手紙を開いた。これは十月革命後、西部の社會主義者からやつて來た最初の直接の言葉であつた。そして何にが書いてあつたか。その手紙のうちでヒルフアディングは、逃げることの出來ないウキンナの『ドクトル』の一種類である捕虜を放免するやうにと、私に要求してきた。革命のことはその手紙には一語も書いてなかつたのだ。それでも、やはりその手紙には、私を『お前』と呼びかけてゐた。私はヒルフアディングと云ふ人物が、どう云ふ人間であるかをよく知つてゐた。私は前から彼を少

しも買ひかぶつてはゐないと思つてゐた。しかも私は自分の眼を信じることが出來なかつた。

私はレーニンが生々した興味をもつて私に訊ねたのを思ひ出す。

『君はヒルフアディングから手紙を受取つたさうだね？』

『受取りましたよ。』

『で？』

『自分の親戚の捕虜を助けてくれつて頼んできましたよ。』

『革命については何んと云つてきたかね？』

『革命のことは別に何んとも。』

『何んとも？』

『何んにも。』

『信じられん。』とレーニンは私をみつめながら云つた。私は前から十月革命とブレストの悲劇とはヒルフアディングにとつては、單に親戚の事を頼む一機會にしかすぎないのであると考へてゐたから、あまりまごつかなかつた。たゞ私は讀者諸君に、レーニンが驚きを洩した二三の形容の言葉をおすそわけするのである。

ウキンナで友人のオットー・バウエルやマックス・アドラーやカール・レンナーに始めて私を紹介したのは、ヒルフアディングであつた。彼等はいづれも十分な教育を受けた人々で、さまゞゝの問題については私以上の知識を持つてゐた。——私は熱心なそして——人は或ひは云ふかも知れな

い――相手を尊敬するだけの興味をもつて、カフエー『セントラル』での彼等の會話に耳をかたむけた。だが、すぐと、私は閉口してしまつた。彼等は革命家ではなかつた。彼等は革命家のそれとは最もかけ離れたタイプであつた。このことはあらゆる點に現れてゐた――主題に對する彼等の態度に、政治的な言辭に、心理學的評價に、ひとりよがり――自信ではなくてひとりよがりの點に。私は彼等の聲の性質のうちに、俗物根性を感じたやうな氣さへした。

私はこれらの教育を受けた人々が、一旦政治上の大問題、殊にその××××に對するや否や、マルクス的方法を全く適用することが出來ないのを見て驚いてしまつた。私は始めレンナーについてそのことを確信した。私達は夜晩く或るカフエーにゐた。非常に晩かつたものだから、もう私の住んでゐるフユツテルドルフへ行く電車には間に合はなかつた。レンナーは今夜は自分のところへ泊らないかと誘つた。當時にあつては、この教育あり才能あるハツプスブルグ家の役人は、その時自分が歴史的な辯護者であつたオーストリア・ハンガリアの不幸な運命が十年後には自分をオーストリア共和國の首相にしてくれようとは、決して考へてはゐなかつたのである。カフエーからの歸途、吾々は當時斷然反革命の支配の下にあつたロシアの可能なる展開について話した。レンナーは如何にも教育のある外國人らしく、これらの問題を丁寧に公平に論じた。ベツク男爵が統率する當時のオーストリア内閣の方が、彼には遙かに興味があつたのだ。彼のロシア觀は大體に於て、次の如くである。即ち一九〇七年六月三日のクー・デターの後、ストリツピンの憲法となつて現れた地主とブルジョアジーとの提携は、この國の生産力の發展の段階と完全に一致してをり、したがつて

この提携は存續する見込みを十分に持つてゐる、と。

私は、自分の考へるところでは地主とブルジョアジーとの間の有力なブロックこそは××××への路を拓くものであり、又それこそは必ずや××をロシアの××××××××へ移すものであると述べて、彼の說を反駁した。私はレンナーが、街燈の下で、當惑したやうな同時に私を卑下したやうな眼ざしを投げかけて來たのを憶えてゐる。彼は多分私の豫言を無知な譫言であり、むしろ、數ケ月前にスツツトガルトで開かれた國際社會主義者會議で、××××××××××××××を豫言した、或るオーストリアの神秘家の默示的豫言のやうなものだと考へたであらう。

『君はさうお考へになるのですか？』と、彼はひどく丁寧にかう附加へた。『私は多分ロシアの事情に十分精通してゐないのでせう。』吾々にはもはや會話をつゞけるべき共通の根據がなかつた。私は彼が最も保守的なエジプトの國王と同樣に、××的辯證法に最も緣遠い男であることをはつきりと知つた。

觀察すればするほど、私の最初の印象はたゞ强められるばかりであつた。これらの人々は色々なことを知つてゐた。そして彼等は政治の常道の範圍内に於ては、すぐれたマルクシストの論文を書くことが出來た。然し彼等は結局私にとつては緣なき衆生であつた。私は私の交友關係が廣くなればなるほど、又私の觀察が深刻になればなるほど、ますゝこのことを確信するやうになつた。表立たぬ内密な話の時、彼等は、その論文を書いたり、演說をしたりする時よりもずつとあからさまに、むき出しの××××××や、小金持ちらしい自慢話や、××に對する神聖な畏怖や、婦人に對

する卑劣さを現はすのであつた。私は驚いてしば〳〵叫んだ。

『何んといふ革命家だらう！』

私はこゝでは、それはもつと純眞な、もつと單純な種類のものではあるけれども、とにかく俗物根性をもつてゐる勞働者のことを云つてゐるのではない。否、私は戰前のオーストリアのマルクシストの精華、代議士、著述家、新聞記者の精鋭と會つてゐた。それらの會合で、私は人間の心に含まれ得る異常な種類の要素を知り、一つの制度の或部分に受動的に同化することと、その制度を制度全體として完全に心理的に改造し、一制度の精神の下に自分を教育し直すこととの間には、大きな懸隔があることを理解するやうになつた。マルクシストの心理的タイプは、社會の大變動の時期、傳統や慣習と××××××する時期にしか成長し得ない。然るにオーストリアのマルクシストは、法律を學ぶやうな工合に、マルクス理論の或部分を學び、そして『資本論』が彼にあたへる利益で生活してゐる俗物なることをあまりにも暴露してゐた。古風にして、××的な、神聖な、虛飾とむだとの多いウキンナではアカデミック・マルクシストは一種の感覺的な喜びを以てお互ひに『博士さん』(Herr Doktor) と呼んだ。勞働者はしば〳〵さうしたアカデミシアンを『同志博士さん』(Genosse Herr Doktor) と呼んだ。私がウキンナに住んでゐた七年間を通じて、私はオーストリア社會民主黨の一員であり、彼等の會合に出席し、彼等の示威運動に加はり、彼等の機關紙に寄稿し、時にはドイツ語で短い演說をしたけれども、私は一度もその幹部のうちの誰とも心置なく語つたことはなかつた。私は社會民主黨の指導者達は赤の他人であることを知つた。これに反して多く

の會合やメー・デーの示威運動で、私は社會民主黨の勞働者と仲間らしい言葉を交はすことは、極めて容易だつた。

かくの如き雰圍氣のうちでは、マルクスとエンゲルスとの間にとり交された文書は、私に一番必要な最も近しい書物であつた。それは世界の他の人々に對する、私の個人的態度や私自身の思想に對する、最も大きい最もたしかな試錄を私に與へたのであつた。ウキンナの社會民主黨の指導者達は、私が用ひたのと同じ定式を用ひた。しかし私達が一つの概念に全く異つた意味をあたへるといふことを發見させるためには、彼等の心棒を五度だけ廻轉させる必要があつた。私達の一致は、一時的のものであり、皮相的であり、本物ではなかつた。マルクスとエンゲルスとの間に交された文書は、私にとつては單に理論的なものではなく、心理的な顯示であつたのである。この二人に私が直接的な心理的合性によつて結びつけられたといふ證據を、私はどの頁にも『同じ割合で』發見した。人類及び思想に對する彼等の態度は直ちに私の態度であつた。私は彼等が述べなかつたことに見當をつけ、彼等と感情を分ち、彼等と同じやうに怒り且つ憎んだ。マルクスとエンゲルスは徹頭徹尾革命家であつた。然し彼等には宗派心や禁欲主義は少しもなかつた。彼等二人、殊にエンゲルスは、いつでも凡そ人間的ならざるものは自分達には緣のないものだと斷言した。然し、彼等の革命的見識は、いつも彼等を運命の危險と人間の仕事との上に超越させた。こせ〳〵した態度は、二人の人格と相容れないのみならず、又二人の面前に出きらなかつた。野卑は彼の靴の底にさへくつゝくことが出來なかつた。彼等の評價や同情や、冗談——それがごくありふれたものである時にさへ

――には、いつも洗練された一味の高貴な精神がつきまとつた。彼等は人を酷評するかも知れない。しかし彼等は決して人と無駄話をしない。彼等は容赦をしない。然し彼等は決して裏切らない。外的な魅力、稱號、地位に就ては、彼等はたゞさう云ふものを冷やかに輕蔑するにすぎない。俗物や野卑漢が、彼等について貴族的であると考へてゐる點こそ、實は彼等が革命家としてすぐれてゐる點なのである。その最も重大な特徴はと云へば、いついかなる狀態の下にあつても、公衆の意見とは全然その意見を異にしてゐるといふことだ。私は彼等の書翰を讀んだ時、その著書を繙く時よりももつと痛切に、私をマルクスとエンゲルスの世界に非常に親しく結びつけたものが、同時に私をオーストリアのマルクシストと和解できない反對の立場に置いたのだと感じた。

これらの人々は、現實主義者であり又實務的であるのを自慢した。しかしこの點でもまた彼等は淺瀬で游いでゐるのだつた。一九〇七年、その收入を圖るため黨は黨自身の經營にかゝるパン製造所の建設にとりかゝつた。これは最も拙劣な企業であり、原則上から見てしても危險なものであり、又實際的な意味でどう考へてみても望のないものであつた。私は最初からこの企業を敵として戰つた。しかしウキンナのマルクシストの卑屈な優越感を含んだ笑顔に私は出遭した。多くの醉狂と損失の後、約二十年たつてオーストリアの政黨は、こつそりとその製造所を個人の手へ讓り渡さねばならなかつた。非常に多くの無益な犧牲を拂つた勞働者の不滿に對する云ひわけで、オットー・バウエルは、工場放棄の必要を證明するために、私が工場開說の當時に與へた警告まで遲れ走せに引用した。しかし彼は私が昔見拔いてゐたことがどうして彼に見拔くことができなかつたか、又私

一個人の洞察力の結果ではない私のその警告通りに、どうしてやらなかつたかを勞働者に向つて說明しなかつたのである。私は私の意見の基礎をパン市場の狀況にも、又黨員の狀態にも置かず、實に資本家社會に於けるプロレタリアート政黨の地位の上に置いたのである。これは獨斷的理論であるやうに考へられたが、後には最高の標準であることが解つたのである。私の警告を確めてみると眞のマルクシスト的方法がそのオーストリアに於ける贋物の方法よりもすぐれてゐるといふことになる。

ヴイクトル・アドラーは、あらゆる點に於て彼の同僚よりも遙かに傑出してゐた。しかし、永い間、彼は懷疑主義者であつた。オーストリアの鬪爭に於ては、彼の戰鬪的情熱はごくつまらないことに浪費された。將來についての豫想は漠然としてゐた。そしてアドラーは時にはこれみよがしにその豫想に脊を向けた。『豫言者の仕事はありがたくない。殊にオーストリアでは。』これは彼の演說の折返し句だつた。――『君はなんと云はうと勝手だが。』と、彼は以前に述べたオーストリア人豫言者の豫言に關して、スツットガルト會議場の控室で云つた。『然し僕としては唯物史觀に支持される政治的豫言よりも、默示錄に基く政治的豫言をとるね。』

勿論これは冗談であつた。しかしたゞそれだけではなかつた。私にとつては最も重大な事柄で私達二人を兩極端に立たせたのは、この點についてであつた。將來に對する政治的な遠大な見透しなしには、私は政治的活動も一般の知的生活も考へることが出來ない。ヴイクトル・アドラーは懷疑主義者となり、懷疑主義者として彼はあらゆるものを忍び、あらゆるもの――殊にオーストリアの

社會民主主義を骨の髓まで腐らせてしまつた×××××的精神にも――に順應した。

私とその黨の指導者等との關係は、私がドイツ、オーストリア社會民主々義の×××××に反對の意見をおほつぴらに述べたてるに至つて、ます〳〵緊張した。それは一九〇九年のことだつた。バルカン諸國、殊にセルビアの社會主義者――そのうちの一人にドミトリ・ツソヴイツチといふ男があつたが、この男は後にバルカン戰爭の一士官として殺された――と私が會見してゐるうちに、私は全セルビヤのブルジョア新聞が一種の惡意をこめた喜びをもつて、『勞働者新聞』の盲目的×××の叫びを引合ひに出し、勞働者の國際的連帶性なるものが詐欺的な作り話にすぎないのを證明するものだと叙してゐるといふ事實に、彼等が立腹し不平を鳴らしてゐるのを耳にした。私は『勞働者新聞』の盲目的×××を反駁する非常に注意深い、よく練つた論文を書いて『新時代』(ノイエ・ツアイト)に送つた。永いこと躊躇した後で、カウツキイはその論文を出して呉れた。その翌日、私が非常に親しくしてゐたロシアの亡命者のクリアチコが、黨の指導者等が私に對して腹を立てゝゐると知らしてくれた……『何んと向ふ見ずな奴だ?』

オツトー・バウエル以下オーストリアのマルクシストは、海外ニユース編輯者のライトナーが極端に走り過ぎてゐるのを內心認めた。この點では、みんな單にアドラーに雷同してゐるのにすぎなかつた。アドラーは極端な盲目的×××を默認してはゐたが、彼等を認めてはゐなかつたのである。しかし外部からの大膽な干涉にぶつゝかると、指導者達はすつかり一つ氣分になつた。その次の土曜日にオツトー・バウエルが、クリアチコと私とが坐つてゐる卓へと近寄つて來て、私を罵り

始めた。實のところ、矢繼早に言葉を浴せかけられて、私はどういつたらよいか解らなかつた。私は彼の講義口調よりもその議論の性質に呆れてしまつた。彼は可笑しい程横柄に尋ねた。――『ライトナーの論文にどんな重要な意味があるといふんだい。對外政策はオーストリア・ハンガリアでは存在しないのだぞ。勞働者のうちただの一人だつて、今までにそんなものを讀んだことがあるのかい。そんなものはちつとも重要ではないのだぞ。』

私は眼を丸くして聽いてゐた。これらの人々は×××も×××も信じないらしい。彼等はメー・デーの宣言書に×××や×××のことを書いた。しかし彼等は×××や×××のことを眞面目に考へなかつた。彼等がやけになつて出たり入つたりしてゐる蟻塚の上に、歷史が、すでに、その巨大な兵隊靴を踏みかまへてゐたことに氣がつかなかつたのである。六年たつて彼等は對外政策がオーストリアにも存在することを知つた。と同時に、彼等はライトナーや、これと同じやうな盲目的×××××から學んでゐたその同じ破廉恥な句調で、話し始めた。

ベルリンでは雰圍氣は全く違つてゐた――本質的に、ずつとよいといふわけではなかつたけれどもやはり違つてゐた。ウヰンナ・アカデミストの滑稽な官僚的態度は、そこには殆ど見られなかつた。事情ももつと單純であつた。そこでは國家主義は少なかつた。若しくは尠くともそこではその國家主義は、多くの民族から國民から成立してゐるオーストリアに於けるやうに度々、又喧しい叫び聲となつて現れて來る誘因を缺いてゐたのである。しばらくの間、國家主義的感情は黨――最も有力な社會民主黨、國際勞働者同盟(インターナショナル)の第一の提琴! の偉容のなかに溶込んでしまつたかに見えた。

吾々ロシア人にとつては、ドイツ社會主義は、母であり、教師であり、且つ生きた手本であつた。吾々は遠くからそれを理想化してゐた。ベーベル、カウツキーの名は尊敬をもつて呼ばれた。既に述べたやうに、私はドイツ社會民主々義について、不安な理論的豫戒をもつてゐたが、それにも拘らず私はこの時代、その魔力に囚はれてゐたことは拒めなかつた。これがまた、私がウキンナに住んでゐたといふ事實によつて高められた。そして私は、時々にベルリンを訪問する時、よく社會民主々義のこの二つの首都を比較しては、自ら慰めたものである、否ベルリンはウキンナではない。

ベルリンで私は、毎週行はれてゐる左翼の二つの會合に出席した。その二つの會合は、毎金曜日に『ラインゴールド』レストランで開かれた。そしてその會合での中心人物はフランツ・メーリンクだつた。カール・リープクネヒトもやつて來たが、彼はいつでも遲く來て、そして一番早く歸つて行つた。私はその會合へ最初ヒルファデイングに連れて行つて貰つた。ヒルファデイングはローザ・ルクセンブルグを、あだかもダシンスキーがオーストリアで彼女に對して抱いてゐたと同じ非常に激しい情熱を以て憎んでゐたが、それにも拘らず、當時やつぱり自分自身を『左翼』の一員だと考へてゐた。私はその會合での理論闘爭の間に、意義深いものゝあつたことを何等記憶に止めてゐない。メーリンクは頰をひきつらせて——彼は顔面神經痛を病んでゐた——自分の『不朽的な著述』の中のどれがロシア語に飜譯されてゐるかを、厭味たつぷりに私に質問した。理論闘爭の時に、ヒルファデイングが、革命家としてのドイツの左翼の人々を論じた。

『吾々が革命家だつて？　ヘン！』メーリンクが彼を遮つた。

『あの人達こそ革命家だ。』と云つて、彼は私の方を向いて會釋した。私はメーリンクをあまり知らなかつたし、それに、ロシア革命を嘲笑する俗物にあまりたくさん逢つてゐたところから、メーリンクが私をからかつてゐるのか、それともまじめに云つてゐるのかわからなかつた。しかし、彼は彼の後半生が示した通り眞面目であつた。

私は一九〇七年にはじめてカウツキーに會つた。パルヴスが私を彼の家へ連れて行つて呉れた。ベルリン近郊のフリードナウにある小ぢんまりした小さな家の玄關に立つた時、私は非常な感激を覺えた。澄んだ碧眼の、髪の毛の白くなつた、非常に陽氣で小柄な老人が、ロシア語で私に挨拶した、『ヅラヴユストヴイテ。』このことは、私がカウツキーについてその著書によつて既に知つてゐた事柄と相待つて、彼の非常にチヤーミングな人格を完全なものにした。私を最も強く惹きつけたことは、詰らないことを大げさに考へると云ふ點のなかつたことだつた。後になつて氣付いたことだが、このことは彼のその當時に於ける動かすべからざる最高權威としての地位と、それが彼に與へた內心の落付きの結果であつた。彼の反對者等は彼を、インターナショナルの『父』と呼んだ。或時には彼の友人からも、親しみの意味でさう呼ばれた。『息子にして教師』に献題したところの問題小說を書いたカウツキーの老母は、七十五歲の誕生日に、イタリーの社會主義者から『alla mamma del papa』『お父さんのお母さん）と書いた祝辭を受けた。

カウツキーは、彼の主要な理論上の使命を、改革と革命との融合にあると考へた。然し彼は改造の時期の間に智的成熟を遂げた。彼にとつて現實は單なる改造に過ぎず、革命は糢糊として歷史的な

見透しにしか過ぎなかつた。カウツキーはマルクシズムを完全な體系として受容れた後、學校教師の如くそれを通俗化した。大事件は彼の視界の外にあつた。彼の沒落は一九〇五年の革命の時代に既に始まつた。カウツキーとの理論闘爭から、何一つ得るところがなかつた。彼の思想は餘りにも角張り、乾燥し、鋭敏さと心理的洞察を餘りにも缺いてゐた。彼の批評は型にはまつて居り、彼の冗談は陳腐であつた。同じ理由で、彼は一個の憐れな辯護士に過ぎなかつた。

カウツキーのローザ・ルクセンブルグとの交際は、彼の智的活動の最旺盛期に結ばれた。然し一九〇五年の革命後間もなく、二人の間が次第に冷淡になつて行かうとする最初の兆候が見えはじめた。カウツキーはロシア革命に熱心に共鳴し、それを第三者の立場から極めて立派に說明することが出來た。けれども彼は本來、××××がドイツの土地へ入つて來ることに反對してゐた。トレプトゥ公園に於ける示威運動の前に、私が彼の家へ行つた時、私はローザが彼と激論してゐるのを見た。勿論二人はまだお互ひに『お前』と呼合つて、親しい友達として話し合つてゐたが、ローザの攻擊の中には、內心激しい怒りが藏されて居り、カウツキーの答辯の中には、あやふやな冗談によつてまぎらはされた深い內心の當惑が感じられた。私達は――ローザと、カウツキー夫妻と、ヒルファデイングと死んだグスターフ・エクスタインと、そして私と――一緒に示威運動に出かけて行つた。途中で二人の間に前よりひどい衝突があつた。カウツキーは傍觀者として止つてゐることを望み、ローザは反對に示威運動に參加することを主張した。

二人の間の對立は、一九一〇年、プロシヤに於ける選擧權獲得の闘爭の問題に直面して爆發した。カウツキーはその時、……に對して、……を展開した。それは全く相容れることの出來ない反對の傾向であつた。カウツキーの方針は、現存する制度に對して益益鞏固に順應して行くと云ふやり方であつた。然しながら、その過程に於て自滅するものは、……ではなくして……であつた。あらゆる俗學者、あらゆる官吏、あらゆる昇級可能の俸給生活者等は、彼等のためにその眞の姿をかくすべく智的な衣で假裝してゐたカウツキーに味方をした。

その時大戰が勃發した。……は、塹壕の變化によつて逐出された。カウツキーは××に對して身を順應せしめてゐたと同じ方法で、××に順應しつゝあつた。しかし、ローザは、自身の思想に對する忠誠を如何にしたら證明できるかを知つてゐた。

私はカウツキーの家で開かれたレーデブールの六十の誕生の祝賀會を思ひ出す。多くの客の中に、その時既に七十を越したアウグスト・ベーベルが居た。黨が全盛の絕頂にある頃で、みんなの政策も一致してゐたし、年寄り達は成功を口々に話し、確信を以て未來を期した。夕食中、會の主賓レーデブールは面白い戲畫を描いた。私がベーベルと彼のユリヤにはじめて會つたのは、この會の席上であつた。滿場の人々は、カウツキーをも含めて、老ベーベルの話す言葉を一語も逃がさじと熱心に傾聽した。云ふまでもなく、私もその一人だつた。

ベーベルは、どん底から勃興しつゝあつた新興階級の遲ろくはあるが力强い運動の權化であつた。このしなびた老人は、唯一の目的に向けられた辛抱强い、然し鐵の如く鞏固な意志の化身のやうに見

えた。その推論に於て、その演說に於て、その論文や著書に於て、彼は直接何等かの實際的な目的に役立たない問題に、精神上のエネルギーを浪費するやうなことは全然知らなかつた。彼の政治的な語調の悠然たる偉大さはこゝにあつた。彼の反映した階級は、餘暇ある毎に知識を得、一分一秒の時間を惜しみ、嚴密に必要なものゝみを貪るやうに吸收する階級であつた。——實に人間の肖像畫の傑作であつた。ベーベルはバルカン戰爭と世界戰爭との中間期、ブカレスト平和會議の開會中に死んだ。その通知を私はルーマニヤのプロエスシの停車場で受取つた。私はてんで、信ずることが出來なかつた。だがベーベルは死んだのだ！　社會民主々義に如何なる事態が到來するであらう？　その時突然ドイツの黨の本質について、レーデブールの云つた言葉が私の胸裡にひらめいた。その言葉と云ふのは黨員の二十パーセントは急進論者であり、三十パーセントは日和見主義者であり、そしてその殘りはベーベルに屬してゐると云ふのである。

ベーベルはハーゼを信用して、後繼者に對する希望を彼に集中してゐた。この老人は疑ひもなくハーゼの理想主義に魅倒された。ハーゼの持つてゐなかつた廣大な革命の理想主義ではなく、もつと狹い、もつと個人的な、ありふれた種類の理想主義が彼を惹きつけたのだ。彼がケーニヒスベルグで非常に金になる辯護事件を、黨の利益のためにいさぎよく犧牲にしたことを人は引例するであらう。ロシア革命家たちにとつてやりきれなかつたことは、ベーベルが彼のこのあまり勇壯でもない犧牲を黨の大會——確かイエナで行はれた——の席上での演說にまで引合ひに出し、無理に彼を黨の中央委員會の副議長の地位に推薦したことであつた。私はハーゼを十分よく知つてゐる。ある

時、黨の大會の濟んだ後で、我々はドイツの或地方への旅行に加はり、一緒にニューレンベルグを見物した。彼は個人的にはおとなしく親切な人間であつたが、然し政治的には彼の性格が要求するとほり、革命的情熱も理論的見透しもない、正直な平凡人、田舍廻りの民主々義者であつた。哲學の方面では、多少恥しさうに、カント學派だと彼は自稱した。彼は事態が危險を孕んだ時には、何時でも最後の結論を下すことを避ける傾向があつた。そして常に姑息手段に訴へて時機を待つた。獨立黨が後になつて彼を指導者として選んだのに何んの不思議もない。

カール・リープクネヒトは全然ちがつてゐた。私は、永年の知合ひの仲ではあつたが、めつたに逢へなかつた。リープクネヒトのベルリンの家は、ロシアからの亡命者の本部だつた。ドイツの××がツアーリズムに對して與へた友誼的助力に對して、抗議の叫びをあげる必要のある度毎に、リープクネヒトにたのむ、すると彼はあらゆる家々を訪ねて、あらゆる人々を叩き廻はつた。彼は教育のあるマルクシストであつたが、然し理論家ではなくて實際家だつた。彼は衝動的な、情熱的な、そして勇敢な性格を持つてゐた。のみならず、また、正確な政治的直覺、民衆と形勢に對する感覺、を先頭を切ることの無比な勇氣を持つてゐた。リープクネヒトは革命家だつた。官僚主義的な信念によつて規則的な漸進主義を採り、何時でも手を退くことの出來る準備をしてゐるドイツの社會民主々義者の本部に於て、常に半ば門外漢であつたのもこれがためであつた。私は自分の眼で、彼等がリープクネヒトを皮肉に見下げてゐるのを見たが、彼等は何んと云ふ卑劣漢と淺薄な俗學者の集りであつたことよ！

一九一一年の九月初旬、イエナの社會民主黨大會で、私は、フインランドに於ける×××××を論ずるやうに、リープクネヒトの提案によつて頼まれた。然し發言の順番の來る前に、キエフに於けるストリツピンの暗殺が報ぜられた。直ぐにベーベルが私に質問しはじめた。その暗殺はどんな意味を持つてゐるか、それに對して何れの黨が責任を持つべきであるか、私の申込んだ演說がドイツ官憲のきゐに觸れやしないだらうか、と云ふやうなことを質問された。

『あなたは恐れてゐるのですか?』と私はスツツトガルトに於けるケルヒの事件を思ひ出しながら、注意深くこの老人に尋ねた。『私が演說をすることが、何にか面倒を惹起しやしないかと恐れてゐるのですか?』

『左樣。』とベーベルは答へた、『實を云ふと、君は演說をしない方がいゝのだがね。』

『それならば別に、私は演說しなくともいゝのです。』

ベーベルはホツとして安心の吐息を漏らした。一分間の後に、リープクネヒトが當惑の色を顏に浮べて、私の所へ走つて來た『君が演說を止めろと云はれたのは本當か? そしてそれを承諾したのは本當か?』

『どうして拒絕などが出來よう?』私は自分自身に辯解しようとして答へた。『主人公はベーベル氏であつて私ではないのだから。』

リープクネヒトは怒りのはけ口をその演說の中に求めた。彼は×××によつて悶着を起すことを欲しなかつた議長席の合圖を無視して、……を攻擊した。將來に起つたあらゆる展開は、その萠芽をこれらの些細なエピソードの中に含んでゐる。

チエツクの勞働組合がドイツの支配に反對した時、オーストリヤのマルクシスト等は、職工の各々の組織の分裂を防ぐために、巧みに國際主義の假面を被つて論陣を張つた。コペンハーゲンで開かれた國際會議の席上、その問題についての報告が、プレハーノフによつて讀まれた。凡てのロシア人と同樣に、彼は腹藏なく、そして完全に、チエツクに反對してドイツ側の立場を支持した。プレハーノフが委員會の議長の候補に立つたのは、老アドラーによつて進められたのであつた。アドラーは、スラブ人の××××に對して抗議するに當つて、その中の有力な抗議者としてロシア人を持つと云ふことが、この種のデリケートな問題にとつて非常に好都合だと考へたのであつた。私はどうかと云ふと、チエツクの立場の正しさを私に納得せしめようと種々の策を弄したネメツクや、スークツプや、スメラル等の如き輩の悲しむべき×××的狹量に對しては、勿論平生から些かの好意をも持ち得よう筈がなかつたのだ。同時に私は、チエツク人に對してあらゆる非難、或ひは原則的な非難すら加へるわけには行かない程、それ程細密にオーストリアの勞働運動を注視してゐた。チエツクの黨の勞働者がオーストリア・ドイツの黨よりももつと急進的であつたと云ふこと、ウキンナの日和見主義的な指導者に對するチエツクの勞働者の正當な不滿が、ネメツクのやうなチエツクの排外主義者によつて賢明に利用されたであらうと云ふこと、これらのことについては幾多の證據があつた。

ウキンナからコペンハーゲンの大會へ行く途中、或乘換驛で私は突然パリからの歸途にあるレーニンに會つた。二人は一時間ばかりそこで、汽車を待たねばならなかつた。と、そこで重大な談話が行はれた。それは最初は非常に親しげに、そしてしまひには全く相對立した。私は、若しチェックの勞働組合の分裂の罪を負ふ者があるとすれば、それは先づ第一に、チェックをも含めての全世界の勞働者に仰々しく鬪爭をアッピールしながら、その背後で常に××××と取引することに終るところのウキインナの指導者達であると私は論じた。レーニンは非常な興味を以て私の言葉に傾聽した。彼は自分の本當に要求するものについての話を聞く場合には、特殊の注意力を持つて居り、常に話相手の話し振りをぢつと見つめ、そしてやがて相手の肩越しに向ふの空間を見つめると云ふ癖があつた。

けれども、私がロシアの社會民主々義についてフォルヴェルッ誌上に書いた最近の論文についてレーニンに話した時、吾々の理論鬪爭は非常にちがつた性質を帶びて來た。その論文は黨大會のために書かれたので、ボリシエヴイキとメンシエヴイキの兩方から鋭く批判された。その論文の中で最も強く論じた問題は所謂『××』についてのそれであつた。××が失敗に歸した後、××せる『××』と××××××は、當然革命黨そのものゝ組織を崩壞せしめる傾向があつた。ロンドンの集會は、メンシエヴイキやポーランド人や一部のボリシエヴイキからなる多數によつて、『××』を禁止した。代議員が議席から『レーニンは何んと云ふか、吾々はレーニンの意見を聞きたい！』と叫んだ時、ボリシエヴイキの連中は幾分神祕的な表情をして喜色を顏に現したゞけであつた。ロンド

ン大會の後も『××』は續けられたが、それは黨にとつて非常な打擊であつた。私がフォルヴェルッ誌に於て攻擊した中心點はこの點であつた。

『君は本當にさう書いたのか？』と、レーニンは不服さうに私にたづねた。彼の乞ふまゝに、私はその論文に書いた通りの主眼點を、記憶を辿つて繰返した。

『電報でその揭載を中止することは出來ないかね？』

『駄目です。』と私は答へた。『その論文は今朝出る筈です。——それに、あれを中止することは必要がありますか？　あれは全く正しいんだから。』

然し實を云ふとその論文は正しくはなかつた。なぜなら、その論文は、極端派を振切つてボリシエヴイキとメンシエヴイキの合同によつて黨が形成されるだらうと假定した。ところが現實では、黨はボリシエヴイキのメンシエヴイキに對する假借なき鬪爭によつて形成されてゐたのであつた。レーニンは私の論文を攻擊するやうに、大會に於いてロシアの代議員を說きつけようとした。これは、私の生涯を通じて、レーニンとの最も激しい爭ひであつた。當時彼は健康を害してゐた。彼はひどく齒を患つて顏中繃帶でくるんでゐた。ロシアの代議員の間でのこの論文とその作者に對する態度は、どちらかと云へば反抗的であつた。メンシエヴイキは他の論文、卽ちその眼目が主として彼等の攻擊にあつたところの私の論文に尠なからず憤慨した。

『彼は何んと云ふ不快な論文をノイエ・ツァイトに書いたのだらう！』とアクセルロッドは一九一〇年の十月、マルトーフへの手紙の中に書いてゐる。『恐らくフォルヴェルッに出た論文以上に不快

だ。』『トロツキーをひどく嫌つてプレハーノフは、』とルナチャルスキーは書いてゐる、『この形勢を利用して彼を統制委員會にかけようと計畫してゐた。これはトロツキーに對して公平でないと私は考へ、トツロキーを辯護した。リヤザノフと一緒に、私達はこのプレーハーノフの計畫を叩きつぶさうと盡力した。』

ロシアの代議員の大多數は、間接的な報告によつてこの論文を知つてゐるにすぎなかつた。私はそれを讀んで貰ひたいと要求した。ジノヴイエフはその論文を攻擊するために讀むのは全然不必要なことだと論じた。然し大多數の者は彼に贊成しなかつた。そしてそれは聲高く讀まれ、且つ私の記憶するところによると、リヤザノフによつて飜譯された。論文が朗讀される前の議論は、その論文をとてつもない化物にしてしまつてゐたので、論文の朗讀は熱狂の絕頂をすぎてゐた。論文は全く無害なものに聞えた。裁決の結果、代議員は絕對多數でそれを咎めないことに傾いた。このことは、今日私がその論文をボリシエヴイキ派についての誤つた評價として攻擊することを、少しも妨げない。

チエックの勞働組合の問題に關して、大會の席上、ロシアの代議員はプラーグから提出した決議に對抗して、ウキンナの決議に贊成の投票をなした。私はその修正を動議しようとしたが、然し何等成功しなかつた。結局のところ、私は、まだ社會民主々義の政策全體に對して、如何なる種類の修正を加へるべきであるかを、確信してゐなかつたのだ。だが修正は、政策全體に對する神聖なる鬪爭の宣言といふ性質を持つべきものであつた。この動議を吾々は一九一四年まで提出しなかつた。

第二章　新しい革命への準備

反動期の間、私の仕事の大部分は、主として一九〇五年の革命を批判すること、及び理論的研究によつて次の革命への進路を拓くことであつた。外國へ着いて間もなく、私は二つの講演を持つて亡命者と留學生の間を遊歷した。二つの講演と云ふのは『ロシア革命の運命、竝びに現下の政治的情勢』と『資本主義と社會主義、竝に××××の展望』とであつた。はじめの方の講演は、一つの永久革命としてのロシア革命の將來は、一九〇五年の體驗によつて確められた、と云ふことを示す點に目的を置いた。そして第二の講演は、ロシア革命を××××と結びつけた。

一九〇八年の十月、私はウキンナでロシア語の新聞『プラウダ』(眞理)を發刊した。『プラウダ』は勞働大衆に訴へる新聞であつた。それはガリチヤの國境を越えたり、黑海を渡つたりして、祕密にロシアへ持込まれた。發行は月二回で、三年半の間繼續されたが、それでも非常に莫大な努力を要した。ロシアとの祕密の通信には多大の日子を要した。おまけに、私は黑海の祕密の海員組合と接觸し、彼等の機關新聞の發行を助けてゐた。

『プラウダ』に對する主な援助者はA・A・ヨツフエであり、彼は後に有名なソヴイエットの外交官となつた。ウイーン時代が私達の交際の始まりだつた。ヨツフエは偉大な智的情熱の人であり、

個人的に知合つてゐる凡ての人々に對しては、非常に親切で、目的のためには、確乎たる正義感を持つてゐた。彼は『プラウダ』に金と勞力との兩方を與へた。ヨッフェは神經衰弱を病み、その當時ウキンナの有名な專門醫アルフレッド・アドラーに精神分析をやつて貰つてゐた。この醫者はフロイドの弟子として出發したが、後になつて師に反抗し、自ら個人心理學なる一派を創設した。ヨッフェを通じて私は精神分析學の諸問題に通ずるやうになつた。この方面では尙多くのものが漠然として居り、不安定で、そして空想的な自分勝手な考へを許してゐたが、それにも拘らずそれは私にとつて多大の魅力があつた。もう一人の貢献者はスコベレフと云ふ學生で、彼は後にケレンスキー政府の勞働大臣になつた。私達は一九一七年に互ひに敵として相會つた。『プラウダ』の書記として暫くの間ビクトル・コップがゐたが、彼は今ソヴイエットの大使としてスエーデンに派遣されてゐる。

『プラウダ』の活動と關聯して、ヨッフェは革命の仕事のためにロシアへ行つた。そしてオデッサで逮捕され、永い間牢獄へ閉籠められ、それからシベリアへ追放された。彼は一九一七年の二月、二月革命の結果として漸く自由の身となつた。二月革命に次いでの十月革命に於ては、彼は最も活的動な役割の一部分を受持つた。病弱の身を持つた彼ではありながら、その勇敢さは全く素晴しいものであつた。セントペテルスブルグの近くの破丸に荒された野に突立つた、どちらかと云へば巖乘な體格をした、一九一九年の秋の彼の姿を、現在目の前に見るが如くにはつきりと思ひ出すことが出來る。ヨッフェは外交官のさつぱりした着物を着て、あたかもウンテル・デン・リンデンの街を

散歩するかの如く、落着いた顏に靜かな笑みを湛へ、手に杖を持つて、すぐ傍で炸裂する破丸を、足を止めも早めもしないで、不思議さうに眺めてゐた。彼は思慮深い熱意のあるアッピールのできる雄辯家であり、文章家としてもそれと同じ特質を發揮した。どんな仕事にも、彼はこまかい正確な注意を拂つた。それは多くの革命家の持つてゐない特質であつた。レーニンはヨッフェの外交上の働きに對しては、非常に尊敬してゐた。私は非常に永い年月の間、他の誰よりも親しく彼と交つてゐた。彼の友情に對する忠實さは、主義に對するそれと同じく、他に比較し得るものを見ない。ヨッフェはその生涯を悲劇的に終つた。ひどい親讓りの病氣が、彼の健康をひそかに侵しつゝあつた。又亞流によつて導かれたマルクシスト等の放埒な迫害に惱まされ、同じ程度のひどさで身を侵されつゝあつた。病氣と闘ふ機會を奪はれ、且つ又政治的闘爭をも剝奪されて、ヨッフェは一九二七年の秋に自殺した。死の直前彼が私に書いた手紙は、スターリンの手先によつて彼の鏡臺から盜み出された。一友人にのみ見せるために書いた文句は削除され、ヤロスラウスキーその他によつて歪められ、詐られて、すつかり骨拔きにされた。然しながらこのことは、ヨッフェの名が革命の書物の中に、最も嵩高な名前の一つとして記述されることを妨げはしない。

反動の暗黑時代に於て、ヨッフェと私は確信を持つて新しい革命を待ち、一九一七年に實際に展開されたその方法に於いて、それを心の中に描いてゐた。その當時はメンシエヴイキで、今はスタ―リンの追隨者であるスヴルチコフは、その自叙傳の中にウキンナの『プラウダ』について書いてゐる。

『この新聞の中で、彼（トロツキー）はロシア革命の「永久性」の問題を執念深く頑强に主張し續けた。それは革命がはじまつてから後、××××××××××××××××××××××××××ことに成功するまでは、革命は決して終りを告げないものであると云ふことを論じてゐる。彼はボリシエヴイキとメンシエヴイキの兩方から、そのロマンチシズムと七つの道德的罪惡を嘲笑され、非難された。然しそれらの攻擊に對しては頑として動かず、忍耐と確信を以て自己の主義を固守した。』

一九〇九年、私はローザ・ルクセンブルグのやつてゐるポーランドの雜誌に、プロレタリアートと農民の××××××を次のやうに明かにして置いた。

『地方的なクレチン病（甲狀線が肥大して白痴となる病氣）は、農民運動の歷史的な呪ひである。ロシア革命の最初の波（一九〇五年）は、農民の局限された政治知識にぶつゝかつて碎けたのであつた。彼等は村にゐて、自分の土地を獲得するために××××しておきながら、彼等は××を着飾つて××××××しに出掛けた。革命中のこの出來事は、一聯の殘酷な實物教育として考へられよう。歷史はこの實物教育によつて、小作人の頭の中に、彼等の土地に對する地方的な要求と、××××××××とを結合せしめるところの鎖についての意識を、打込んだ。』

フインランドでは社會民主々義が、自作農の問題に對するその立場によつて、農民の間に非常な勢力を占めてゐるが、私はそれを例に引いて次のやうに結論した。『都市と農村に於ける大衆の新しき、且つ遙かに擴大された運動の指導權を行使する曉には、吾々の黨は如何に偉大なる勢力を農

民階級の上に持つことであらう。勿論、來るべき新しき波によつて必然的に吾々が曝らされるべき政權の誘惑に對する懸念のために、××を捨てないといふ條件の下に。』

これは何んとまあ、『農民階級を無視する』とか『土地の問題を飛躍する』とか云ふ言葉と、如何によく似てゐることか！

一九〇九年十二月四日、革命が絶望的に、そして永久的に踏み躙られたかの如く見えたその時、私は『プラウダ』に次の如く書いた。『今日といへども、吾々を取圍む反動の黑雲を透して、吾々は新しき十月の勝利の影映を見つめる』と。自由主義者は云ふまでもなく、メンシエヴイキも同樣にこの言葉を嘲弄して、それを煽動のための單なるスローガン、中味のない空語に過ぎないと考へた。『トロツキーズム』なる新語を發明した名譽を擔ふミリウコフ教授は、次のやうに捩返へした。『プロレタリアートの××と云ふ觀念は全く子供ぢみてゐる。そんなものを支持するやうな人間は、全歐洲に一人もないであらう』と。それにも拘らず、一九一七年に、この自由主義的な教授の偉大なる確信を搖動かしたに相違ないであらうところの事件が勃發したのだ。

反動の時間の間、私は世界的規模と國家的規模に於ける、商工業を研究した。革命に對する關心が私にそれをやらせたのだ。私は商工業の消長と、勞働運動と××××の進展して行く段階との間の關係を發見しようと思つた。私は政治學を經濟學に機械的に依存させるやうな考へ方を避けようと、警戒した。その間の相互作用は、必ずや全體的に見た全過程の結果であらねばならないからである。

ニューヨークの株式取引所が、所謂『暗黒の金曜日』の破綻に際會した時、私は尙ほヒルシュベルグの小さなボヘミア人町に住んでゐた。この混亂は××××の前兆であつて、それはロシアも同樣に包括して、日露戰爭とそれに次ぐ革命の場合と同樣、ロシアを根柢から動搖させるべきものであつた。それについて如何なる結果を期待することが出來るか。黨に於て一般に受容れられた見解は、黨派的區別なしに、この危機は××××と云ふことに一致した。だが私は反對の解釋をなした。凡そ××××と××の後、危機は××××よりも寧ろ反對に銷沈せしむる效果を持つものである。それは××××に對する自信をひそかに覆へし、、、、、、、、ものである。かゝる情勢の下にあつては、××××のみが××××を結束させ、その血管に新鮮な血潮を注ぎ、彼等自らに自信を取戻させ、將來の鬪爭を可能ならしめることが出來る。

この解剖は非難と不信に會つた。黨の公認の經濟學者たちも同じやうに、反革命の下にあつては××××は不可能だと云ふ意見を提出した。私は然し反對に、私の議論を××××と、それが喚びさますところの××××の新しい波の必然性の上に基礎を置き、その後に起る新しい××××が、恐らく××××の刺戟を提供するであらうと云ふにあつた。この豫後診斷は文字通り適中したのだ。××××は反革命に拘らず一九一〇年にやつて來た。そしてそれと共に××××がやつて來た。一九一二年のレーナ金鑛に於ける××××は、××××を各地にあげた。一九一四年、危機が明白にやつて來た時、セントペテルスブルグは再び××××と化した。大戰の前夜、ツアーを訪問したボアンカレーはこれを目擊した。

この理論的な、政治的な證明は、私の將來の活動にとつて無限の價値があつた。コムミュニスト・インターナショナルの第三回大會に於て、私が將來の××××のための條件として、戰後のヨーロッパに於ける××××の必然性を主張した。その時、私に反對する代議員の投票數が壓倒的な勢力を示した。そして最近、再び、私はコムミンターンの第六回大會に對して、同大會が支那に於ける經濟的及び政治的情勢の破綻を理解することに全然失敗した、その責任を問ふ必要があつた。その失敗と云ふのは、支那革命は慘めな敗北を喫したにも拘らず、その國家が次第に經濟的に危機に瀕して行くが故に依然進行を續けて行くであらう、と云ふ當てにならない希望に表らはれてゐる。

過程の辯證法は實際には大してやゝこしいものではない。けれども、生きた事實の中に一々それを發見するよりも、それは公式化され易いのである。何れにしても、この問題を考究するに當つて、政治的に重大な過誤と怖るべき結果に導くところの偏見の最もありがちなものに、絕えず、ぶつかつてゐるのである。

メンシエヴイズムの將來と黨內部の組織の問題に關する見解では、『プラウダ』は決してレーニンの態度の正確さには到達し得なかつた。私は、やはり、新しい革命は、一九〇五年の場合と同樣メンシエヴイズムをして革命の道程をたどらしめるだらうと期待してゐた。然し私は準備としてのイデオロギーの選擇や、政治的鍛練の重要性を見くびつてゐた。黨の內部的發展の問題に關して、私

は一種の××××宿命論の罪をまぬがれない。この立場は誤つてゐたが、然しそれはコムミンターンの陣營にあつて私の現在を批判する人々の大部分の特色たる、思想を失つた官僚主義的宿命論よりは遙かに優つてゐた。

一九一二年、ロシアに於ける政治的曲線が明白な上向を來した時、私は凡ての社會民主々義各分派の委員の合同協議會の召集を企てた。ロシアの社會民主々義の黨の統一を復活させたいと云ふ希望を持つてゐる者は、私だけではないと云ふことを示すために、私はローザ・ルクセンブルグを例に引くことが出來る。一九一一年の夏、彼女は次のやうに書いてゐる。

『凡ゆる行きがゝりにも拘らず、左右兩翼が協議會を召集することを強ひることが出來たならば、黨の統一は、今でも救はれるであらう。』

一九一一年八月、彼女は繰返してゐる。『統一を救ふ唯一の道は、ロシアから送られた民衆の一般會議を開くことである。何故ならロシアの民衆は凡て平和と統一を望み、國外にある鬪雞(しゃも)達を正氣に歸らしめることの出來る唯一の力を代表してゐるから。』

ボリシエヴイキ自身の間にも矢張その時和解の傾向が非常に強く、從つてこのことがレーニンを一般會議に參加させるであらうことを私は期待してゐた。けれどもレーニンはあらゆる力を振つて合同に反對して立つた。これに續いて起つた事件の全行程は、レーニンの正しかつたことを明確に證明した。會議は一九一二年八月、ボリシエヴイキの參加なしにウキンナで開かれた。そして私は、ボリシエヴイキの不平組の一二三の異つたグループやメンシエヴイキとの『ブロック』の中にゐる自

分自身をはつきりと見出した。この『ブロック』は何等共通の政治的根據を持つてゐなかつた。何故なら私は凡ての重要な事柄にはメンシエヴイキと一致しなかつたから。彼等に對する私の鬪爭は會議直後から再び繰返された。毎日の如く、社會革命黨と民主々義的改良主義者との二つの傾向の根本的對立から、猛烈な論爭が起つた。

『トロツキーの手紙によつて』と、アクセルロッドは會議の少しばかり前の五月四日に書いてゐる。『私は、彼が、吾々とそして又ロシアにゐる吾々の同志達と、……共通の敵に對して一緒に戰ふために眞實に同志らしく理解し合ひたいと云ふ希望は、些かたりともこれを持合せてゐなかつたと云ふ、非常に悲しむべき印象を受けた。』私がメンシエヴイキと聯合して、ボルシエヴイキと戰ふ意志は、事實に於ても、また、かりそめに抱く筈はなかつた。會議の後、マルトーフはアクセルロッドへの手紙の中で、トロツキーが『レーニン＝プレハーノフ流の文學上の個人主義と云ふ最も惡い習慣』を復活させつゝあるとこぼした。二三年前に出版されたアクセルロッドとマルトーフとの通信は、私に對して完全に僞りのない憎しみを抱いてゐたことを證據立てる。私を彼等から隔てる大きな隙間にも拘らず、私は彼等に對して憎しみの感情は少しも持たなかつた。今日でもなほ、私は前にいろ〳〵のことで彼等のお蔭を被つたことを、感謝の念を以て思ひ出すのだ。

八月のブロックの挿話は、亞流時代の凡ての『反トロツキー』の教科書に掲げられてゐる。その中には、無經驗者や無智な人々に都合の良いやうに、ボリシエヴイズムが十分に武裝した歷史の實驗室から生れて來たと云ふことを暗示するやうな工合に、過去が描かれてゐる。――ところが、メ

ンシエヴイキに對するボリシエヴイキの闘爭の歴史は、また合同に向つての絶間なき努力の歴史でもあるのだ。レーニンは一九一七年にロシアに歸つた後、メンシエヴイキ主義者國際派に近づかうと最後の努力を試みた。同じ年の五月私がアメリカから歸つて來た時、各地方に於ける社會民主々義の組織の大部分は、合同したボリシエヴイキとメンシエヴイキとから成立つてゐた。一九一七年の三月、レーニンの到着の二三日前に開かれた黨會議の席上、スターリンはツエレテリーの黨との合同問題を熱心に說いてゐた。十月革命後に於てすら、ジノヴイエフ、カーメネフ、ルイコフ、ルナチャルスキー、その他多くの人々が、社會革命黨及びメンシエヴイキとの提携のために狂氣の如く闘つてゐた。そしてこれらの人々は、一九一二年のウヰンナでの合同會議についての髪の毛のよだつやうな物語によつて彼等のイデオロギー的存在を支持しようと、今日努力してゐる人々なのだ！

キエフスカヤ・ミスル（キエフの思想）紙が私に戰時通信員としてバルカン地方へ行くことを申込んだ。その申込みは八月會議が遂に失敗に歸した後だつたので、尙更私に好都合だつた。私はほんの暫くの間でもいゝから、ロシアの亡命者達の關心から逃れねばならないと考へた。私がバルカンで過した數ヶ月は恰度戰爭中で、戰爭は私に多くのものを敎へた。

一九一二年九月、私は戰爭の勃發は可能であるばかりではなく、既に避け難いものだと信じつゝ、東へ向つて旅を續けてゐた。然しベルグラードの町をあてどもなくさまよつて、豫後備兵の永い列を見た時、歸國の道が鎖され、戰爭が明日にも來さうなのを自分の眼で見た時、私の親しく知つて

ゐる人々は、既に武裝して戰線に立つてゐること、そして彼等が人を殺すか人に殺されるかの、そのどちらかの最初の人であらうと云ふことを知つた時——その時、私が頭の中や文章で非常に輕々しく取扱つてゐた戰爭が、、、、、、、、、、、、なものに見えた。私は×××××××××××××行く聯隊を見つめた。——それは保護色の軍服を着て、木皮の靴をはき、帽子に綠の小枝を挿んだ步兵第十八聯隊だつた。足に穿いた木皮の靴や、帽子にはさんだ綠の木の枝は、完全に整へられた出征の身仕度と相待つて、あだかも××××××××××××××の如き感じを與へた。その瞬間、それらの木枝や木皮の靴の如く、それ程深く×××××××××を、私の意識の中に灼きつけたものはなかつた。現在の時代は一九一二年の習慣と感情から如何に遠ざかつてゐることだらう！ 私はその時ですらも、歷史的過程に於ける人道主義的な、道德的な考へ方が、、、、、、、、、、、、、、、、を理解してゐた。けれども當時必要だつたものは、說明ではなくして熱情であつた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、感じが、私を捉へた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、と云ふこと、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、の情が、强く私を捉へた。

その後二三日にして宣戰が布告された。

『ロシアにゐる諸君はそれを知り、それを信ずる』と私は書いた。『、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。私の心は、日常生活の事物、雞肉や煙草や裸足の鼻垂れ小僧と、、、、、、、、、、、、、、、、、、、との組合せを、受容れることが出來ない。私は戰爭が宣告され、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。』然し私はこ既に開始されたことを知つてゐる。

れを徹底的に、長期間にわたつて學ばざるを得なかつた。

一九一二年から一三年の年月は、私をセルビヤ、ブルガリヤ、ルーマニヤと、そして又戰爭とに非常に接近せしめた。このことは、多くの點から見て、單に一九一四年のためのみでなく、一九一七年のためにも重要な準備であつた。私は論文で、親スラブ主義の虛妄について、一般の××××について、×××××××××について、×××××××××××××××××××××について、攻擊を開始した。キエフスカヤ・ミスルの編輯者は、トルコの負傷兵や捕虜に加へたブルガリヤ人の殘酷さを描き、ロシアの新聞紙の、、、、、、、、した私の原稿を發表するだけの勇氣を持つてゐた。このことは憤怒した自由主義諸新聞からの抗議の嵐を捲起した。一九一三年一月三十日、私はトルコ人に對するスラブの殘酷さについて、ミリウコフに對する『非公式の』質問を新聞紙に發表した。官僚ブルガリヤの常設代辯人ミリウコフは窮地に追はれ、しどろもどろに答辯した。この論爭は數週間の間續いた。政府新聞は――これは必然のことだが――『アンテイド・オートー』と云ふペンネームは、亡命者であるばかりでなくオーストリア＝ハンガリーの手先の變名だといふヒントを洩らした。

ルーマニヤにゐる間に、私はドブルヤヌ・ゲレアに近づき、ラコフスキーとの友情を濃やかにした。ラコフスキーと私とは一九〇三年に知合ひになり、その後づゝと交際を續けてゐる。

七十年代のある一人のロシアの革命家が、露土戰爭の前夜、途中ふとルーマニアに止つた。彼はどうすることも出來ない事情のために、暫らくの間そこに引留められた。二三年たつてからゲレア

と云ふ名で、ルーマニヤの知識階級の間に非常な勢力をかち得たが、やがて更に彼は、勞働者の中の急進分子の間にも同樣に勢力を擴げて行つた。社會的基礎の上に立脚した彼の文學批評は、ルーマニヤのインテリゲンチアの間に、××××をつくる重要な媒介の役目をなした。當時彼は美學と個人倫理學の問題から入つて、彼等を科學的社會主義に導いた。ルーマニヤの殆ど凡ての黨に屬する政治家の大多數は、少くとも彼等の若い間は、ゲレアの指導下に一種のマルクシズムの小さな學校を卒業した。それは然しながら、彼等の成熟した時代に於て、反動的な××政策を實行することを妨げはしなかつたのだ。

シーエッチ・ヂー・ラコフスキーはヨーロッパ社會主義運動に於て、國際的な名聲を採つた一人である。ラコフスキーはブルガリヤの生れで、ブルガリヤの眞中にあるコーテルの町に育つたが、彼はバルカンの地圖の色分では、ルーマニヤ人民であり、學問の方面ではフランスの醫者であり、交際關係や思想や文學的勞作の方面ではロシア人である。彼はバルカン地方の凡ての言葉と、ヨーロッパの四ヶ國語を使ふ。彼は四つの社會主義の團體――ブルガリヤとロシアとフランスとルーマニヤのそれ――の內部でいろんな場合に活潑な働きをした。しかも結局それはソヴイエット聯邦の指導者の一人になるために、コミンターンの創始者になるために、ソヴイエット人民委員會のウクライナ委員長になるために、又イギリスやフランスに於けるソヴイエットの外交代表になるために――そして最後に『左翼』の反對派の人々の運命を分け持つために過ぎなかつた。ラコフスキーの個人的な特質、彼の大膽な國際的見透し、彼の性格の無限な氣高さ等は、これらの性質と全然反對

の人格を持つてゐるスターリンに特に憎まされる原因となつた。

一九一三年には、ラコフスキーはルーマニヤ社會黨の創始者兼リーダーであつた。その黨は後にコミンターンに加入した。その黨は當時目醒しい發展をしてゐた。ラコフスキーは日刊新聞を刊行し、うまく切盛りしてゐた。ハンガリヤから程遠からぬ黑海の海岸に、彼は遺産として受繼いだ小さな地所を持つてゐたが、彼はその收入でルーマニヤの社會黨と、いくつかの革命家の團體と、外國にゐる個人連を支持した。毎週彼は三日の間をブカレストで過し、記事を書いたり、中央委員會を指導したり、會合や街頭の示威運動で演說したりした。それから彼は、物を縛る麻繩や釘やその他の田舍生活に必要な附屬品を持つて、汽車で黑海の海岸へ驅けつけるのである。そして外へ飛出して、新しいトラクターの作業を見たり、フロックコートの儘でトラクターを追かけて溝の中を走つたりする。それから一日の後には、公の會合や非公式の會議に出席するために町へと急いでゐる。私は或時、彼のこの旅行にお伴をしたことがあるが、彼のあり餘る精力、疲勞と云ふことを知らないこと、絕えざる精神的緊張、無名の人々に對する親切と思ひやり等には、全く驚嘆する外なかつた。マンガリヤの街路で、移住民や貿易商に向つて語る時、ラコフスキーは十五分足らずの間にルーマニヤ語からトルコ語へ、トルコ語からブルガリヤ語へ、それから更にドイツ語やフランス語へと言葉を變へる。そして最後に隣接する地方に多く住んでゐるロシアのスコプチ人とロシア語を話すのが常だ。彼は地主として、醫者として、ブルガリヤ人として、それからルーマニア人民として、しかも主として社會主義者として會話を續ける。こんな有樣で、彼はこのかけ離れた、のんきな、小さな海邊の町の街頭で、生ける奇蹟の如く吾々の目に映じた。そしてその同じ夜、彼は再び汽車で鬪爭の戰場へと驅けつけるのである。ブカレストにゐる時でも、ソフイヤにゐる時でも、又バリーやセントペテルスブルグやカールコフにゐる時でも、彼は常に氣樂で落ちつき拂つてゐた。

私が二度目の外國亡命の年月はロシアの民主々義の新聞に原稿を書いて過ごした年月だ。私はミユーニツヒの新聞『シンプリシスシムス』に關する永い論文を持つて、キエフスカヤ・ミスルに初見參した。私は『シンプリシスシムス』に對して、T・T・ハイネの書いた漫畫がまだ辛辣な社會的感情を持つてゐた頃一時非常に興味を感じ、創刊號から全部目を通した。私が新しいドイツの小說を讀むやうになつたのも同じ頃であつた。革命氣分の減退につれてヴエデキントに對する興味がロシアに增大したために私はヴエデキントに就て長い社會的評論までを書いた。

ロシアの南部では、『キエフスカヤ・ミスル』がマルクシストの色彩を持つた最も人氣のある急進的な新聞であつた。このやうな新聞は、貧弱な工業的生活、未發展の階級的對立、智的な急進主義の昔ながらの傳統を持つたキエフにのみ存在することが出來たのだ。『ムータテイス・ムータンデイス』は、『シンプリシスシムス』がミユーニツヒに現はれたのと同じ理由で、キエフに現はれた急進的な新聞である。私はそれにとても風變りな問題について、時には、檢閲のことで非常な危險まで冒して書いた。短い論文も長い準備の仕事の結果であることもあつた。勿論合法的に發行され

てゐる黨外の新聞には、書きたいと思ふことも書けなかつた。然し私は云ひたくないことは決して書かなかつた。キエフスカヤ・ミスルに書いた私の論文は、或るソヴイエットの出版所から數卷の本になつて出た。私はその内容を訂正する必要がなかつた。レーニンが非常な勢力を持つてゐた中央委員會の正式の同意を經て、ブルヂョア新聞に書いたといふことを今更云ふ必要もあるまい。

吾々がウキンナ到着後直ちに郊外に移つたことは前に述べた。『ヒユッテルドルフは私達の氣に入つた。』と私の妻は書いた。『通常春だけしか貸さない別莊を私達は秋と冬の間借りたので並はづれた家が手に入つた。窓の外には山が見え、凡てが赤黒い秋の色が見える。道路を通らないで裏門から直ぐに廣々とした田園へ行ける。冬の日曜日には、橇やスキーで山へ登るウキンナの人々が、小さな色のついた帽子を冠つてスエーターを着て通り過ぎる。四月になると家賃が二倍になるので引越しなければならないが、その四月になると菫が既に庭一面に咲きはじめ、その芳香が開放した窓から部屋部屋を充たす。こゝでセリヨーが生れた。私達はもつとデモクラチツクなシーヴアリングへ移らねばならなかつた。』

『子供等はロシア語とドイツ語を話した。幼稚園と學校ではドイツ語を使ふので、そのために彼等は家で遊んでゐる時でもドイツ語を使ふ。然し彼等の父か又は私が彼等に話しかけると、直ぐにロシア語を使へるのだつた。若し私達がドイツ語で話しかけると、子供達はどぎまぎしてロシア語で答へる。彼等は又後になつてウキンナの方言を覺え込んで、流暢にそれをつかつた。

『彼等は好んでクリヤツコーの家庭を訪問したが、そこでみんなの者——主人夫妻と大きくなつた

子供達——から非常に可愛がられ澤山の面白いものを見せて貰ひ、その他いろ〳〵もてなして貰つた。子供達は又、當時ウキンナに住んでゐた有名なマルクス派の學者リヤザノフに可愛がられた。彼は放れ業のやうな體操をやつて少年の想像力を捕へ、亂暴な方法で彼等に訴へた。ある時弟の方のセリヨーザが、床屋で髪を刈つて貰つてゐて、私が傍に附添つてゐた時、彼は私を手招きで近くへ寄せ、耳に口を當てゝ「リヤザノフのやうな刈り方にして欲しい。」と囁いた。彼はリヤザノフの亘きな、滑らか禿頭が氣に入つてゐたのだ。それは類のない獨特の頭髪だつたが、然し誰のよりもよかつた。

『リオヴイキが學校へ入つた時、宗教の問題が持上つた。當時行はれてゐたオーストリアの法律によると、子供は十四歳になるまでは兩親の信仰の宗教々育を受けねばならなかつた。私達は如何なる宗教をも持つてゐなかつたので、子供達のためにルーテル派を選んだ。ルーテル派は子供達の魂と同樣負擔となることも少ないと考へたからである。それは放課後學校で女教師によつて教へられた。小さな顔の表情から見て、リオヴイキはこの學課を好んでゐたらしいが、然しそれを口にすることが必要だとは思はなかつた。或晩、彼が寢床の中で何にかつぶやいてゐるのが聞えた。私が質問すると彼は答へた。『お祈りです。お祈りの言葉は本當に綺麗で、まるで詩のやうですね。』

私の最初の外國亡命以來、兩親は外國に來てゐた。兩親はパリーに私を訪問した。それから當時田舍で一緒に住んでゐた私の長女*を連れてウキンナへやつて來た。一九一〇年にはベルリルへ來た。その頃には兩親は既に私の運命をすつかりあきらめてゐた。最後の苦情は、確かドイツで書い

た私の最初の書物であつた。

＊著者の第一回の結婚によつて生れた娘である。――英譯者。

私の母は非常に重い病氣（菊花狀菌病）にかゝつてゐた。彼女の生涯の最後の十年間を、彼女は仕事を止めないで、病氣を重荷の一つくらゐに考へてよく忍んだ。彼女はベルリンで片の腎臟を取去つた。その時彼女は六十だつた。その手術後二三ヶ月の間は非常に健康が優れて、症狀は醫學界で有名になつた。けれどもやがて間もなく病氣は盛返へし、二三ヶ月後、遂に不歸の客となつた。彼女が勞働の生活を送り、子供達を育て上げたところのヤノウカで、彼女は遂に死んだのだ。

私の生涯中の永いウキンナ生活のエピソードを完成するには、ウキンナでの最も親しい友人は老亡命者S・L・クリヤツコーの家族であつたと云ふ事實について語らねばならない。私の第二回目の外國亡命中の經歷の凡ては、この一家族と密接に絡まり合つてゐる。この家庭は政治的及び智的興味、音樂に對する愛、ヨーロツパの四ヶ國語、いろんなヨーロツパ人との交際の中心であつた。一九一四年四月のこの家族の主人公セミョン・ルヴオヴイチの死は、私と私の妻にとつて大きな悲しみであつた。レオ・トルストイは嘗て彼の非常に才能ある弟セルゲーについて、彼は大藝術家たるには、只二三の小さな缺點がある、と書いたことがある。セミョン・リヴオヴイッチについても同じことが云へる。彼は政治に於て素晴しい拔群の地位をかち得るに必要な才能は持つてゐたが、只それに必要な缺點を持つてゐなかつた。クリヤツコフの家族の中に、吾々は常に友情と援助を見出し、時にはその兩方を必要とした。

『キエフスカヤ・ミスル』からの私の收入は、吾々の質素な生活を支へるには十分であつた。然し『プラウダ』の仕事が忙しくて、金の貰へる原稿は一行も書く餘裕がないと云ふやうな月がしば〳〵あつた。危機はやつて來た　妻は質屋通ひを覺へ、豐かだつた頃に買込んだ書物を古本屋へ賣らねばならなかつた。吾々の質素な家財が、家賃の代りに差押へられたこともしば〳〵あつた。赤ん坊が二人居たが保姆は居なかつた。吾々の生活は私の妻にたいして二重の負擔であつた。けれども妻は、革命の仕事のために私を助けるだけの餘裕と精力を持つてゐた。

第三章　戰端

『セルビヤ人を屠殺しにしろ』――ウキンナでは、かうした文句が、掲示板に張出され、この言葉は街上の子供たちの口癖になつてしまつた。末の子のセリヨーザは、例によつて、あまのじやくの本能に驅られて、ジーヴイリングの公園で叫んだ。――

『セルビヤ人、ばんざい！』

セリヨーザは眞黑に腫上つた眼と、インターナショナルな政治行動の經驗を持つて歸つて來た。セントペテルスブルグの前英國大使ブカナンは、『ロシアがすつかり一變したやうに見えた』あの『八月の驚くべき上旬』を、追想記の中で昂奮して語つてゐる。他の政治家連の思ひ出にも同樣

な昂奮があるが、ブカナンほど徹底的に支配階級のひとり良がりの低能さを體現してゐないやうである。ヨーロッパの首都は、みんな、同様に『驚くべき』八月の日を經驗してゐた。みんなお互ひに××××の仕事のために、がらりと『轉形』した。

オーストリア＝ハンガリーの愛國的情熱は、特別、すさまじいものだつた。ウヰンナの町の製本屋の丁稚で獨逸人とチエツコ人の血を混へたポスピシュルや、私達の買ひつけの八百屋のマレッシユ夫人や、御者のフランクまでが、陸軍省前の廣場に押しかけて行くとは、一體如何したことだらう？　考へか？　何にか民族的な思想か？　けれども、オーストリア＝ハンガリーは民族的な思想の否定そのものゝ國なのだ。いやいや、事の原動力は他にあらねばならない。

、、、

私は親しみ深いウヰンナの大通りを歩いて、實に夥しい群集が一流の圓舞場に詰めかけてゐるのを見た。——既に希望に眼ざめた群集だ。だが、すでにさうした希望の一小部だけが、實現されてゐたのではなからうか。郊外からやつて來た荷物人夫や、洗濯屋や、靴屋や、徒弟や、若者などゝ云つた連中が、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、？　××は誰にでもその影響を及ぼしたが、しかし、、ことを感じた。このことは一見パラドックスと思はれるかも知れない。けれど私は、ハップスブルグ家の武器の榮譽を示威してゐるウヰンナの群集の氣分の中に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、を見た。歴史上、×××××××××であつたのも不思議ではない。

とは云へ、××××が××に對した態度と××に對する態度との間には、如何に大きな相違——一層嚴密に云へば、如何に鮮やかた對照——のあることだらう！　ブカナンにとつては、その頃が驚くべきものに見え、ロシアは一變したかに見えた。これに對して、ウヰッテは一九〇五年の革命の最も悲慘な當時を叙して『ロシアの壓倒的大部分がすつかり發狂したかに思はれた』と書いてゐる。

××と同様、××は、、、、、、、、、、、、、、、、、、。だが、××は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。これに反して、××は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、——が、やがて、また××、、の望みは、プラーグでも、トリエストでによつて××されてしまふ。、、、も、ワルソーでも、チフリスでも、、、、の當時には、全然跡形もなかつた。一九一四年の九月、私はロシアに宛てゝ書き送つた。『動員と宣戰布告とは、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、した。けれども、これは、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。』
と。

この檢閲濟みの文句は、勿論、單にオーストリア＝ハンガリーのことを云つたわけではなく、同時に——否、本當のところ、特にロシアのことを云つたものである。

事件は次々に群り起つた。先づジョレスの暗殺事件が報導された。新聞紙は意地惡な嘘でかためられてゐたので、少くとも數時間は、疑惑と望みをかける餘地があつた。けれどもかうした餘地もぢきに消滅してしまつた。ジョレスは既に敵に殺害され、味方の黨からも裏切られてゐたのである。

オーストリアの社會民主々義の指導者達の、、、、、、、、、を、私はどう見たか？ 中には、、、、、、、、、、、、、して、セルビア人やロシア人をば——××と××の間の見さかひもつけずに——××する者もあつた。實のところ、かうした連中は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、であつた。後年陸軍大臣の役を勤めたハンス・ドイッチュが、やがてはセルビヤ人の『夢魔』をオーストリヤから追拂ふべきこの戰爭が、××××なものであり、××なものであることを公然と語つてゐたのを、私は記憶してゐる。ヴイクトル・アドラーを首領として、この戰爭は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、である、と考へる者もあつた。しかしながら、彼等の消極的期待は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、に役立つたにすぎないのである。また中には、甚だ愼重な思慮を裝うて、一八七一年のドイツの戰捷——それは、、、、、、、、、に、またそれと同時に、、、、、、、、に、一大勢力を與へた——を想ひ起すものもあつた。

八月一日、ドイツはロシアに對して宣戰を布告した。それ以前からもすでにウヰンナにあつたロシア人は引上げを開始してゐたのである。八月三日の朝、私はロシア人亡命者の取るべき方策に關して社會主義代議士達と協議するため、ウヰンツアイレに向つた。フリードリッヒ・アドラーは、間もなくウヰンナに開かれる筈だつた國際社會主義大會の書類やスタンプを、自分の部屋で——單なる平常の惰性から——いぢくつてゐた。けれども、××は既に過去に葬りさられて、別な力がとつて代りつつあつた。父のアドラーは、直ちに私を本部即ち警視總監ガイエルの所へ連れて行かうと、云つた。

自動車を驅つて邸に赴く途中、私は、獨り戰爭のみが惹き起した××××にアドラーの注意を促がして見た。『××××××××××××××××。』と、彼は即座に答へた。『、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、なんだから。××××××など、まだほんの手始めに過ぎない。、、。』

精神病醫が本業ではあるけれど、アドラーは屢々政治問題——『時にオーストリアの』——に言及し、精神病理學の見地から皮肉な批評を下した。だが御自身の息子が、政治的な殺人事件をやるだらうなどゝはてんで思つてはゐなかつた。戰爭の直前夜、私はアドラーの息子の編輯してゐる『鬪爭』紙上に、個人的なテロリズムの無用を說いた論文を發表した。編輯者が好意を以てその論說を

是認したことは意味深長である。フリードリッヒ・アドラーがやつたテロリスト的行動は、、、、、、、、、、、、、、にすぎなかつた。彼はその××を吐出してしまふと、またもとの轍に歸つたのである。

＊フリードリッヒ・アドラーはヴイクトル・アドラーの息子で、一九一六年十月二十一日にオーストリア・ハンガリーの首相シユチユエルグ伯を射殺した。そのために死刑を宣告され、後に、一九二八年の革命に減刑されて禁錮となり、一九一八年の革命に釋放された。――英譯者。

ガイエルは、次の朝までにはロシア人もセルビア人も悉く捕縛されるだらうと、意味愼重にほのめかした。

『だから立退け、とお仰言るんですか？』

『早ければ早いほどいゝ。』

『いゝです、ぢや家族を連れて明日スキスへ行きませう。』

『フム……。明日と云はず今日中にさうなさつた方がいゝですな。』

この會話を交はしたのが午後の三時である。その夕方の六時十分には、私はもう家族と一緒にチユーリッヒに向ふ汽車に腰を下してゐたのである。即ち七年の歳月と、書籍と、論説と、未定稿の論文――その中にはロシア文化の將來に關してマサリツク教授を反駁した論文もあつた――を後に殘して、ウヰンナを去つたのである。

私は、ドイツの社會主義を生ぶな氣持で理想化することは、もうすつかりなくなつた事實にも拘らず、ドイツ社會民主々義の××を報じた電報には、宣戰布告以上にびつくりさせられた。『ヨーロッパの社會主義黨は』と、私はすでに、一九〇五年頃書いたことがあり、その後も再三繰返して云つた。『彼等自らの保守主義を發達せしめ、この保守主義は、大衆が社會主義に目覺めるにつれて、益益強くなつて行く。この見地から見れば、その社會民主々義は、或一定した時期に於て、、、、、、、、、、、、、、、、、、にあたつて、事實上の妨害となることは必定である。換言すれば、プロレタリアート黨内の宣傳家社會主義者の保守主義者は、一定の時期になると、プロレタリアートの、×××××××××を妨害するであらう。』私は、××××にインターナショナルの幹部役員連が、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、とは期待してゐなかつた。がそれと同時に、私は社會民主々義の連中が、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、といふ考へも、承認できなかつた。

八月四日のドイツ議會の會議の報告を掲載したフオールヴエルツ紙がスキスに到着したとき、レーニンは、それを、、、、、、、、、、、、、、、ために發行した僞せものと斷定した。といふのも、あれ程批判的知力の所有者であつたに關らず、レーニンがドイツ社會民主々義をそれほどにも信頼してゐたことを語るものである。同時に、ウヰンナの『勞働者新聞』も、××××××××××の日を『ドイツ國民の偉大なる日』であると揚言した。これがアウステルリッツの大切である――彼自身の『アウステルリッツの戰』であつた。私はそのフオールヴエルツ紙を僞せものだとは考へなかつた。ウヰンナでの第一印象は、既に私に、最悪の場合を覺悟させてゐたのである。

それにも拘らず八月四月の投票は、私の生涯の悲劇的な經驗の一つとなつてゐる。エンゲルスだつたら何んと云ふであらうか？　と、私は自問して見た。答ひははつきりしてゐた。ベーベルだつたら如何に行動してゐたであらうか？　かうなると、はつきりしない、だがベーベルは死んでゐた。理論上の見透しも××××××もない正直な田舍まわりの民主々義者のハーゼが、殘つてゐるばかりであつた。この男は難局に際會すると、決まつて、決斷を回避し、姑息手段に訴へて待つことを好んだ。形勢は彼にとつてはあまり重大なものであつた。そして彼の背後にはシャイデマンやエーベルトやウエルゼのやうな同類が控へてゐた。

スキスは、フランスとドイツを、中立的な、つまり、おとなしい程度に、且又、非常に小さな規模で、反映してゐるに過ぎなかつた。かうした情勢を一層明瞭にするためでゞもあるかの如く、スキス議會には、同じ名前を持つた社會主義代議士が二人ゐた。一人はチューリッヒ出のヨハン・ジツグであり、も一人はゼネバ出のヂヤン・ジツグである。ヨハンは極端なドイツ贔負であり、ジアンは、もつと極端なフランス贔負であつた。スキスといふ鏡に映じた國際社會主義の姿はこんなものだつた。

戰爭が初まつてから二ヶ月ばかり經つた頃、私は、チューリッヒの或街路でモルケンブール老人に出遇つた。彼は、、、、、、、、ために來たのであつた。『世界大戰の行程をどのやうにあなたの黨は描いてゐますか？』といふ私の質問に對して『幹部』の先輩は答へた。

『今から二ヶ月以内にフランスを片付ける。それから東へ轉じてツアーの軍隊を片付けるつもりだ。で、三ヶ月、或ひは長くて四ヶ月後には、歐洲に永遠の平和をもたらすつもりだ。』と。

私はこの答へを一字一句日誌に書留めておいた。勿論、モルケンブールは、彼一個の豫想を述べたのではなくて、單に社會民主黨の正式の意見を述べたにすぎないのである。その頃、セントペテルスブルグ駐在の佛國大使は、戰爭はクリスマス以前に終熄するとして、ブカナンに五ポンドの賭をしたと云ふ。否、私達『空想主義者』は、かうした社會民主黨や外交團の現實主義的な紳士よりも、今少しく先見の明があつた。

私達一家の戰時避難所スキスは、私が一九〇五年の秋、ロシア革命の報知を受取つたフインランドの下宿『ラウハ』を想ひ起させた。もちろん、スキスの軍隊も動員されてゐたし、バーゼルでは砲聲さへ聞くことができた。しかし、スキスといふ巨大な下宿の主な心配は、チーズの過剩と馬鈴薯の不足であつて、喩へて云へば、戰爭の雄叫びに取圍まれた靜かな沙漠の綠林にも似てゐた。このスキスのオアシス『ラウハ』(平和)を後にして、再びセントペテルスブルグの工藝研究所のホールの勞働者達の中へ歸れる日も、あまり遠くはないと私は思つた。けれども、豫期したその日は、三十三ヶ月後のことだつた。

現在起りつゝあつた事柄に就て、自分の考へをはつきりさせたいといふ慾望は、私を日記に向はせた。八月九日、すでに、私は日記に書いた。——

『こゝでの問題は、過誤を犯したといふ問題でもなければ、一部の日和見主義者の行動や、議會の壇上における曖昧な聲明や、バーデン大公園の社會民主黨員が、、、、、、したことや、フラン

スの軍國主義者の經驗や、×××に轉落しつゝある一部の指導者や——こんなことの問題ではなくして、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、ゐた一つの時期、、、、、の時期にインターナショナルが崩壞したといふ問題である。』

同じ八月の十一日に私は書いてゐる。

『×××××××の覺醒——この覺醒こそは最初から×××であることを必要とする——だけが新たなインターナショナルの基礎を築くであらう。、、、、、、、、、、、、、であらう。』

私は活潑にスキスの社會黨の生活に加はつた。其處の下層階級即ち勞働者層の間ではインターナショナリズムは殆ど無限の共感を以て迎へられてゐた。私は黨の演說會毎に、私の立場の正しさに對する自信を二倍にして歸つて行つた。成員がすでに國際的であつた『一致』と稱する勞働者の聯盟が最初に私の支柱となつてくれた。私は、其處の幹部との合意によつて、九月初旬、××××××××××××した宣言書を起草した。組合の幹部は、黨の指導者達を招待し、その集會で私はその宣言書支持の原稿をドイツ語で朗讀することになつてゐた。黨の指導者達は、たうとうやつて來なかつた。彼等はさうした劒呑な問題について立場を明かにすることは危險だ、と考へたのである。卽ち彼等は、當分の間、ドイツ及びフランスの×××の『極端派』に關する、爐邊批評に止まつてゐることの方が、得策であると考へたのである。『一致』の集會は、殆ど滿場一致その宣言書を承認した。そして、幾多の曖昧な點があつたにも拘らず、宣言書は黨內の輿論に決定的な刺戟を與へた。恐らく、、、、、、以來、これが×××のための、最初のインターナショナリストの文書であつたらう。

私がラデックと親交を結んだのもその頃である。彼は戰爭の初め頃ドイツからスキスに來てゐた。ドイツの政黨では彼は極左翼に屬してゐた。だから私は、彼が私と同じ意見を持つてゐるだらうと期待した。事實、彼は社會民主々義の指導的地位にある一派をひどく戰鬪的な態度で非難した。この點では彼と私とは一致した。けれど、意外にも、話し合つてゐる間に私は、彼が、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、——、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、といふことを承認してゐないのを發見した。

『いゝや』と彼は私に答へた。『全體として人類の生產力は、それほどに發達してゐませんよ。』と。

ロシアの生產力は、、、、、、、、、、、、、、、、に未だ不十分だといふことを私は始終聞かされた。けれど私は、進步的な資本主義國の革命的政治家の口から、かうした答へが出ようとは思ひも寄らなかつた。私がチューリッヒを發つて後間もなく、ラデックはその同じ『一致』で長い原稿を發表し、資本主義世界は、まだ×××××を迎へる用意が出來てゐないと論じた。

ラデックの論文や、戰爭の初め一般社會主義者の十字路だつたチューリッヒは、スキスの著述家ブルウプベッヘルの多少興味ある回想錄中に記錄されてゐる。面白いことに彼は、當時の私の見解を『平和主義者』だと云つてゐる。彼の所謂『平和主義者』といふ言葉が何にを意味するのか、私には判斷が出來ない。彼は、當時の彼自身の進步をその著述の表題に現はして『きざな一市民からボリシエヴイキへ』と題してゐる。私は、當時の彼の見解をはつきり知つてゐたし、この表題の前

半に對しては滿腔の讃意を表し得る。けれど次の半分に至つては保證の限りではない。

ドイツ及びフランスの社會主義新聞が、官許的社會主義の道德的並びに政治的破綻の姿をはつきりさせて來た時、私は日誌の筆を擱いて、××とインターナショナルに關する政治的パンフレットを書いた。ラデックとの初めての會話に刺戟されるところあつて、私はそのパンフレットの序文に、××××は、一方には××××に對する、他方には××の境界に對する、世界的規模の資本主義的生産力の反逆にほかならないといふ見解を極力强調した。

このパンフレット『××とインターナショナル』は、他の凡ての書物と同じやうに、先づスキスで次いでドイツ、フランス、後にアメリカ、最後にソヴイエット・ロシアで、色々な運命に出遭してゐる。だからそれについて私は一言しなくてはならない。私のパンフレットはドイツの極く下手な一ロシア人の手でドイツ語に譯された。チューリッヒの一大學教授ラガーズが自らその譯書に訂正の勞をとつてくれた。かうしたことが機緣となつて、私はラガーズの人柄を知るに至つた。

ラガーズは信仰心の深いクリスチャンで、おまけに教養も職業も神學者ではあつたが、スキスの社會主義の極左翼に位置を占めてをり、、、、、、、、、、、、、、、、、、、を是認し、自らも××××××××に贊同する旨を言明してゐた。私はラガーズ夫妻の政治問題に對する眞劍な態度に惹きつけられた。――全然無理想なオーストリアやドイツやスキスその他の社會民主黨の幹部とは全然類を異にした態度だつた。聞くところによれば、たしか、ラガーズはその後思想のために、大學教授の椅子を放擲しなければならなかつたといふ。ラガーズが屬してゐた階級によつて、このこ

とはむしろ當然である。私はこの異數の男に大いなる敬意を拂つてゐた。しかしながら、彼と話してゐると、私はこの非凡な人間に對する尊敬の念と同時に、お互ひをへだてる、薄い、だが到抵突き破ることのできないヴエールのやうな、生理的な感覺に近いものを感ずるのであつた。彼は徹底的な神秘家であつた。自分の信念を私に押しつけたり、語つたりはしなかつたけれども、彼の言葉の中では、××××までが、何んだか別の世界の臭ひを帶びてゐて、私に不快な戰慄を起させるのであつた。

物心づいた頃から既に私は、初めは直覺的な次いで意識的な唯物論者であつた。私は別の世界の必要を感じたことがないばかりではない。ダーウヰンとキリストを同時に是認しようとするやうな人々と、心理的な接觸を保つことはできなかつた。

兎も角も、そのパンフレットはラガーズのお蔭で、見事なドイツ文に飜譯された。一九一四年の十二月すではスキスからオーストリア、ドイツまで流布された。スキスの左翼黨員のエフ・ブラッテン達がその便宜を計つてくれた。もと〳〵そのパンフレットはドイツ語諸國のために計畫したものであつたから、先づ第一に當時第二インターナショナルの指導的な政黨であつたところのドイツ社會民主黨に鋒を向けたものであつた。××××の冒頭を取つてゐたハイルマンと云ふジャーナリストはこのパンフレットを讀んで、狂氣ぢみてはゐるがその狂氣ぢみた點で筋みちが立つてゐる、と評したことを私は記憶してゐる。これ以上の賞讃は到底望み得るものではない。勿論、私のパンフレットが聯合國の宣傳の巧妙な道具だと云ふことは十分ほのめかされてあつた。

その後、私はフランスで、思ひがけなくも、フランスの新聞紙でスヰス經由の報道に接した。それには、トロツキーはチユーリツヒで書いたパンフレットの廉で、或るドイツの法廷で缺席裁判の結果懲役を宣告されたとあつた。このことから私は、パンフレットが急所を衝いたなと思つた。ホーヘンツオーレルンの裁判官達は、服役は急ぐに及ばないといふ情誼ある判決を下してゐた。聯合國側の中傷者やスパイ連中は、私がドイツ參謀本部の一手先にすぎないと云ふことを見事に發かうと努めた。けれどもさうした場合、何時でもこのドイツ法廷が私に下した判決が、彼等の崇高な意圖の障害物となつてゐたのである。

しかしながら、かうしたことも、フランス官憲が、私のパンフレットを『ドイツもの』といふ理由から、フランス國境で差押へる妨げにはならなかつた。エルヴエの主宰する新聞に私のパンフレツトに對するフランス官憲の不當な處置を駁論する生ぬるい記事が出た。私の信ずるところでは、その記事はマルクシストとして相當名のあるG・H・ラツパポールの筆に成つたものであらう。兎に角彼は一生を駄じやれに捧げた人間の中でも、一番澤山駄じやれを書いた男である。

十一月革命が濟んで後、ニユー・ヨークの一出版業者は私のドイツ語のパンフレットを堂々たるアメリカ本として上梓した。出版業者自ら書いた聲明によれば、時の大統領ウイルソンはホワイト・ハウスから電話で、その書物の校正刷を送つてくれと要求したさうである。當時、大統領は彼の十四ケ條を作成してゐたのである。しかも、事情に通じた人々の報道によれば、ウイルソンは彼の得意の定式では、一ボリシエヴイキに先手を打たれた事實をかくし切れなかつたさうである。二ケ月

の間にアメリカでこのパンフレットは一萬六千部の賣行きを示した。次いでブレスト＝リトウスクの媾和の時期が來た。アメリカの新聞紙が私に對して猛烈な攻擊を浴びせかけ、このパンフレットは市場から姿を消してしまつた。

ソヴエート聯邦では、私がチユーリツヒでものしたパンフレットは、その頃までに數版を重ね、、、、、、、、、、、、、、、、、、を學ぶ教科書となつてゐた。このパンフレットが共產黨インターナショナルの『市場』から消えたのは、『トロキイズム』の發見された一九二四年後のことである。が今日なほそれは、革命前と同じく發禁の厄に遭つたのである。

ほんとに、書物にもそれ〴〵の運命があるやうに思はれる。

第四章　パリーとチンメルワルト

一九一四年の十二月十九日、私は『キエフスカヤ・ミスル』の軍時通信員として、フランスの國境を越えた。戰爭に一層接近する機會が得られるといふところから、私は新聞社の申出を一も二もなく快諾したのである。巴里は悲慘だつた。夕方になると町は眞暗の闇の中に消えた。時折、ツエツペリン飛行船が空中訪問をやつた。ドイツ軍のマルヌ進擊を喰ひ止めた後も、戰爭は、絶えず、深刻に殘酷になつて行つた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、とゝもに、歐洲

全土を掩ふ無限の混沌の中に、破壞の機械はその自動的な力を伸ばしてゐた。資本主義文明は、人間の厚い頭蓋骨を粉碎しようとあがいてゐる間に、自ら一つの矛盾に墮して行つたのである。

ドイツの軍隊がパリーに近づいて、フランスのブルジョア愛國者共がパリーを退去してゐた時、二人のロシア人亡命者が、ロシア語の小さな日刊新聞を始めた。その目的は、××のためにパリーに幽閉されたロシア人に對して戰爭の動靜を說明し、××××××××の全く消え失せてはゐないことを知らせるにあつた。その第一號が發行される前の新聞社の資本金は、かつきり、三十フランだつた。『正氣な』人ならば、誰だつてそればかりの資本でもつて、日刊新聞の發行が出來ると思ふ者はあるまい。實際のところ、編輯者や寄稿家の提供した勞力があつたに拘らず、尠くとも一週に一度は、殆ど逃れ道がないとさへ思はれる危機に遭遇した。だが何んとかして切拔けた。新聞に忠實な植字工は食物に飢ゑ、編輯者たちはフランの狩集めに町中を奔走した。さうして、やつと期日通りに新聞が出た。こんな風で絕えず資金難と××××に苦しんで、廢刊したり、新しい名前の下に再刊したりしながらも、この新聞は一九一七年三月の革命まで、どうやら二ヶ年半繼續した。パリーに到着するや私は盛んに『ナシエ・スロヴォ』(我等の言葉)——當時は『ゴロス』(聲)と呼ばれてゐたこの新聞紙のために活動し始めた。日刊新聞といふものは、展開して行く形勢の眞只中で、私の足場を定めるのに非常に役立つことゝなつた。『ナシエ・スロヴォ』紙によつて得た經驗は、後に私が軍事に深く關係しなければならなくなつた際に、非常に役立つた。

私の一家は一九一五年の五月にフランスに來た。私達は若い伊太利畫家で、友人のルネ・パレス

が貸してくれたセーヴルの小さな家に收まつた。春はことの外美はしく、特にその綠は私達を慈しむが如く思はれた。けれども喪服を纏ふ婦人の數は絕えず增加し、——父を失ふ子供の數は日に日に增加して行つた。兩軍共に塹壕戰に入つた。出ようにも出口がなかつた。地の中にもぐり込んでしまつた。クレマンソーが彼の新聞に據つてジョッフルに攻擊の矢を向けてゐた。反動的な地下的團體では、××××が準備されつゝあつた。その報道が口傳へに傳へられた。『ル・タン』紙では數日間議會のことを『驢馬』といふ名稱で呼んでゐた。けれども『ル・タン』紙は、××××に向つて國民的統一を保持せよと强く要求した。

ジョレスは既に世を去つてゐた。私は在りし日の彼の面影を偲ぶよすがにもと、彼が殺害されたカッフエ・デュ・クロアッサンを訪ねた。そこでジョレスの跡形でもみつけたいと思つた。政治的には私は、無論彼と相容れなかつた。けれど何人も彼の强い個性の引力を感じないではおれなかつた。國民的傳統や、形而上學的道德律や、被壓迫者に對する同情や、詩的想像で出來上つてゐる彼の心は、ベーベルのそれが、平民の偉大な素朴さを見せてゐたと同じやうに、はつきりと貴族の特徵を見せてゐた。けれど彼等は二人共、それ〴〵殘した遺產の上に高く聳えてゐた。

私は、パリーの民衆大會で、インターナショナルの大會で、諸委員會で、ジョレスの演說を聞いたことがある。しかも聞く度每に、私は彼の演說を初めて聞く思ひがした。彼の演說は決して常規に墮することがなかつた。元來彼は決して同じことを繰返さずして、常に新たなる自己を發見し、彼の魂に潛在する豐かな資源を動員してゐた。濕布の如く莊嚴な威力と、偉大な和やかさ——それ

が、一層高遠な精神的教養を反映するが如く彼の顏に輝いてゐた——とが融和してゐた。その雄叫びは、時として斷崖の岩を顚落せしめ、雷の如くに怒號し、地を搖るがすこともあつたが、彼自身は決して人の言葉を受容れない聾にはならなかつた。あらゆる反對を常に注意し熱心に探し求め、すみやかにそれを取上げてそれを受流した。或時は疾風の如く無常に、或時は教師の如く、又、弟に對する兄の如く寛大におとなしく、彼は已の前に横はる凡ゆる反抗を排除した。ジョレスとベーベルとは兩極端に立つてゐたが、同時に第二インターナショナルの二つの峰であつた。兩者共に國民的であつて、ジョレスはラテン人特有のはげしい修辭を持ち、ベーベルにはプロテスタントの溢味があつた。私は別々の意味で彼等二人共好きだつた。ベーベルは天壽を全うし、ジョレスはその働き盛りに不慮の凶刄に斃れた。けれど二人共死すべき時に死んでゐる。彼等の死は、恰も第二インターナショナルの進歩的竝に歴史的使命の終結を劃してゐるのである。

フランスの社會黨は完全に墮落の狀態にあつた。ジョレスに代るべき者は一人も居なかつた。古い『×××××』のヴアリアンが、極端な排外主義の精神で毎日の論說を書いてゐた。

私は、嘗て、黨員及び勞働組合員を以て組織した實行委員會で、この老人に遭つたことがある。ヴアリアンはその時彼自身の脫殼、——レイモンド・ポアンカレー時代の過激革命黨員の戰鬪の傳說を背負ひ込んでゐるブランキーズムの脫殼のやうに見えた。ヴアリアンに取つては、人口の增加が拘束され、思想上にも生活上にも保守的經濟生活と保守的な思想を持つた戰前のフランスが、唯一の進步的な又活動的な國であり、これに接觸する他國民を精神的生活に覺醒させる唯一の選ばれた、また自由な國民であるやうに思はれてゐたのである。彼の社會主義は、排外主義であり、その排外主義は救世思想的であつた。マルクス派のリーダーであり、長い間民主々義の術策に抗爭して來たジュール・ゲードは、彼の潔白な道德的權威を、、、、、、『、、』の前に投出すことだけは出來ることを立證した。

何にもかもめちやくちやだつた。『××をこしらへろ、でなきあ媾和しろ。』の著者マルセル・センバーがゲードをブリアン內閣の一員に推薦し、ピエール・ルノーデルが暫時社會黨の首領となつた。——結局誰かゞジョレスの空席を充たさなければならなかつたのである。ルノーデルは一生懸命に、暗殺された首領のゼスチュアや怒號を眞似ようと努めた。彼の背後には、ロンゲが自信の缺如を極端なラヂカリズムに裝うて控へてゐた。彼の態度は、マルクスも孫のことまでは責任を持たぬといふことの記念品であつた。勞働總同盟の會長ジュオーの代表する官許的サンジカリズムは、戰二十四時間のうちに消滅してしまつた。彼が平和時代に×××『××』したことも、要するに、戰時に×××××するためであつた。かの××的道化役で、一日前まで極端な×××××だつたエルヴエは、廻れ右はしたものゝ、やはり、極端な×××××から極端な×××××になつたと云ふのみで、相變らず獨りよがりの、道化役者であることに變りなかつた。きのふまでの自分の思想をあざ笑ふ彼の心苦しさを二倍するためか、彼の機關紙は依然として『內亂』といふ名稱を保つてゐた。

要するに何にもかも一切、、、、、、、、、、、、、、ゐるやうに見えた。誰だつて獨語

せずには居られなかつた。――『いや〳〵、吾々はもつともつとしつかりした性根を持つてゐるんだ。成行などに吃驚りアせん。何にかかうしたことのあるのは、とうの昔から氣付いてゐたし、それに今はもつと豫想できる。吾々の前途に横はつてゐるものに對しては相當覺悟してゐるのだ。』ルノーデル派やエルヴェ派やその同類がカール・リープクネヒトに、遠方から秋波を送つて來た時、私達は幾十度、拳を握り緊めたことか！　黨の中にも組合の中にも彼等の反對分子はゐた。けれどこの反對分子は、殆ど生命の萠芽も見せなかつた。

パリーに居るロシア人亡命者の中での大立物はたしかに、メンシエヴイキのリーダーのマルトーフであつて、私がこれまで出遭はした人々の中では、最も豐かな天分に惠まれた者の一人であつた。しかしながら、運命がこの男を革命期の政治家にしたまではよかつたが、肝腎の意志力の源泉を具へてやらなかつたことが、この男の不幸といふものである。何にか大事件が起る度に彼の精神動搖が無殘に暴露された。私は一九〇五年と一四年と一七年の三度の大變動を通じて、彼を見守つて來た。マルトーフの事件に對する反作用は、最初は殆ど常に××的であるが、自分の思想を發表しないうちに、彼は何時でも凡ゆる方面からの疑惑に捉はれてしまふ。豐かな、しなやかな、そして多樣な才智には意志の支柱が缺けてゐたのだ。

一九〇五年アクセルロードに送つた手紙の中で、彼は自分の思想をまとめ得ないことを歎いてゐる。事實、彼は、反動主義者が政權を握る日まで、自己の思想を統一することが出來なかつた。×××には、彼は、また、アクセルロードに向つて、事件は自分を發狂の瀬戸際まで驅りやつたこ

とを歎いてゐる。一九一七年には、たうとう彼は躊躇する歩みを左翼に向け、次いで彼は、聰明さに於ては彼の足許にも寄りつけない連中、ツエレテリーやダン――ダンの如きはどの點に於ても彼に及ばない――に、彼一派の指導權を讓つた。

一九一四年十一月十四日マルトーフはアクセルロードに書いてやつた。

『吾々はプレハーノフと理解し合ふよりも、むしろ、現在、インターナショナル内部の日和見主義との闘爭の役割を演じようと準備しつゝあるレーニンと、容易に理解し得るだらう。』

だが、かうした氣持も彼には長つゞきがしなかつた。私がパリーに着いた頃彼は早くもへこたれつつあつた。

『ナシエ・スロヴオ』での、私とマルトーフの協力は、最初から猛烈極まる闘爭に發展して行つて、果てはマルトーフが編輯局から退き、遂には維持會員もやめることになつた。

私がパリーに到着した直後、マルトーフと私とは、サンジカリストの機關紙『勞働者生活』（ラ・ヴー・ウーブリエ）の編輯者の一人であるモナテを探し當てた。以前教師をつとめ、後には校正係であつたモナテは、見たところパリー勞働者の定型であり、頭腦の男であると同時に人格者であつた。而かも彼は××××やブルジョア國家に對しては、一瞬間と雖も妥協を許さなかつた。しかし、それをどう切拔けたらいゝか？　私達の意見は別れた。モナテは××をも政治闘爭をも『××』した。けれど、××は彼を無視して、彼がサンヂカリスト排外主義に對する攻擊を公表するや、××は彼に赤い着物を着せたのである。モナテを通じて、私は新聞記者のロスメルと知合つた。彼も亦アナーキスト・サンジ

カリスト派に屬してゐた。けれども形勢の進むにつれて、彼がゲード主義者よりも根本的にはマルキシズムに接近してゐることが判明した。其の頃から私はロスメルと友情の羈絆によつて結びつけられた。そしてこの友情の羈絆は、戰爭や、革命や、ソヴエートの權力や、反對黨の沒落などの試練に堪へて來たのである。この頃私は、フランスの勞働運動にたづさはつてゐる數人の活動的な勞働者で、前には知らなかつた人達を初めて知るやうになつた。彼等の中には金屬勞働者組合の書記メールハイムがゐた。彼は拔目がなくて、お追從者で、打算的な男であつたが、其の最後はあらゆる點で不幸であつた。それから新聞記者のギルボー、この男は後に、、、、、、、、、、の廉で、缺席裁判で死刑の宣告を受けた。そのほか、桶屋組合の『親父』ブールデロンや、如何したら×××××××に赴く道が發見されるだらうかと考へてゐる教師のロリオその他多くが居た。私達は毎週『ケー・ド・ゼンマップ』に會し、時々大人數で『グランジュ・オ・ベエレ』に會して、××と××事情の『內部』報告を取りかはしたり、×××××の批判をやつたり、××××××××の徴候を捕へたり、また尻込みする連中を勵ましたり、將來を描いたりした。

一九一五年九月八日私は『ナシエ・スロヴオ』紙上に書いた。

『また、凡ることがあるに拘らず、吾々は、苦惱することなく、政治的な懷疑に陷ることなく、血まみれの記念日を迎ふるものである。××××××に、吾々××××××××××××は、解剖、批判、豫想の旗印を固執した。吾々は、××××が安價に提供するばかりでなく、ボーナスまで添へて提供して來るところの『××的』眼鏡を通じて觀察することを拒絕した。吾々は事物をあるがまゝに見、眞の名稱を以て呼び、事物の論理的な結果を豫見しつゞけてゐる。』

しかも、十三年後の今日、なほ、私はこの言葉を繰返すことが出來る。愛國社會主義をも含めて、官僚政治思想に超越しようとする氣持――この氣持は今も尙ほ私達に殘つてゐる――は非條理な自惚れの結果ではない。その中には何等個人的なものはなかつた。吾々の理論的立場の自然的な結果である。なぜなら私達がより高い山頂に立つてゐたのだ。私達の××××は、とりわけて、私達に、、、、、、、、、、、、、、、を見せてくれた。誰も知つてゐるやうに、、、、、、、、、、、、、、を恃んでゐたのである。このやうな樂天的な輕率な判斷は、いくらでも引合ひに出すことが出來る。

『私の同僚のフランス人は、一時』と、ブカナンは其の回想錄中で述べてゐる。『戰爭はクリスマス以前に終るだらうと云つて、私に五磅の賭をした程樂觀してゐた。』

から述べてはゐるものゝ、ブカナン自身にした所で、戰爭の終局を復活祭以後にひきのばして豫想しはしなかつた。かうした意見に反對した私達は、一九一四年の秋以來、來る日も來る日も、機關紙に、其の筋がどんな豫言を下さうともそんなことに頓着なく、、だらう、と繰返した。また私達は、『ナシエ・スロヴオ』紙上で、始終、繰返しておいた。――たとひ、、、、、、、、、、、、、したところで、硝煙のすつかり消去つた時、××××は、、、、、、、、、、、、、を大きくしたものになり終ることであらう、と。私達はアメリカの世界的獨裁をはつきり、豫見してゐたのである。『××

××は』――と私達は一九一六年九月五日に百回目の文章を繰返した。――『この戰爭のお蔭で、賭金を×××に與へ、××××は全世界を所有するに至るであらう。』

これより餘程以前に、私の一家はセーブルからパリーの、オードリイ小路へ移つてゐた。パリーは日に日に荒廢して行つた。辻時計は一つ一つ止まつた。『ベルフォールの獅子』は、何んのわけだか、汚たない藁を口から喰み出してゐた。戰爭は益々深く地中へもぐり込んで行つた。××××し、×××××××××××××ぢやないか！――これが××××の叫びだつた。××！××！この叫びから、恐るべき狂氣のヴェルダンの激戰が起つたのである。その頃私は、軍隊の檢閲官の雷光を避ける方法で、『ナシエ・スロヴオ』紙上に次のやうなことを書いた。

『ヴェルダンの戰鬪の軍事的意義がどんなに大きからうと、それの××××は更に大きい。ベルリンその他の場所では〔原文通り！〕人々はこの『××』を欲してゐたのであり、――また××を實現するであらう。聽け！ ヴェルダンの下には、×××××××××××××。』と。

一九一五年の夏、イタリーの代議士モルガリイがパリーにやつて來た。ローマ議會の社會主義議員團の書記長で、素朴な折衷主義者であつた。彼の來た目的は、國際會議に英佛の社會主義者の參加を慫慂することに在つた。或るグラン・ブールヴールのカフエの露臺で、私達は二三の社會主義代議士やモルガリイと會合を催した。この社會主義議員達は何んのわけだか、『左翼』と自稱してゐた。會話が專ら平和主義的な座談に止まり、國際的連結恢復の必要の一般論を繰返してゐるうちは無難であつた。ところが、モルガリイが、スキスに旅行する爲に旅行券を××する必要を悲壯な低

聲で呟くと――明かに彼は本態の『カーボナリ』的光景に甦されてゐた――一座の人々の顏に不快な色が浮んだ。すると誰だつたか名前を記憶してゐないが、兎に角その中の一人は速座に給仕を呼んで私達全部のコーヒー代を拂つてしまつた。モリエールの亡靈のやうな男が、露臺をこつそり逃出したかと思ふと、ラブレーの亡靈もそれにつゞいて消えた。それで、會もお流れになつた。私は、マルトーフと一緒に歩いて歸る道すがら、陽氣に、高笑ひしたが多少腹立たしくないわけではなかつた。

*イタリーの炭夫黨のこと。イタリー共和黨の祕密結社。こゝでは『祕密結社的の』といつた意味――譯者。

モナテとロスメルとは軍隊に召集されてゐたので、スキス行きに加はることは出來なかつた。私は、穩健な平和主義者のメールハイム及びブーデロンと共に會議に赴いた。結局旅行免狀を××する必要は私達には無かつたといふのは、政府も戰前の慣例を、全然、捨てゝしまつてゐたわけではなかつたし、正規の旅行免狀を發行してくれたから。會議の組織は、ベルヌの社會黨の首領、グリムの掌中に在つた。當時、彼は、一生懸命になつて、彼の黨の俗物的な水準――それは彼の生來の水準でもあつた――の上に出ようとしてゐたのである。

彼は、ベルヌから十粁あまりも離れた山の上のチンメルワルトと呼ばれる小さな村落で會議を開く準備をしてゐた。そこで代表者達は、四臺の乘合馬車に分乘して山へ向つた。道々行きかふ者はこの見馴れぬ行列に好奇の眼を瞠つた。第一インターナショナルが創立されて五十年にもなるの

に、インターナショナリストがありつたけ寄合つて、四臺の馬車に乘込めるんだからなど〻代表者達は冗談云つたりした。けれど一同は斷じて懷疑的ではなかつた。、、、、も、時折、、、、ことがある。さうした場合私達は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、ならない。チンメルワルトで私達のしようとしてゐることも、正にこの、、、、、、、、、、、、、であつたのだ。

九月五日から八日へかけての會議中、暴風雨が吹き荒んだ。レーニンが率ゐる革命派も、代表者の大多數を占める平和主義派も、私の起草した共通的な宣言にやつとのことで贊成してくれた。その宣言書には、云ひたいことも云つてなかつたが、それでも、たしかに、それは一躍進であつた。レーニンは會議の最左翼に在つた。レーニンは、チンメルワルト左翼派の內部ですら少數派であつた。私は正式にはこの少數派に屬してはゐなかつたが、重要な問題に關してはこの少數派に近づいてゐた。チンメルワルトで、レーニンは將來のインターナショナルの運動の發條(ばね)をしつかりと締め上げつ〻あつた。スキスの山村で、××××××××××の基石を据付けてゐたのである。

フランスの代表者達は、その報告の中で『ナシエ・スロヴオ』が、他の國々の國際的運動との思想的接觸を確立した努力の價値を力說したラコフスキーは、『ナシエ・スロヴオ』がバルカン半島の社會民主々義諸政黨の國際的狀勢の發展を紹介する大きな役割を演じたことを指摘した。イタリーの黨はバラバノヴアの數多くの飜譯によつて、ナシエ・スロヴオに親しむことが出來た。ドイツの新聞界は、政府黨の新聞に至るまで何によりも多く『ナシエ・スロヴオ』を引用した。恰もノーデルがリープクネヒトに賴らうとしたやうに、シアイデマンは彼の同盟者として吾等に聞くことに吝

ではなかつた。

リープクネヒト自身はチンメルワルトには居なかつた。彼は監獄の囚人とならないさきに、ホーヘンツオーレルンの軍隊に這入つてゐたのである。彼は會議に手紙を寄せた。それには、平和主義から革命派に急に廻轉する旨が言明してあつた。彼の名前は、會議中屢々話頭に上つた。彼の名は早くも、世界的社會主義を獲得しつ〻あつた鬪爭のスローガンとなつてゐたのである。

ニュースが前以て新聞に洩れ、そのために、歸國する代表者達の國境越えに支障を來たすことのないやうに、會議はチンメルワルトの議事の報告全部を嚴禁した。しかしながら、數日後には、今まで全然知る者もなかつたチンメルワルトの名前は、世界中に響きわたつた。このことは、そのホテル所有主にびつくりするほどの影響を與へ、——果敢なそのスキス人はグリムに向つて、自分の財產が激增することゝ思はれるから、第三インターナショナルの基金に相當の金額を寄附しようと思ふと云つた。然し私は、彼がすぐにその意志を飜したことゝ思つてゐる。

チンメルワルト會議は、各國の×××××に大きな刺戟を與へた。ドイツではスパルタシストが其の活動を擴大した。フランスでは『國際的提携恢復委員會』が設立された。パリーのロシア人居留民の勞働者層は『ナシエ・スロヴオ』の周圍に結束して、ナシエ・スロヴオを不斷の財政困難その他の支障から救ふに必要な支持を與へた。『ナシエ・スロヴオ』の第一期の仕事に大きな役割を演じて來たマルトーフは最早や脫退してゐた。チンメルワルトでレーニンと私とを隔てゐた、元來取るに足らぬ懸隔は、其の後二三ヶ月間に解消してしまつた。

だが、さうかうしてゐる間にも、雲行は次第に險惡になつて、一九一六年中には暗澹たる空となつた。反動的な『ラ・リベルテ』が、廣告欄に、私達をドイツ員だとて非難する匿名の聲明書を發表してゐた。私達は、絶えず匿名の恐喝狀を受取つた。此の非難と恐喝の出所は明らかに×××××××であつた。恐し氣な人物が私達の印刷所のまはりをうろついた。エルヴェは×××××で私達を威嚇してゐた。ロシア人亡命者監督委員會の議長デュルケーム教授が、政府の内部で『ナシエ・スロヴォ』に閉鎖を命じて、その編輯者を國外に放逐するといふ話があると云つたと洩らした話が耳に入つた。けれども、處分は延期されてゐた。何等正當な理由が彼等になかつたのである。何故と云つて、私は法律違反も、檢閲條令違反すら犯したことがなかつたのである。だが、口實なんてものは探せば何處にでも見付かるものでもあるし、案の條、遂に彼等はそれを見付けた——一層正確に云へば××したのである。

第五章　フランスから放逐さる

私がコンスタンチノープルに來てからのこと、フランスの一部の新聞が、トロツキーのフランス退去命令は、十三年後の今日なほ効力を持つてゐると報じた。このことが本當だとすれば、あの最も怖るべき世界の大破綻の中でも、凡るものゝ價値がつぶれはしなかつたことの證據の一つである。この世界的大破綻の間に、全人類が砲彈のために叩きつぶされ、多くの町が全滅し、××××が歐洲の荒野に投散らされ、國境は變更され、私の入國を禁じたフランスの國境も變つてゐる。而かもなほこの樣に凄まじい變動の唯中にあつて、一九一六年の秋の初めマルヴイが署名した退去命令は、幸にも保存されてゐるのである。その時以來、當のマルヴイ自身が、追放されて、また歸つて來るやうになつたといふ事實は何んと說明したらいゝだらうか。古來、人間の手の仕事がその手の主よりも根强いことは度々ある。

事實、嚴格な法學者ならば、その退去命令の効力の持續の理由を發見し損ねたくはなからう。例へば、一九一八年に、モスコウのフランス大使館付武官は、現役將校を私の指揮下に委ねた。このことをフランス入國許可を許されない『好ましくない』一外人に對して爲すべきことでなかつたゞらう。また、一九二二年の十月十日にエム・エリオーがモスコーに私を訪れた。が彼は、私のフランス退去命令に關しては一言も觸れなかつた。エリオットが私に何日頃パリーに行く計畫かを丁寧に訊ねたとき、私の方から、パリー退去命令のことを想ひ出させてやつた。だが、それも冗談半分に彼の注意を促したまでゞあつた。で私達は一度にドッと笑ひこけた。がその笑ひの底を割つて見れば、お互ひに異つた理由を持つてゐたであらう。またこのやうなこともあつた。一九二五年、シヤチユラの發電所の開業式に臨場した外交團を代表してフランス大使のエム・エルベットが、私の演說に對して愛嬌たつぷりの挨拶を交はした。どんな鋭敏な耳を持つてゐる者でも、その中に幾分でもマルヴイの退去命令の餘韻を聞き分けることは出來なかつたであらう。けれど、それが何んに

ならう？　一九一六年の秋二人の刑事が私をパリーからラインまで尾行して來たが、その一人が私に向つて『政府は變つても警察は變らない。』と說明した事實は、意味深重である。

フランス退去の事情を更によく說明するために、私は、ちよつと、その小さな新聞が私の編輯中どんな狀態の下にあつたかを述べる必要がある。云ふまでもなく、それの第一の敵はロシア大使館であつた。『ナシエ・スロヴオ』の記事は、大使館で念入りにフランス語に飜譯され、適當な譯註を附して佛國外務省及び陸軍大臣のもとに廻されたのである。すると、何時も呼出電話が陸軍檢閱官のエム・シャールのところへ掛ける。この男は戰前、ロシアで四五年間フランス語の教師をしてゐた男である。彼は決斷力のある男ではなかつた。檢閱に際しては、通過させることよりも思ひ切り削除することによつて自分の躊躇を解決した。（數年の後この男が貧弱極まるレーニン傳を書いたとき、思ひ切り削除する手を用ひなかつたことは誠にお氣の毒な次第である）。小贈な檢閱官として、シャールはその檢閱範圍をツアー、ツアーの皇后、サヅオノフ、それからミリウコフのダーダネルスの夢や、ラスプーチンにまで擴げた。『ナシエ・スロヴオ』に對する戰ひ全體――それはまぎれもなく、抹殺の戰爭だ――は、その新聞のインターナショナリズムに對してゞはなく、その新聞のツアーリズムに反抗する××××に對して挑まれたものであることは、容易に明らかなことであらう。

私達は、ロシアがガリシアで戰捷した當時、第一回の猛烈な檢閱にひつかゝつた。問題にならない程小つぽけな戰捷にも、ツアーの大使館は何時も有頂天になつた。今度は、檢閱官はウイツテ伯

の死亡の記事の全文を削つたばかりではなく、ウイツテといふ僅か五文字の見だしまで抹殺するほど橫柄な處置を採つた。恰度この時、フランス共和國に鋒を向けた恐ろしく不遜な記事を發表し、フランス議會とその『小さなツアー達』つまり代議士達を嘲笑したセントペテルスブルグ新聞を携へて、私は檢閱局へ釋明を求めに行つた。

『この問題には私は關係がないのです。』――とシャールは云つた。――『あなたの出版物に對する指令はみんな外務省から出てゐるんです。誰か外交官の方にお話しになつてはいかゞ』

半時間ばかりすると、ごましほ頭の外交官が陸軍省へやつて來た。私達が取交はした會話――それがすむと私は早速書取つておいた――は大略次の樣である。

『現職には居ないし、人氣も無し、殊に世を去つてゐるロシアの一官僚に關する私達の新聞の記事を抹殺してしまつた理由を、お伺ひしたいものですが？　また、この處置が軍事行動とどういふ關係があるのですか！』

『なるほど、あゝした記事はあの人々にとつて不愉快なんですよ。』と、その外交官は云ひながら頭を微かに傾けた。――おそらく、ロシア大使館の方を指したものらしい。

『だが、私達は、全く、あの連中を不快にするためにあゝした記事を書くのですよ。』

外交官は、この答を聞くと、恐らくこれを愛嬌のある冗談とでも思つたのだらう、おとなしく微笑した。

『今は戰爭中なんですし、それに私達は聯合軍にたよつてゐるのですから。』

『フランスの内政が、ツアーの外交政策に左右されるといふお積りなのですな？　既にあなたがたの祖先が、ルイ・カペーの首をちよん斬つたのは間違ひぢやなかつたんですか？』

『あゝ、あまり大袈裟なお話ですよ。——それに、どうぞ、お忘れにならないで下さい。今は戰爭中だつてことを。』

これ以上會話も交はしたけれど、効果は一向擧がらなかつた。外交官は快げに笑ひながら私にかう説明した。政治家も死ぬべきものである以上、現在生きてる政治家は、死んだ政治家に對する非難なぞ聞きたくはないだらう、と。此の會見の後も、事情はちつとも變らなかつた。檢閲官は相變らず抹殺の青鉛筆をつゞけた。新聞紙とは名ばかりで、まるで一枚の白紙となつて現はれることも稀ではなかつた。私達は、エム・シャールの意志を無視したことはなかつた。すると、シャールの方でも上長官の意志を益々無視しないやうになつた。

にも拘らず、一九一六年の十月になつて、私は警視廳から、フランス領土退去の命令を受取つた。けれども一體それはどうした理由からだらうか？　役人は一口もそれについて私に語らなかつた。けれども次第に明らかになつたところによれば、事の原因は、フランスに於けるロシアの祕密警察が組織した性悪なる隱謀であつた。

代議士のジャン・ロンゲがブリアンの所へ行つて、私のフランス退去の不當を抗議——正確に云へば詰問ではなくて泣言（ロンゲの抗議は何時も最も物靜かな調子であつた）を云つた時、フランスの首相は答へた。

『「ナシエ・スロヴオ」紙が、マルセイユで、、、、、、、、、、、、、、の身體から發見されたことを、君は知つてるかね？』

これはロンゲには思ひも寄らぬことであつた。彼は『ナシエ・スロヴオ』紙の『チンメルワルト』政策は知つており、それには多少の同感を持つてゐた。けれど、、、、、、、に至つて、彼ははたと當惑せざるを得なかつた。彼は向きをかへて、其處に居た私のフランスの友人に眞僞を質した。するとその問はれた友人は私に向つて眞相を尋ねた。けれども私は、、、、、、、、に就てはその友人と同樣ちつとも知らなかつた。其處へ偶々『ナシエ・スロヴオ』の敵で、××的なロシアの自由主義新聞の通信員が、その問題に割込んで來たので眞相は明らかになつた。

ツアーの政府がフランス共和國に軍隊——貧弱な數の故に『象徴的』と呼ばれた——を派遣したとき、遽急なあまり、スパイやプロボゲーターの連中まで動員して間に合せたことがあつた。この中にはロシア領事館への紹介狀を持つてロンドンから來てゐたヴイニング（たしかそんな名前だつた）なる男が居た。事の手始めに、ヴイニングは最も穩健なロシアの通信員を、、、、、、、『、、、』、、に參加せしめようとした。彼等通信員達は拒絶した。ヴイニングは『ナシエ・スロヴオ』の記者たちには持ちかけなかつたので、私達もこのヴイニングについて知るところがなかつた。パリーでの計畫に失敗すると、ヴイニングはツーロンに赴いた。ツーロンで、彼の正體を看破することの出來なかつたロシア水夫達の間で、多少の成功を收めたらしい。『こゝは、吾々の仕事をするのには好適の土地だ。、、、、、、、、、、を送れ。』と、彼は出鱈目に選んだロシア人新聞記者に書

を寄せた。けれどそれには何んの返事も來なかつた。ツーロンに碇泊中のロシアの巡洋艦アスコルドに、、、、、、、、、、、、、、、、、、。その××に於けるヴイニングの役割は云ふまでもあるまい。で彼は今こそ彼の活動をマルセーユに移すべき絶好の時であると斷じた。マルセーユもまた彼の活動に好適な土地となつた。彼の協力も多少加はつて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、してしまつた。その事件に關係した××が捕縛された時、前述の『ナシエ・スロヴオ』が身邊から發見された。事件の調査にマルセーユへ赴いたロシアの通信員に對して將官が語つたところによれば、どさくさまぎれに、ヴイニングなる者がナシエ・スロヴオを×××に無理やりに配布したのであつた。そしてそのことが、『ナシエ・スロヴオ』が捕縛された××の身から發見された唯一の理由であつて、その×××はその新聞を讀む餘裕さへなかつた。

ロンゲが、私の追放に關してブリアンと會見した直後――即ちヴイニングのその事件における役目がまだ發覺されてゐなかつた頃――私は、ジュール・ゲードにプロポゲーターか何にかゞ折を窺つて故意に『ナシエ・スロヴオ』を××に配布したものだらう、と、ほのめかした。この推測は案外早く、吾々の新聞の强敵によつて確證されたのであつた。けれどもこんなことはどうでもいゝことだ。ツアーの外交官は、フランス政府に向つて、フランスにしてロシアの兵卒を必要とするならば、先づ、、、、、、を直ちに叩きつぶさなければならないと、はつきり說明した。目的は遂行された。その時まで躊躇してゐたフランス政府は、『ナシエ・スロヴオ』を閉鎖し、內務大臣マルヴイは、旣に警視總監が用意しておいた私のフランス退去命令に署名した。ブリアンはジャン・ロンゲに對してばかりでなく、今、內閣は、最早萬事洩れる憂ひはないと思つた。ブリアシはジャン・ロンゲに對してばかりでなく、外の代議士連中――その中には議會委員會の議長のレーゲエもゐた――に對してまで、私の退去命令の理由として、マルセーユ事件を持出した。此の說明はたしかに效果があつた。けれども問題のナシエ・スロヴオが新聞賣店で公然賣ることの出來る檢閲濟のものであり、從つて、、、、、、、、、、、、、、、ことの出來ない性質のものであつた以上、事の眞相は陰謀が發覺するまで謎となつてゐた。事件は下院にまで知渡つた。私は、時の文部大臣パンルーヴエはこの話の內幕を聞いた際に、次のやうに叫んだと聞いてゐる。

『恥辱だ！……そのまゝに捨てゝは置けない……。』と。けれども何にしろ戰爭中ではあつたし、それにツアーは聯合軍側と來てゐる。ヴイニングを摘發するわけには行かない。マルヴイの命令を實行するより外仕様がなかつた。パリー警視廳は、私の行き度い外國へ向けてフランス退去命令を發することになつてゐると通牒して來た。同時に、イギリスもイタリーも私を賓客として迎へる光榮を持ちたくないと言つてゐると通牒された。

私はスヰスに歸るよりほかなかつた。ところが、しまつた！　スヰス公使館は旅行免狀の發行をあつさり、拒絕した。私はスヰスの友人に打電した。すると、安心せよとの返電が來た。問題が好都合に解決できさうだつた。けれども、スヰス公使館は依然として旅行免狀を拒絕した。後になつて知つたことであるが、ロシア大使館は必要な場合には聯合軍の助けを借りて、ベルヌで螺旋を締

め上げた。そこでスキス當局は故意に問題の解決を遲くらせ、內心では、その間に私がフランスから追放されるだらうと豫想してゐたのである。オランダかスカンジナビアに行かうとすれば、イギリスを通るより外に道はない。けれどイギリスは私の通行權を拒絕した。殘るは唯スペインだけであつた。しかし、自ら進んでイベリア半島へ行くといふことは、今度は私の方で御免蒙る番だつた。

パリー警察との論爭は約六週間續いた。何處に行くにもスパイ等が尾行した。彼等は私の家や新聞事務所の外に見張りに立つて、一時も私に對する監視の眼をゆるめなかつた。遂にパリー官憲は斷乎たる手段を講ずる事に腹を決めた。警視總監のローレンは私を警視廳に召喚して、私が勝手に退去するのを拒絕するからには、二人の警部に——但し『私服で』と彼は極く鄭重につけ加へた—國境まで案內させようと云つた。ツアーの大使館はその目的を果したのだ。私はフランスから追放された。

この事件の詳細は、その當時私が作つた記錄に書いてあるが少し不正確な所もあらう。然し主な事件は絕對に間違つてゐない。且つ又このエピソードに何等か關係した人々も未だ生きてゐるし、その多くの人は現在フランスに住んでゐる。又幾つかの記錄もある。だから事實を確めるのは譯のない事だ。私としては、マルヴイの退去命令を警察の記錄から引出して、それを指紋檢鏡の試驗にかければその一角の何處かにヴイニング君の指紋を發見するに違ひないと云ふ事を疑はない。

第六章　スペイン通過

二人の警部はウードリー小路の私の家で私を待つて居た。一人は背が低くて、年より老けて見えた。も一人は大柄で、頭の禿げた、瀝青の樣に顏の淺黑い、四十五歲位の男であつた。二人とも平服を不恰好に着て、ものを云ふ時には敬禮でもするやうに手を擧げた。私が友達や家族の者に別れを告げてゐる間、彼等は禮儀正しくドアの後にかくれてゐた。年とつた方のは、家を出る時帽子を脫いで『奧さん、御免下さい。』と云つた。

過去二ヶ月の間、うまずたゆまず私の尾行をやつて來た警部の一人は外に待つてゐた。まるでお互ひの間に何んの隔てもないやうに親しい樣子で、彼は膝掛を直して客車のドアを閉めた。彼は、買手に獲物を賣渡さうとしてゐる獵師を思はせた。私達は出發した。

急行列車。三等室の坐席。年かさの警部は一かどの地理學者だ。トムスク、カザン、ニジニノヴゴロド、彼は皆知つてゐた。彼はスペイン語を話せるし、その國情にも通じてゐた。背の高い色の黑い方のは、長い間むつゝりと口もきかないで、少し離れて腰かけてゐた。然し程なく彼は胸襟を開いて『ラテン民族は現在足踏みをしてゐる狀態です。他の民族はラテン民族を後に殘して進んでゐます。』と突然意見をのべた。太い指環をはめた毛深い手に、ナイフを持つて脂肪の多い豚肉を切

り乍ら。――『貴方の國では文學にどんなものがありますか。こゝでは何にもかも衰微してゐます。哲學でも同じ事です。デカルトやパスカル以來運動はさつぱり起つてゐません。ラテン民族は足踏みをして居るのです』

私は驚いて次に彼が何にを云ひ出すかと待つたが、彼はそれなり默つて、肉と葡萄入りのパンを食ひ始めた。

『そんなに昔の事でもありませんが、貴方の國にはトルストイがあります。然し私は、イブセンの方がトルストイより勝れて居ると思ひますよ。』と云つて彼は再び口をつぐんだ。

此の博學振りを急に見せつけられて、刺戟された、年とつた警部は、シベリア横斷鐵道の重要な事を私に說明し出した。が直に彼は同僚の悲觀論を支持しながらも宥めてかうつけ加へた。

『さうです、私達は發議權のないのを惱んでゐるのです。誰も官吏になり度いんです。これは悲しむ可き事ですが、誰もこの事を否定する事は出來ません。』

私は莫迦にしないで、興味をもつて彼等の言葉に耳を傾けた。

『一人の人間を尾け狙ふ？　今日では之は不可能です。尾行はそれが氣づかれない時に效果があります。さうぢやありませんか。私は明ら樣に云ひますが、パリーの地下鐵は尾行制度をぶち壞します。だから監視をうけてゐる人が斷じてパリーの地下鐵の使用を禁じられてゐれば、尾行制度も可能になるでせう。』さう云つて、この色の黑い男は苦笑した。

老けた方は話の意味を和げる樣にかうつけ加へて云つた。『私達はよく看視をやります、情けないことには、、、

の歩廊を通らせた。

『もの〻分つた扱ひ方ぢやありませんか？』と、その色の黒い男が尋ねた。『貴方はラインからサン・セバスチアンまで電車に乘つて下さい。スペイン警察の疑ひを招かない樣に普通の旅行者の風をしなくちやいけませんよ。スペインの警官と來たら全く疑ひ深いですからね。そして今から私は、貴方には關係がないんです。解りましたか？』

私達は冷淡に分れた。サン・セバスチアンから私はマドリッドに行つた。サン・セバスチアンでは私は、海を見る事が出來て非常に嬉しかつたと同時に、物價の高いのに愕いた。マドリッドでは私は誰一人知つてる者はなく、全く未知の土地であつた。その上、スペイン語を話せないので、むしろサハラの砂漠やピー・ターボールの要塞の中にゐるより孤獨であつた。そこには只藝術といふ言葉のみが殘つてゐるだけだ。二ヶ年の戰爭は人々に藝術なんて云ふもの〻存在を忘れさせた。私は飢ゑた人間の樣に熱心に、マドリッド美術館の貴重な數々の寶玉を見て、再び藝術における『永遠』の要素を感じた。レンブラント、リベラーの諸作品。ボシュの油繪は生活のナイーヴな喜びを示す天才の作品である。ミールの畫に有る小さな形の農夫や小さな驢馬や、小さな犬の姿を見るために、美術館の老人の監視人は私にレンズを貸してくれた。此處には戰爭の氣配は少しもなかつた。凡てのものは各々の場所に落ついてゐた。色彩は自由にその生命をもつてゐた。之は私が美術館でノートブックに書きつけたものである。

『吾々と之等の過去の藝術家との間に――決して彼等の光を失はしめたり、或は彼等の價値を低める事なく――一つの新しい藝術が戰爭前に生長した。それはより親しみのある、個人主義的なもので、より大きなニューアンスを持ち、同時に、より主觀的のものであり、熱情的なものである。戰爭はその集團的の激情と苦痛によつて、この氣分と作風を恐らく押流して了ふであらう。――然し之は、過去の形式が如何に美しくあつても、單純にそれに歸ると云ふ事を決して意味しない。――どの方向に押流すかと云へば、それは解剖學的の又植物學的の完成であり、又ルーベンスの腿である。

（生命を求めるに急な戰後の新藝術に於て、この腿は大きな役割を演ずるであらうが）豫言するのは容易な事ではないが、殆ど凡ての文明國民の生活を滿たした未曾有の經驗から、確かに新しい藝術が生れるに相違ない。』

ホテルで私は辭書の助をかりてスペインの新聞を讀みながら、スイスとイタリーに出した手紙の返事を待つた。私は未だスキスに行きたい望みを捨てなかつた。マドリッド滯在の四日目に私はパリーから一通の手紙を受けとつた。それにはフランスの社會主義者ガビエの宛名を教へてあつた。彼は或保險會社の重役であつた。その社會的地位がブルジョア的であるにも拘らず、彼は仲間の×的政策に斷乎として反對してゐたのを私は知つてゐる。私はガビエからスペインの黨は完全にフランスの愛國的社會主義の影響の下にある事を知つた。バルセロナではサンヂカリストの間に猛烈な反對があつた。訪ねようと思つた社會黨の書記長のアングイルライは、或はカソリックの坊主について不敬な言を吐いたと云ふかどで、十五日間の禁錮に服役してゐた。昔ならアングイルラノは

それだけで、異教徒糺問所の判決宣告式で火刑に處せられたであらう。

スペイン語を覺えたり、美術館に行つたりして、スイスからの返事を待つてゐた。十一月の九日、ガビエが紹介してくれた小さな下宿の女中が、恐ろし氣に私を廊下に呼出した。そこには紛れもない格好の二人の若い男がゐた。彼等は不愛想に一緒にきてくれと云つた。何處へか？　云ふまでもない、マドリッドの警視廳へだ。そこへ行くと私は一角に連れて行かれた。

『ぢやあ、私を檢束するのか？』と私は尋ねた。

『さうです。一時間か、二時間ね。』

私はその儘場所も變へないで、警視廳に七時間も腰かけてゐた。夜の九時に私は階上に連れて行かれた。そこはかなり人だかりのしたオリンパスの山のやうであつた。

『とにかく、どう云ふ譯です？　私を檢束したのは。』此の簡單な質問はオリンパスの人々を當惑させた。彼等は代る〳〵色々の臆斷を下した。その一人はロシア政府がロシアに出掛ける外國人に旅券のことで難癖をつけることを述べた。

『若し貴方が、アナーキストの取締に吾々がどれだけ金を費すか知つてくれたらなあ。』と他のものは私の同情心に訴へながら云つた。

『併し私は、ロシア官憲の事にもスペインのアナーキストの事にも責任を負ふわけには行きませんよ全く。』

『勿論、勿論さうです。たゞ貴方に一例を示しただけの事ですよ。』

『貴方の思想は何んですか？』と遂に署長が暫く考へた後で私に訊ねた。

私は出來るだけ普通の言葉で私の意見を述べた。

『それ見給へ。』と彼等は云つた。

最後に署長は、通辯を通じて即刻スペインを退去させるために召喚したこと、私が退去するまでは、私の自由は『一定の制限』を受ける事を申し渡した。『貴方の思想はスペインには餘り進みすぎてゐます。』と彼は尚その通辯を通じて打ち明けて云つた。

夜中になつて巡査は私を馬車にのせて、マドリッドの監獄に連れて行つた。監獄の『星』の眞中で私の所持品の取調べはどうしても避ける事は出來なかつた。星の眞中とは各々四階建になつてゐる五棟の交叉點である。階段は鐵製で掛け梯子であつた。監獄の夜の特別な靜寂は、重くるしい濕氣と惡夢に染み込んでゐた。廊下の蒼白い電燈の光。何もかも見馴れたものゝ同じものであつた。鐵で包んだドアを開ける時の轟く樣な響き、大きな部屋、薄暗さ、重くるしい監獄の匂ひ、慘めな胸が惡くなる樣な寢臺。そしてしめられるときの鐵のドアの響。如何に多くの監禁をこのドアがやつた事か？　私は格子の後にある窓の開き戸を明けた。冷い空氣が流れ込んだ。私は着物を脱がないでボタンを皆かけて寢臺に横はり、オーヴァ・コートを上に掛けた。私はその時始めて事件のひどく不合理なことを理解した。監獄の中で――而もマドリッドで！　私はそんな事は夢にも思はなかつた。イズヴオルスキーはうまい仕事をやつたものだ！　マドリッドで！　私はマドリッドの『模範』監獄の寢臺に横つて、思ひ切り眠りに落ちるまで哄笑した。

運動の散歩をやらされてゐる時、囚人が此監獄には無料監房と有料監房との二種類の監房がある事を話してこぼしてゐた。一等監房は一日に一ペゼッタ半で、二等監房は一日に七五サンチームである。囚人は誰も有料監房に入る權利はあつたが、無料監房を拒絶する權利は與へられなかつた。私の監房は一等の料金入用のものであつた。私は再び心から笑つた。併し、つまるところ、筋みちの分つた話だ。完全に不平等の上に立つてゐる社會で、監獄だけが平等な筈はなからうではないか？　私は又有料監房の囚人は、一日に二回一時間づつの散歩を許されるが、他の囚人は卅分しか許されないと云ふ事を知つた。之もまた御尤もなことだ。一日に一法半（フラン）拂つてゐる政權泥棒の肺臓は、無代償で呼吸してゐる同盟罷業者の肺臓よりも、澤山の空氣の分前を與へられてゐるのである。

三日目に私は人體測定のため喚出されて、印刷用インキで指を染めてカードの上に指紋を押す事を命ぜられた。私は拒絶した。そこで『腕力』に訴へて、然し、わざとらしい禮儀正しさでそれをやらされた。始めは右手をやり次に左手をやつた。その間私は窓の外ばかり見てゐた。其の次には腰かけて靴を脱げと云はれた。私は拒絶した。ところが足は取扱ひに尙厄介であつたので、その係官は狼狽して私の廻りをうろつき廻つた。最後に、私は意外にもガビエとアングイルラノに面會する事を許可された。彼等は私に面會に來てゐたのだ。アングイルラノは一昨日他の監獄から釋放されたのであつた。彼等はあらゆる機關が私の釋放運動を起してゐると云ふ事を話した。廊下で私は監獄教誨師に逢つた。彼は私の平和主義にカトリック的の同感を表して、『パシエンシイア、パシエンシイア、』（我慢しなさい、我慢しなさいの意―譯者）と慰さめた。然し、兎に角私に何んとも

しようがなかつた。

十二日目の朝、巡査は、その夜カヂスに向けて出發するやうにと傳へて、私に其の汽車賃を拂はうと思ふかどうかと尋ねた。然し私はカヂスに行き度くなかつたので、汽車賃の支辨は拒絶した。監獄に宿泊料を拂ふだけで十分だ。

その夕方吾々はカヂスに向けてマドリッドを出發した。その汽車賃はスペイン國王が支辨したものであつた。然しカヂスに追放するとはどう云ふ譯だ。再び地圖をみた。カヂスはヨーロッパの西南の半島の果てゞある。ベレゾウから鹿でウラル、セント・ペテルスブルグを經由して圓形の道程をとつてオーストラリアに、オーストラリアからスキスを通つてフランスに、フランスからスペインに、今度はイベリヤ半島を横斷してカヂスに、此の道程は凡て北東から南西に方向をとつてゐる。カヂスでヨーロッパ大陸は終り、それから先は海だ。パシエンシイアだ！

同行の巡査はこの旅行を祕密に行はうとはしなかつた。反對に、彼等は興味をもつてゐる人には誰にでも私の事を詳しく話した。それと同時に私を稱讃した。貨幣贋造者でなくて、不幸にも不穩思想を抱いてゐる陰謀者としてだ。誰もカヂスの氣候が非常にいゝと云ふ見込で、私を慰めてくれた。

『どうして私を捕へたのかね？』と私は巡査にきいた。

『それはお易い事ですよ。パリーからの電報で。』

全く私の思つた通りだ。マドリッド警察はパリーの警視廳から電報を受けとつた。『かく〳〵の

危險なアナーキスト一人、サン・セバスチアンで國境通過、マドリッドにとゞまる筈。』そこでマドリッド警察では私の來るのを待つてゐて捜索したが、丸一週間と云ふもの私をつきとめる事が出來なかつたので狼狽した。フランスの警官は國境を慇懃な態度で護送した。モンテーヌやルナンの讃美者はこんなことまで云つた。『もの〻分つた取扱ひ方ぢやありませんか?』――そしてその同じ警察が、一人の危險な無政府主義者がサン・セバスチアンに向けてイルンを通過せりとマドリッドへ打電したのであつた。

この間に於て、重要な役割を演じたのは、『ぺてん師』――ビデーだつた。所謂司史法警察の署長の彼は、私の尾行と追放の中心人物であつた。彼が同僚より卓絶してゐる點は、その極端な圖々しさと惡辣さだけである。彼は、ツアーの祕密警察の役人すら決して使はない樣な口調で私に話しかけようとした。彼との話はいつも喧嘩に終つた。別れる時、私は背後に、彼の憎惡の眼つきを感んじた。監獄でガビエと面會した時、私は私の檢束が『ぺてん師』ビデーの手で豫め整へられてゐたと云ふ確信を彼に話した。さうしてこの綽名は私のまぐれ當りに發して、スペインの新聞に擴まつた。

二年も經たないうちに、運命はエム・ビデーの負擔で、思ひも寄らない滿足を私に與へてくれた。一九一八年の夏、軍事委員會に電話がかゝつて來て、私はビデー、その呶鳴る男ビデーが、ソヴイエットの監獄に牧監されてゐると云ふ事を耳にした。私は自分の耳を信ずる事が出來なかつた。然しフランス政府が、軍事派遣員の幕僚に彼を置いて、ソヴイエット聯邦で密偵と陰謀に從事せし

め、ビデーは迂濶にも逮捕されたものらしかつた。復讐神からこれ以上に大きな滿足を授かることがまたと出來ようか。殊に若し私の退去の命令を出したフランス內務大臣のマルヴイが、間もなく彼自身平和主義者の陰謀の廉でマンソー內閣の手でフランスから追放されたと云ふ事實を附加へるとしたら。如何に事件が併發した事か、まるで映畫の筋書のやうだ!

ビデーが軍事委員會で私の所に連れられて來た時、最初私は彼を見分ける事が出來なかつた。雷男の彼は、普通の男に變つて了つて又みすぼらしかつた。私は驚いて彼を見た。彼は頭を下げてかう云つた。

『さうです、私です。』

さうだ、ビデーだつた。然し之は一體どうした事だ! 私は心から驚いた。彼は冷靜に手を擴げて官憲の冷い圖々しさで云つた。

『これが時勢の成行きですよ。』

全くだ。――すばらしい覺悟だ! 眼の前に、サン・セバスチアンへ私を企らんで送つた色の黑い宿命論者の姿が浮んだ。『選擇の自由なんかないんです、何もかも前世の約束ですよ。』

『だが、ビデー君、君はパリーでは僕にあまり親切ぢやなかつたね。』

『あゝ、濟まないことですが、私はそれを認めなければなりません、人民委員さん。私は監房に坐つてゐる時、よくその事を考へましたよ。內部から監獄を知るといふことは、時折、人間を善良にするものですよ。』と彼は意味ありげにつけ加へた。――

『然し私はそれでもなほ、私のパリーでの態度が、私に對して何にか不愉快な結果を齎らさなければいゝがと望んでゐます。』

私は彼を安心させた。

『フランスに歸つたら、職業を變へようと思ひます。』

『ほんたうかね。ビデー君。人間つて奴はいつも元の古巣へ歸つてね。』(私は此の場面を度々友人に話したので、その時の會話を、まるで昨日あつた事の樣に覺えてゐる。) 後に、ビデーは交換捕虜の一人としてフランスに送還を許された。私は彼の其後の運命について何んの消息もきかない。

ともあれ、吾々は軍事委員會からカヂスに戻らなければならぬ。

知事と相談の上、カヂスの警察署は、翌朝八時に私をハバナに護送する事、幸ひその日にハバナ行きの汽船が出ると云ふ事を私に通告した。

『何處へ?』

『ハバナへ。』

『ハ……バン……ア?』

『ハバナ。』

『私は行くのは嫌だよ。』

『嫌なら吾々は船艙に入れて、君を護送することにしなきあならん。』その署長の友人で、通辯として其處に居合せたドイツ領事の祕書は、『現實を受け入れる』ように忠告した。

パシイエンシイア、パシイエンシイア!だが今度は少しひどすぎる。そこで私は再びよろしくないと云つた。刑事と共に美しい町の通りを振向きもしないで通つて、電信局に驅けつけて、ガビエにアングイルラノに、祕密警察署長に、內務大臣に、首相ロマノネスに、各自由主義新聞に、共和黨代議士達に、『至急』報で、電報用紙に書込めるだけの言分を書いて打電した。——その後で、私はありとあらゆる方面に手紙をかいた。私はイタリーの代議士のセラナにかう書いた。——『ちよつと想像してみたまへ、君、君が現在ロシア官憲の監視の下にツヴエルに在つて、君が毫も行き度くもない東京に追放されんとしてゐるものと。——カヂスで、ハバナに强制的に護送されようとしてゐる僕の位置はそんなものだ。』

それから私は刑事と共に警察署へ引歸へした。私の頑强な要求もあり、また私が料金を拂ふからといふわけで、警察署長はマドリツドに向けて電報を打つた。ハバナに行くよりは、本人は、ニユー・ヨーク行の船が着くまでカヂスの監獄にゐたがつてゐると。私は屈服し度くなかつた。いらだたしい日であつた。

さうかうするうちに、共和黨代議士のカストロヴイドオが私の逮捕と追放に關して、スペイン議會で政府に質問した。論爭が新聞紙に揭載され出した。左翼は警察を攻擊したものゝ、彼等はフランス贔屓なところから、私の平和主義を非難した。右翼は私の親獨主義に共感した。(本人はフランスから追放されたではないか?) しかし彼等は私の無政府主義を恐れた。かうした混亂狀態で、誰もかも何一つ理解する事は出來なかつた。私はニユ・ヨーク行きの次の船が到着するまで、カヂス

に止ることを許可された。すばらしい勝利であつた。

このことがあつてから二三週間、私はカヂス警察の監視を受けた。しかし此處の監視はパリーの監視とは全く違つた穏やかな、父親の愛のやうな監視振りであつた。パリーでは×を卷くために私は多大の精力を浪費した。私は、一人乘りのタキシーをドライヴしたり、暗い映畫館に入つたり、出る間際に地下鐵に飛込んだり、かと思ふと急に其處から飛び出したり、そんなことばかりしてゐた。スパイ連も警戒を緩めず、あらゆる方法で私の跡をつけた。彼等は私の鼻の先で、何臺かタキシーをひつたくり、映畫館の入口で張番したり、電車や地下鐵から火箭の様に飛出して、乘客や車掌からひどく呶鳴られたりした。本當の事を云へば、私の方では面白半分であつた。私の政治的活動は警察の眼に暴露してゐたが、スパイ共の追求は私を怒らせ、私の遊戯本能を喚起したのである。

これに反して、カヂスでは、スパイは、或一定の時間に歸へるが、その間ホテルで大人しく待つてて貰はなければならぬと告げた。彼は私の利益を確實に保護したり、買物の便宜を計つてくれたり、又歩道に有るくぼみに氣をつけてくれたりした。沸でた小海老を賣る行商人が、十二尾に二リーアルを要求した時に、私のスパイは怒つてその男を呶鳴りつけ、嚇しつける様に拳骨を振上げた。そして彼の後を追つてそのカフエを飛出し、窓の下で、人の黒山を築くやうな大騒ぎをしたりした。

私は時間を浪費しない様に努めた。スペインの歴史の研究に圖書館に通つた。又スペイン語の動

詞の活用を學習したり、アメリカに行く準備のため英語の單語の仕入れを始めた。日は殆ど知らない中に經つた。そして時々夕方になると、研究がほんの少ししか進捗しないのに、出發の日が段々近づいて來たのを殘念に思つた。圖書館ではいつも獨りぼつちだつた。——十八世紀版の書物を澤山食ひ破つた蠹魚を計算に入れなければ。時々は蠹魚のために、名前や數字を判讀するのに大變な努力を要することもあつた。

その頃のノートブックに次の様な書き入れがある。『スペイン革命の歴史家は、民衆運動の勝利の五分間前に、、、、、、、、、、と烙印しておきながら、その後ですぐのさばり出した政治家についてのべてゐる。此等の賢明なる紳士は其後の凡ての革命に現れて人を押しのけた。スペイン人はかうした拔目のない連中を「腹」と云ふ言葉から「パンヂスタス」と呼んでゐる。有名な事であるが、吾々のおなじみのサンチョー・パンザの名前はそれと同じ言葉に由來してゐる。其の名を飜譯するのは困難であるが、その困難は寧ろ政治的と云ふより言語學的のものである。そのタイプそれ自體は全く、國際的なものである。』一九一七年以來私はさうしたタイプを度々見せつけられる機會を持つて來た。

カヂスの新聞が、戰爭なんか恰も無かつたかの様に、戰爭について何等の報道をも記載しなかつたのは異常な事である。最も人氣のある新聞の『エル・デイアリオ・ド・カヂス』に全く軍事通信が無い事を私が同行者に注意した時に、彼等は驚いて『さうですか？　本當ですか？　いや、なるほど本當ですな！』と答へた。其の時までは彼等は自分ながら氣づきもしなかつたのである。結局、

戰爭はピレネー山脈の向ふの何處かで行はれてゐるのであつた。私までが戰爭の事は忘れかけてゐた。

ニユー・ヨーク行の汽船はバルセロナから出帆した。私は家族に逢ふためにバルセロナ行きの許可を、もぎ取るやうにして手に入れた。バルセロナで、また新しく警察當局とのいざこざがあり、抗議や電報や又新しい刑事等の騷ぎがくりかへされた。家族が到着した。――家族もまたバリーで災難に遭つたのであつた。然し今は何にもかもうまく行つた。吾々はスパイ連と一緒にバルセロナの見物に出掛けた。子供達は海と果物を喜んだ。私達は皆海を越へてアメリカに行く氣になつてゐた。イタリーからスキスに入る許可を得ようとした試みは無駄に終つた。なるほどその許可がイタリー及びスキスの社會主義者の壓力によつて遂に下附された事は眞實であるが、その許可の到着したのは、私と家族が十二月廿五日にバルセロナから出帆するスペインの汽船に既に乘込んだ後であつた。この手遲れは、勿論故意にやつたものである。こまかいところまで、イズヴオルスキーが甘く手を廻してゐたのである。

ヨーロツパの扉は、バルセロナの私の背後に閉ぢられた。官憲は私と家族をスペイン大西洋汽船會社のモンセルラート號に乘込ませた。船は十七日目に乘客と積荷をニユー・ヨークに引渡すのであつた。十七日間！　此の航海日數は、バルセロナの港を壓して聳え立つ記念塔の主人公クリストフア・コロンバスの時代には、どんなに望ましいものであつたらう。然し、この季節には、海が非常に荒れてゐたので、私達の船は、人間の生命の脆さを私達に想ひ出させるやうなあらゆる目に合

つた。モンセルラート號は大洋航海には適しない古桶の樣な老朽船であつた。だが、戰爭中、中立國スペインの國旗は擊沈される危險を防いでくれた。そのスペイン汽船會社は高い料金をとつた上、船室、調具類もひどいもので、食事さへも惡るかつた。

乘客の人間の色別は、種々雜多なものであつたが、あまり感心した顏觸ぢやなかつた。各國からの避難者もゐたが、その大半は上流階級の連中だつた。一人の畫家は戰線から出來るだけ遠く逃れんために、年とつた父親を付添として、彼の油繪や、彼の才能や、彼の家族を連れてゐた。又小說家でもありオスカー・ワイルドの從兄弟である一人の拳闘家は、ドイツ人に横隔膜を突刺されるより、高尙なスポーツでヤンキーの顎を打碎いた方がいゝと壯語した。一撞球選手の一人の立派な紳士は、彼の年輩の者にまで擴張した××××を憤慨する。それは、いつたい何ちうことだらう？　この、、、、、、、、、のためぢやないか！　そして、彼はチンメルワルトの思想に同感を洩らす。他の乘客も大概こんな手合ひであつた。避難者、冒險家、相場師、でなければ、單にヨーツパから追ひ出された『好ましからぬ人達』等であつた。でなくて、誰がすき好んでこんな季節に、腐れかゝつたスペインの小さな船で、大西洋を横斷するなんて夢みたらうか？

三等乘客に就てこま〳〵と敍べることは少々むづかしい。彼等はお互ひにくつゝいて臥ており、殆ど身ゆるぎもしないし、又ろくにものも云はない、――何故なら、碌すつぽ食つてゐないからだ――また、辛い、苦しい一つの貧乏から、當分は半信半疑の衣に包まれてゐる、もう一つの貧乏の

世界へ航海して行くのだから、非常に陰鬱なのである。アメリカは、戰つてゐるヨーロッパのために働いてやるのだから、新しい勞働者が必要である。然し、トラホームや、無政府主義やその他かうした病氣を持たない、新しい勞働者でなければならぬ。

船は、子供達に果しない觀察の世界を展開する。彼等は常に新しいものを發見してゐた。

『父さん、あの火夫さんはすばらしいね？　あの火夫さんは『共和者(レパブリカン)』ですよ。』

子供達は一つの國から他の國へ絶えず動き廻るお蔭で、獨特の言葉で話すのだ。

『共和主義者(レパブリカン)だつて？　どうしてさう思ふのかね？』

『おゝ、あの人は何んでもうまく説明してくれるよ。「アルフオンソー！」と、云つて、それからピフ・ピフとやつたのよ。』

『あゝ、ぢや、その人は確かに共和主義者だよ。』と私はうなづいた。子供達はその火夫にマラガの乾葡萄やお菓子など持つて行つた。私達はお互ひに紹介された。その共和主義者は廿歳位で、王政に就ては明確な意見をもつてゐた樣にみえた。

一九一七年一月一日。――船中の乘客は誰もお互ひに新年を祝し合つた。戰爭中の二回の新年はフランスで迎へた。第三回目の新年は大西洋の上である。將に來らんとする一九一七年は吾々に何にを齎すか？

一月十三日、日曜日。――吾々は紐育に近づきつゝある。朝三時に皆起床する。船はとまつた。眞暗だ。寒氣。雨。陸上には濡れたビルディングの山嶽。新世界だ！

第七章　ニユー・ヨーク

さあ、ニユー・ヨークに來た。散文と幻想の都會。資本家的自働活動の都會。その市街は立體派の勝利であり、其の道德哲學はドル哲學である。ニユー・ヨークは私に非常に强い印象を與へた。何故なら世界の他のどの都市よりもニユー・ヨークは現時代の最も完全なる表現だつたからである。

私について飛んだ傳說のうち、その大部分はニユー・ヨークの生活に關したものが多い。路すがらにちよつと立寄つたノールエーでは、機智にたけた新聞記者は、私を鱈の腹裂きをやつてゐると書いた。二ヶ月しか滯在しないニユー・ヨークでは、各新聞紙が、私の職業に就て各種各樣に書き、一つは一つより奇想天外なものであつた。それらの新聞紙が私に負はせた凡ての漂浪奇談を一册の本にまとめるならば、私が今こゝに執筆してゐるものより、もつと面白い自敍傳が出來上るだらう。

然し、私はアメリカの讀者を失望させなければならない。私のニユー・ヨークでの職業は、革命的社會主義者といふ職業だけだ。この職業は、戰前には『自由』と『民主々義』のためのものとされたが、この頃では、それは酒密賣業と同業、不埒なものであつた。私は論文を書き、新聞を編輯

し、そして勞働者の會合で演說した。私は、徹頭徹尾仕事に沒頭してゐた。そのために自分が外國人であると云ふやうな氣がしなかつた。ニュー・ヨークの或る圖書館で私は孜々とアメリカ合衆國の經濟史を研究した。戰爭中アメリカの輸出貿易の增大を示す數字には私はびつくりした。これらの數字はそのまゝ、直ちに一つの啓示だ。アメリカの戰爭參加を前以て決定したばかりではなく、同時に又戰後世界場裡に演ぜんとする合衆國の役割を決定するものはこの數字であつたのだ。私は此の問題について、二、三の論文を書きまた數回の講演もした。その時以來『アメリカ對ヨーロッパ』の問題は、私の主要な興味の一つであつた。そして現在でも、その問題を極く細心に研究して居り、この問題に關する書物を書きたいと思つてゐる。若し人類の未來の成行を理解せんとするならば、この問題は實にあらゆる問題中最も重大なものである。

ニュー・ヨークに着いた翌日、私はロシア語新聞の『ノヴイ・ミール』(新世界)に通信した。『私は血にまみれて居るヨーロッパを去つた。然し、、、、、、の深甚な確信を抱いてそこを後にしたのである。同時に、私は、民主々義的の「幻想」を抱いてこの古臭くなつた新世界の土を踏んだのではない。』

それから十日後に、私はそこの國際的な歡迎會の席上で次のやうな演說をした。——『アメリカの富が增大しつゝあるに拘らず、ヨーロッパの經濟生活は實にその基礎まで吹飛ばされんとしてゐることは、最も重大な事實である。今もまだ一ヨーロッパ人として自分を考へてゐる。その私が羨望の眼をもつてニュー・ヨークを見る時、私はかく自問する。「ヨーロッパはニュー・ヨ

ークを建設する事が出來るであらうか? ヨーロッパはたゞ一個の墓地に過ぎないものになつて了はないだらうか? そして、世界の經濟及び文化の重心はアメリカに移りはしないだらうか?」と。今日、『ヨーロッパの安定』と呼ばれてゐるものゝ成功してゐるに拘らず、この疑問は依然としてあてはまるのである。

私にニュー・ヨークやフイラデルフイアや、その他近隣の都市各地で、ロシア語やドイツ語で講演した。私の英語は現在よりもつと酷いものであつたから、英語で公開講演をやらうなどゝは決して思つてゐなかつたのだ。それでも、ニュー・ヨークでやつた私の英語演說が話題に上つてゐるのに出遭した。つひ先達も、或るコンスタンチノープルの新聞の記者が、學生としてアメリカにゐた當時私の變挺な公會見參を目擊した有樣を敍べた。實のところ私に勇氣があつたら、この記者に向つてそれは君自身の空想の影人形だ云つてやりたかつた。然し悲しいかな、彼は益々得々として、新聞紙上にその當時の思ひ出をくりかへした。

私達は勞働者街にアパートメントを借りて、月賦で家具を備へつけた。そのアパートは一ヶ月十八ドルで、吾々ヨーロッパ人が全く使つた事がない樣な便利な設備が施してあつた。——電燈、ガスの炊事器具、風呂、電話、自働運轉的エレベーターその他塵芥の滑り落しまであつた。之等の設備は子供達の心を完全にニュー・ヨークと云ふものに引きつけた。一時電話は子供達の主な興味の的であつた。私達はこの神祕的な文明の利器をウキンナでもパリーでも使つたことがなかつた。

アパートの番人はネグロであつた。妻は三ヶ月分の家賃を先拂ひでその番人に支拂つたが、そこ

の主人が勘定照合のためその翌日領收帳をもつて行つたので、彼は妻に領收書を渡さなかつた。二日後私達がそのアパートに引越してみると、そのネグロ人は幾人かの居住人の家賃を拐帶して逃亡したと云ふ始末であつた。金の他に、吾々は多少の所持品の保管を彼に委託したのであつた。これにはすつかり、私達は參つてしまつた。幸先きの悪い事であつた。然し、結局、私達の財産は手に戻つた。それから私達が瀬戸物を入れて置いた木製の箱を開けると、驚いた事には、その中に金が注意深く紙に包んでその中にかくしてあつたのが分つた。彼は居住人達から金を受取りその領收書を渡してあつた。彼は主人の金を盗まうと思つたのではなくて、居住人から金を盗まないやうに慎重な心づかひをしたのであつた。ほんとに、輕妙な男だつた。妻と私は、このネグロの考へ深いのにひどく感心した。いつも彼の事を思ひ出すとうれしくなる。この小さな事件は私にとつて、或る兆候的な意味を帶びた。――それは恰も合衆國の『黒人』問題を蔽ふヴェイルの一角を引上げて見せる端ものゝやうに思はれた。こゝ五、六ヶ月の間アメリカは着々と戰爭準備を進めてゐた。例によつて、戰爭準備に對する最大の援助者は平和主義者だつた。彼等の、、、、戰爭と平和の利益比較論は、いつもきまつて、、、、『、、、、

り、今度は、彼に特有の子供らしい溢るゝばかりの愛情で私達を歡迎した。その時は時間もおそかつたし非常に疲れてもゐたが、ブハーリンは其の最初の日に私達を無理やりに圖書館に引つぱり出した。これが親密な交際の始まりで、これは私に對するブハーリンの信服にまで昂じて行き、益々熱烈なものになつて行つたが、終に一九二三年に至つて、正反對な氣持に變つてしまつた。

ブハーリンはいつも自分と云ふものを、誰かと結合させずには居られない性質である。かうした事情から、彼は他の一人の人間の言動の一個の媒介液に過ぎなくなる。だから、いつも彼を監視しなければならない。さもないと彼は、いつの間にか諸君と正反對の人の下に、自動車に轢かれる人のやうに仆れてしまふ。すると彼は、今迄天まで讃め上げてゐたと同じ無限の熱誠を以て、今迄の偶像を痛罵するのである。私は決してブハーリンにあまり重きを措かなかつた。彼のなすまゝ、いや正しく云へば他人のなすまゝに放つて置いた。レーニンの死後、ジノヴイエフの媒介液となり、それからスターリンの媒介液となつた。この章を書いてゐるこの瞬間に、ブハーリンはも一つの危機を通過し、私の今迄知らない液體が彼の身體を浸透しつゝある。

コロンタイ夫人はその當時アメリカに居たが、彼女はよく旅行をして居たので、あまり逢はなかつた。コロンタイ夫人はメンシユヴイキの列を脱してボリシエヴイキの最左翼に轉ずるといふ徑路を經ずして、戰時中、急に左翼に轉向した。彼女の外國語の知識と彼女の天分は、彼女を勝れたアデテーターとした。然し彼女の理論は常に何んだか混亂してゐる所があつた。彼女はニユー・ヨークにゐる間は、さして革命的なところはなかつた。彼女はレーニンと交通し、レーニンにアメリカ

の情勢を報告した。その中には私の行動も報告された。彼女は凡ての事件や思想を彼女のウルトラ急進主義の角度から觀察してゐた。レーニンの彼女への返事は、この全く價値のない報告を反映した。後年、レーニンの亜流は、私に對する鬪爭にあたつて、レーニン自らが言葉と實踐で取消したその間違つた言說を平氣で利用したのであつた。ロシアでは、コロンタイは、私ばかりでなくレーニンに向つてまでも、最初から、極左の立場をとつた。彼女は『レーニン・トロツキー』政治に對して、屢々鬪爭の矢を放つたが、それはたゞ最も感激的にスターリンの政治に頭を下げるためであつた。

思想に於ては、合衆國の社會黨はヨーロツパの愛國的社會主義からさへも、遙かに遲れて居た。然し『××した』ヨーロツパに對するアメリカ新聞の優越的な態度は、――その當時は尙中立的であつたが――アメリカ社會主義者の意見に反映した。ヒルキツトの如き人々は、社會主義者のアメリカ『伯父さん』として、危機一發の瞬間にヨーロツパに行つて、第二インターナショナルの對立せる黨派を和解させる役目を演ずる機會の來るのを歡迎した。今日でも、私はアメリカ社會主義の指導者達を回想する時には、微笑したい氣持になる。青年時代にヨーロツパで相當役割を演じてゐた移住民は、ヨーロツパから持込みの理論の前提を、成功への奮鬪のもがきの中に、さつさと忘れてしまつた。合衆國には成功した或は半ば成功した人々より成る廣汎な階級がある。――例へば醫者、法律家、齒科醫、技術家のやうな人々であり、貴重な休息時間をヨーロツパの有名な音樂家の演奏會とアメリカの社會黨とに使ひわける手合ひである。

彼等の生活態度は學生時代に學んだ知識の斷片から作られてゐる。彼等の凡てが自働車を所有してゐるところから、彼等はみんなこの社會黨の委員や、役員や、代議員等に選出される。アメリカの社會主義にその特質のスタンプを押すのは、この下らない公衆である。彼等は、ウイルソンはマルクスより無限に權威があるものと考へる。正當なところ、彼等は、平生の商賣上の活動の補ひとして日曜日にのんびりと人類の未來を默想する『バビイット』*の變種に過ぎないのである。此の連中は小さな民族的な氏族をなして生活する。この氏族の中で、思想の一致共同は常に商業取引のてれかくしとなるのである。各氏族には各々首領があつて、一番繁昌してゐるバビットが首領となるのである。彼等は、、、、、、、したり、又個人の安樂を――神よ禁じたまへ！――××しない限り、彼等は凡ての思想に寛容であるが、バビットの中のバビットがヒルキットであり、羽振りのいゝ齒科醫師連中にとつては、理想的な社會主義者的リーダーなのである。

*アメリカの發明家アイザック・バビットから移つて來て、空想家と言つた意味……譯者

こんな連中と一度逢ふだけでも、私に對する連中のあけすけな反感を招くに十分である。私の彼等に對する感情もまた、おそらく、それほど鋭いものでなかつたにせよ、あまり同感的なものではなかつた。お互に世界が違ふのだ。私にとつては今まで私が共に暮らし、そして現在なほ抗爭してゐるところの、その世界の一番腐敗した部分に見えた。

ユーヂン・デブス老は彼の社會主義的理想主義の烈々たる焰を胸に抱いてゐたところから、老人の間に際立つてゐた。彼はロマンテイストであり說教者であつて、決して政治家でもなければ指導

者でもなかつたが、眞面目な革命家であつた。それでゐて、彼は色々の點に於て彼より劣つてゐる連中の影響をうけた。ヒルキットの腕前は、一方にゴンパーズと取引關係をつゞけながらも、このデブスを小脇に引きつけておくにあつた。デブスは人の心を巧みに捕へると云ふ樣な性質をもつてゐた。逢ふ度にこの男はきつと私を抱擁して接吻した。老人は決して『禁酒黨』の部類に屬する人ではなかつた。バビット連が私に對して絕交を聲明した時も、彼はその仲間に加はらなかつた。彼は、悲しげに、あつさり場をはづしてしまつた。

私は『ノヴイ・ミイル』創刊當時からその編輯委員に加つた。職員の中にはブハーリンと私の他に、後にペトログラードで社會革命黨員に殺されたヴオロダルスキーと、後にペテルグラード市外で負傷を受け、遂にウクライナで殺されたチユドノフスキーがゐた。同新聞はインターナショナリストの革命宣傳の本部であつた。社會黨中の各國民聯盟の中にはロシヤ語を話せるメンバーがあり、ロシア人聯盟のメンバーは大抵英語を話した。從つて『ノヴイ・ミイル』の思想はアメリカ勞働者の廣汎な層にひろがつて行つた。御用社會主義者の時代後れの指導者はびつくりし出した。ついこの間、アメリカの土を踏んだばかりであつて、アメリカ人の心理も理解せずに、――と云はれてゐた――アメリカ勞働者にその架空的な方法を押しつけようとしてゐるこのヨーロッパ移住民に向つて、いろんな陰謀がはげしくなつた。鬪爭は尖鋭化された。ロシア人聯盟では『しつかりした、信頼できる』バビット連が忽ちに外部に追出された。ドイツ人聯盟では、ヒルキットの部下の『フオルクス・ツアイツング』の主筆の老シユルーテルは、吾々の主張を支持してゐる若い編輯者のロ

ーアに勢力を譲り出した。ラトヴィア人は、一丸となつて私に味方した。フインランド人聯盟も吾々の方に傾いて來た。吾々は有力なユダヤ人聯盟中に段々と喰入つて行つた。その聯盟は十四階建のビルデイングを所有し、そこから發行部數二萬の『前進』を、毎日、吐出し、『前進』(フオアワード)は感傷的な通俗的社會主義の古くさい空氣をもつた新聞で、何時でも、不信實極まる裏切をやりかねなかつた。

アメリカ勞働者の間では、一般に社會黨の團體や勢力、殊に吾々の革命的な左翼のそれは微力だつた。黨の英文機關紙『ゼ・コール』は、有害な平和主義的中立主義の精神で編輯されてゐた。吾々は鬪爭的なマルクス主義的週刊の發行を開始する事に決めた。その準備の眞最中に――ロシア革命が飛込んで來たのだ!

二日か三日の間、海底電信が無氣味な沈默を續けた後、ペテログラードの暴動に關する最初のめちやくちやな報道が到着した。ニユー・ヨークの世界主義的な勞働階級は皆興奮した。人々は期待し、同時に、期待することを恐れた。アメリカの新聞は極度に狼狽の狀態に陷つた。新聞記者、面會者、通信員達が八方から『ノヴイ・ミイル』の事務所に殺到した。一時吾々の新聞は紐育新聞界の興味の中心であつた。社會主義新聞社や社會主義團體からの電話の呼出しが引つ切りなしに續いた。

『ペテログラードが、グチコフ・ミリユコフ内閣を任命したといふ電報が來てゐるが、之はどんな意味のものでせう?』

『つまり、明日はミリユコフとケレンスキーの内閣が出來るだらうといふ意味なんです。』

『さうかな? ぢやあその次は?』

『その次? 次は吾々さ。』

『ほう!』

こんな會話が幾度繰返へされた。相手はみんな私の言葉を冗談ととつた。『貴い、最も貴い』ロシア社會民主々義者の或特別な集會で、私は、ロシア革命の第二期に於てプロレタリアート黨が必然的に權力を握るであらうと論じた原稿を讀んだ。これは尊大で血のめぐりの悪い蛙共の一ぱいゐる池の中に石を投入れたと同じ樣な印象を與へた。インゲルマン博士は躊躇せず次の樣に說明した。私は政治的算術の初步の四則さへ知らず、私のナンセンスな夢を論破するのには五分間もかゝらないのだ、と。

勞働大衆は、全然別な××の見方をした。その大きさと、熱狂の點で稀に見る演說會がニユー・ヨークの各所に開かれた。××が冬宮の上に飜つてゐると云ふニユースは、何處でも歡呼の聲で迎へられた。ロシア移民のみならず、本國のロシアを知らない子供達まで、××の歡喜の反映を吸ひ込まうとして、かうした演說會に押しかけた。

私は、家には、ほんのちらり、ちらり、姿を見せるだけだつた。家では母子三人、各種各樣の生活をしてゐた。妻は家庭と云ふ巢を作つてゐたし、子供には新しい友達が出來た。その中で一番親しい友達はエム醫師のとこの運轉手であつた。その醫者の妻君は、私の妻君と子供達をドライヴに

引つぱり出したりして、非常に親切にしてくれた。然し子供に取つては彼女も一人の平和な人間に過ぎなかつた。これに反してその運轉手は魔術師であり、巨人であり、超人であつた！　たゞ手を動かす事だけで、彼は自動車を意のまゝに動かした。彼の横に坐るのは迚も嬉しい事であつた。彼等が喫茶店に這入つた時、子供達は心配さうに母親に『何故運轉手はこゝに入つて來ないの？』と訊ねた。

子供は新しい環境に順應する驚く可き能力をもつてゐるものだ。ウキンナでは私達は大抵勞働者街に住んだので、子供達はロシア語とドイツ語を話せる他に、殆ど完全の程度にウキンナの方言を習得した。アルフツド・アドラー博士は非常に滿足さうに、子供達はウキンナの年寄りの馭者ほど巧者に方言を話せると云つた。チューリッヒの學校では、子供達は、チューリッヒの下層階級で使はれる方言に乘換へ、ドイツ語を外國語として習つた。パリーでは子供達は急にフランス語に變つたが、僅か二三ヶ月の間に修得して了つた。私は屢々子供達が巧みにフランス語の會話を操るのを羨ましく思つたものだ。彼等はスペインとスペインの船の上に暮したのは全部で一ヶ月にもならなかつたが、それだけでスペインの最も必要な言葉と表現を覺えるに十分だつた。それからニュー・ヨークではアメリカ人の學校に二ヶ月通つて、英語を手取り早く話せる樣になつた。二月革命の後、子供達はペテログラードの學校に通學した。然しそこの學校生活は混亂して秩序立つて居なかつたから、習得した時より一層早く諸外國語は忘れて了つた。然し子供達はロシア語は外國人の樣にしか話せなかつた。子供達が、まるでフランス語の正確な飜譯の樣にロシア文を綴るのを見て、

私達は度々驚いた、――さうかと云つて子供達はフランス語で文章を作る事は出來なかつた。かくの如く私達外國放浪者のストーリーは子供達の腦裡に、恰度彫刻銅板の樣に拭ふ事の出來ないほど深く刻み込まれた。

私が新聞事務所から妻に、ペテログラードは今革命の最中だと電話をかけた時、下の男の兒はヂフテリアでねてゐた。子供は九歳であつたが、朧げ乍ら――そして長い間――其の革命は恩赦とロシアへ歸る事及びその他の色々のいゝ事を意味するものだといふことをハッキリと理解した。彼は飛上つて革命を祝して、ベットの上で踊つた。これは病氣の癒つた印であつた。

私達は最初の船で出發し度くてたまらなかつた。私達が出發する夕方、醫者は快復した子供に散歩に出る事を許し領事館から領事館へ歩き廻つた。私達は身分證明書と旅行券の裏書を得るために、た。妻は子供に半時間だけ外に出るのを許して、荷造りを始めた。彼女は、今までこの同じ荷造りの仕事を幾度やつてきたことか！　然しその子の姿はどこにも見えなかつた。私は事務所にゐた。心配の中に三時間たち、妻に電話がかゝつて來た。初めは聞き馴れない男の聲であつたが、その次に出たのはセリョーザの聲だつた。『僕はこゝにゐます。』『此處』とはニュー・ヨークの向ふの端れの警察署の事であつた。その子供は、長い間縣案になつてゐた一つの疑問を解決するために、最初の散歩を利用したのだ。本當に第一番街といふのがあるのか？（たしか、私達は百六十四番街に住んでゐた。）然し、彼は道に迷つて了つたので、道を尋ねて歩いた擧句、警察署に連れて行かれたのだ。幸ひ子供は家の電話番號を記憶してゐた。

妻が上の子供を連れて一時間後にその警察署に着いた時、彼女は、長い間待ち焦れてゐたお客の樣に、快活に迎へられた。セリヨーザは巡査と將棋をやつて居た。彼の顏は眞赤だつた。彼は官憲の十二分な歡待に對する當惑を紛らさうとして、その親しい友人の巡査達と、或るアメリカ黑人の事を思ひ出し乍ら熱心に話してゐた。その子はまだそのニユー・ヨークのアパートメントの電話番號を記憶してゐる。

私がニユー・ヨークについて多くのものを學んだと云へば、それは大きな誇張になるであらう。私はアメリカ社會主義の仕事に早急に跳込み、そして急にその仕事に沒頭した。ロシア革命が早く來たために、私はニユー・ヨークと稱する怪物のざつとした生命のリズムを摑んだに過ぎない。私は人間の運命を鑄造する鑄造所をちよつとのぞいた人間のやうな氣持で、ヨーロッパに向けてアメリカを去りつゝあつた。私の唯一の慰安は、歸へれるだらうと思ふ一事であつた。現在ですら、尙ほ私はその希望を棄てゝは居ないのだ。

第八章　捕虜集合收容所で

三月二十五日に私はニユー・ヨークのロシア總領事館を訪ねた。その時はニコラス皇帝の肖像は壁からとり除かれて居たが、舊政府下のロシア官署の重々しい空氣があたりに漂うてゐた。いつも

の樣に手間取り、いつものやうな押問答があつて後、總領事はロシア行きの身分證明書の下附の命令を下した。英國領事館でも同樣、私がいろ〳〵の質問書に答辯を書き込むと、英國當局は私がロシヤへ歸國する道では、何等の妨害を加へるものではないと云つた。何にもかもうまく行つた。

私は家族とその他二、三のロシア人と一緒に、ノールエーの汽船クリスチヤニアフヨールド號で三月の廿七日に出帆した。私達は、革命の國へ行かうとしてゐるところから、花と別れの言葉の大洪水の中に送り出された。私達は、旅行券もその裏書も持つてゐた。革命、花、旅行券の裏書等は、私達流浪者の魂にとつては慰藉であつた。ハリファックスで、イギリスの海軍當局はその汽船を檢査し、警察官はアメリカ人、ノールエー人及びオランダ人の乘客の身分證明書をお座なり的に檢閱した。ところがロシア人だけは主義主張や、政治的思想等々の事に關して質問をうけ、その上徹底した反對訊問までやらさせられた。私は彼等とかゝる問題について論爭するのを絕對に避けた。『みなさんは僕の身元については、お望みのまゝ取調べていゝです。そのほかのことは餘計なことです。』ロシアの政治家は、英國水上署の制約を受ける事はなかつた。然しそんなことは二人の刑事マツヘンとウエストウツドにはどうでもよかつた。二人はさつさと私に反對訊問を二重に試みた後、それでも駄目だとなると他の乘客の間で私の事を探査した。刑事は私が危險な社會主義者であると云つて承知しなかつた。

この官憲との全ての交渉は非常に不愉快なものであつたし、又イギリスの同盟國民に屬するほどの不幸を持たなかつた他の乘客の取扱ひに比較して、ロシア革命家に對しては非常に差別的なものであつたので、一部のロシア人は英國當局に嚴重な抗議を申込んだ。然し私は、惡魔サタンの事を

悪魔ビイエルゼバブに苦情を云つたところで始まらないので、それには加はらなかつた。然しその時私は未來の事をちつとも豫見してなかつた。

四月三日に英國官憲は水兵を連れてクリスチャニアフョールド號に乘込んで、その地方の司令長官の名に於て、私と家族竝びに他の五人の乘客に下船を命じた。全ての事情はハリファックスに行けば分ることだからと宥められた。我々がその命令は不法であり、服命を拒絶すると云ふや否や、水兵達は吾々に摑みかゝり、多くの乘客からの『恥づべきことだ』と云ふ叫び聲の裡に、吾々を海軍のカッターにかつぎ込み、一隻の巡洋艦の警護の下にハリファックスに護送した。水兵の一團が私を締めつけてゐる時、上の子供が加勢に飛出して、その小さな拳で一人の士官を打つた。『お父さん、又打つてやらうか?』と叫んだ。彼はその時十一歳であつた、之は彼のイギリス民主々義の學科の第一回であつた。

官憲は妻と子供をハリファックスに殘し、吾々を汽車でアムハーストまで護送して、ドイツ人の捕虜收容所に收容した。吾々はそこの役所で、曾てピーター・ポール要塞に於てさへ經驗した事のない樣な取調べを受けた。といふのはツアーの要塞では官憲は吾々を裸にして祕密に取調べたが、此處ではわが民主々義的な同盟國は、衆人の眼の前で吾々に恥づ可き侮辱を加へたのである。私は今でも記憶して居るが、取調係長はオルゼン曹長といふ、スエーデン人とカナダ人の混血漢で、頭の赤い刑事巡査型の男であつた。かうした所業一切を遠くから指圖してゐた賤民共は、吾々が、革命で自由になつた結果本國への歸國の途上にあるところの、譴責す可きところのないロシア革命家

達であると云ふ事を、十分によく知つてゐたのだ。

未だ翌朝にならない中に、その收容所長のモリス大佐は、吾々の要求と抗議に對する回答として逮捕の公の理由を通告した。

『君達は現ロシア政府にとつて危險だから。』と簡單に云つた。その大佐は明かにおしやべりな男ではなかつたが、早朝から變に落ちつかない樣子をしてゐた。

『然しロシア政府のニュー・ヨーク官憲は、吾々にロシア行きの旅行券を下附したのだ。何れにせよ、ロシア政府のやることに餘計な干渉をする必要はない。』と吾々は抗議した。モリス大佐は暫くの間考へて居たが、頭を動かし乍ら、かうつけ加へて云つた。――『君達は一般に聯合國にとつて危險である。』

吾々の逮捕に關する命令書は決して見せてくれなかつた。彼に云はせると、吾々は明瞭に正當な理由で本國を去つた政治的亡命者である以上、本國にどんな事件が勃發しようと、びつくりするには當らないと云ふのであつた。彼にとつてロシア革命といふものは全然存在しなかつたのである。吾々は彼に、ツアーの內閣々員がその在官當時實に吾々を政治的亡命者たらしめたのであつたが、現在は外國に亡命したもの以外の閣僚は、皆收監されて居るのだと說明して見た。ところが各地の英國植民地とボア戰爭に經歷をもつてゐる此の大佐には、この事情は餘り複雜すぎた。私は彼と話してゐる時に、適當な敬意を表はさなかつたので、彼は癖に障つたのか私の背後で唸る樣にかう云つた。

『彼奴に南アフリカの海岸で逢つたのならなあ。』これは彼の十八番の臺詞であつた。

私の妻は合法的の旅行券でロシアを出たのだから、正しく政治的の亡命者ではなかつた。それにも拘らず彼女は私と同じ樣に、九歳と十一歳の男兒と一緒に逮捕された。私は子供までが逮捕されたと言ふ時、それは誇張してゐるのではない。最初カナダ當局は子供達を母親から離して、兒童ホームに收容しようとした。さうした成行にびつくりした妻は、決して子供を手離さないことを斷言した。彼女が子供とイギリス・ロシヤ警察官憲の家に收容されたのは、全く妻の抗議があつたからだ。『反法行爲』取締りのために一切の文通、電報を禁じたこの官吏は、子供等が母親と一緒でない時にさへ、一人の護衛つきで子供等の外出を許可したのであつた。妻と子供が、警察署に毎日報告すると云ふ條件つきで、或るホテルに引移る事を許可されたのは、それから十一日後のことであつた。

アムハーストの捕虜集合收容所は、ドイツ人の所有者から沒收した古い、ひどく破損した鐵工所の中に設けられてあつた。寢棚がそのホールの兩側に二列づゝ三段に作られてあつた。約八百人の人間がかう云ふ狀態で住んでゐた。この間に合せの寄宿舍の夜分の空氣は想像されるだらう。人々は自棄になつた樣に通路を塞いだり、肱を突出したりしてゐた。寢て居る者もあれば起きてゐるものもあつた。トランプや將棋を興じてゐるものもあつた。多くの者が手工細工をやつたが、中にはすばらしい手練を持つた者もあつた。モスコウに藏つてあるが、私は今でもアムアーストの捕虜が作つたものを持つてゐる。だが、彼等は肉體的にも精神的にも、健康を保持するために奮鬪したにも拘らず、その中の五人は發狂して了つた。私達はかう云ふ狂人達と一つ部屋に寢食を共にしなければならなかつたのだ。

この八百人ほどの捕虜と私は約一ヶ月一緒に暮した。その中約五百人は、英國軍艦に沈沒せられたドイツの軍艦の水兵であつた。その他の約二百人は戰爭のために捕へられたカナダ出稼ぎの勞働者で、殘りの百餘人のものはブルジョア階級出の文武官であつた。私達とこのドイツ捕虜との關係は、私達が革命的な社會主義者として拘禁されたと云ふ事實に對する彼等の見方の反應如何で、明らかに決定された。士官や下士官達の住居は木製の仕切りの後ろにあつたが、彼等は直に私達を敵と考へた。之に反して、兵卒達は日毎に友情を增して、私達の周圍に集つてきた。

私が、そこで暮した約一ヶ月と云ふものは、まるで、一つの連續的な民衆大會の樣なものであつた。私はその捕虜を相手に、ロシア革命の事、リープクネヒトやレーニンの事、第二インターナショナルの崩潰の諸原因、及びアメリカ合衆國の戰爭參加等について話した。かうした話の外に、私達はたえず討論會を催した。私達の友情は日に日に厚くなつて行つた。この捕虜大衆は彼等の態度から二つのグループに分ける事が出來た。卽ちその一方のグループは『もうそれは澤山だ。俺達は斷然止めなければならない。』と云ふ連中で、彼等はその街路や廣場に飛出す事を夢みてゐた。他方のグループは『奴等は俺達に何んの關係があるんだ？　いゝや、、、

眼のシレシア人で炭坑夫のバビンスキーは答へる。『俺は妻や子供達と深い森の中に家を建てゝ、その周圍に澤山おとし穴を作るだらう、さうして銃なしでは外に出ない樣にする積りだ。誰だつて俺達の傍には寄せつけないんだ！』

『バビンスキー、俺が行つたつて入れてくれないかね？』

『さう、貴方でも駄目だ。俺は誰も信用しねいんだ。』

その水兵達は私の生活を樂にする事なら何んでもやつてくれた。私は、食事を列に加つて一緒にとる事や、床洗ひ、馬鈴薯の皮むき、皿洗ひ、便所掃除等の强制的な仕事に私が加はる權利を離すまいとして、斷えず抗議しなければならなかつた。

××と××との間の關係は險惡だつた。××の中の或者は監獄の中に於てさへ××の行狀を書きつけてゐると云ふ風なのがあつた。××連は遂にその收容所の指揮官モリス大佐に、私の××××××××について苦情を持出した。そこでそのイギリスの大佐はホーヘンツオールレンの愛國家に肩を持つて、私に演說を禁じた。しかし、それも私達が收容所滯留の最後の二、三日前のことであつて、結局のところ、、、

ブカナン氏へ應酬してゐる。――『一九〇五年にセント・ペテルスブルグに於ける勞働者代表ソヴイエットの議長であり、革命と云ふ、、、仕事に多年の犧牲を拂つた革命家トロツキーその人が、ドイツ政府の補助金を得て實行せんとする計畫なるものと、何等かの關係があると云ふ聲明の確實さを、一瞬時たりとも信じ得らるゝであらうか？　それは、一革命家に對する紛れもない、前代未聞の惡意ある中傷である。ブカナン氏よ、君は誰からその情報を聞いたのであるか？　もし何にか聞き出したのならば、何故夫れを君は發かなかつたか？　六人の男が、ロシア假政府に對する友情の名に於て、同志トロツキーの兩手兩足をひつからめて行つたのだ！』と。

假政府がこの事件で演じた役割は、稍々明瞭を缺いてゐる。だが然し、外務大臣のミリウコフが私の逮捕に心から贊成してゐたことは、證明する必要が無い。一九〇五年、すでに、彼は『トロツキーイズム』に對して猛烈な戰ひをやつてゐた。この『トロツキーイズム』と云ふ言葉は、彼の新造語である。然し彼は、ソヴイエットを賴みとしてゐたし、彼の愛國的社會主義の同盟者達は、未だボリシエヴイキいじめを開始しなかつたので、益々愼重なる態度を採らねばならなかつたのだ。

ブカナンはその回想記の中で、『トロツキー及び他のロシア亡命者は彼等に關する假政府の希望が確かめられるまでハリフアックスで拘留された』と述べてゐる。イギリス大使によれば、ミリウコフは、即刻吾々の逮捕の通告を受けてゐたのである。四月八日既に、イギリス大使は、彼等を放免すべしと云ふミリウコフの依賴を本國政府に傳達したと稱してゐる。然るに二日後に至つてミリウコフは、その依賴を撤回し、吾々のハリフアックス滯在の長引くことを希望した。それ故、『彼

等を長く拘留して置いた責任は、ロシア假政府にある』とブカナンは結んでゐる。之等は、全く眞實らしく思はれる。唯だブカナンが回想錄中で說明し忘れた事は、私が假政府覆滅の爲に受理したと推定された補助金は何うなつたか？　と云ふ事である。この忘れられてゐたと云ふ事については、何等の不審も無い。と云ふのは、私がペトログラードに到着すると直ちに、彼は補助金に關しては全く何にも知らないと新聞紙上に聲明せねばならなかつたからである。『自由獲得の大戰』中に彼等の吐いた嘘ほど、澤山の嘘は古來ためしがない。もし嘘が爆發するものとしたら、地球といふこの遊星は、ヴエルサイユ條約よりずつと以前に、粉微塵に吹つ飛んでゐただらう。

遂ひにソヴイエットの干涉が始まり、ミリウコフは屈服せねばならなかつた。四月廿九日に、吾々が捕虜集合收容所から放免される時が來た。然し放免に際しても吾々は暴行を受けた。我々は荷造りするやうに命ぜられ、警備兵に伴はれて進んだ。何故？　そして何處へ行くのかと尋ねても、彼等は一言も喋べらなかつた。捕虜達は、要塞に連れられて行くのだと考へて興奮した。吾々は最も近くに居るロシアの領事に賴まんとしたが、彼等は再びこの賴みを斥けた。吾々は十分な理由から之等の海賊共を信じなかつた。そこで吾々は、何處へ行くのかを打ちあけるまでは、動かないと言ひ張つた。指揮者は强制手段を講じた。警備の兵士達は、吾々の荷物を運び出した。だが吾々は頑として床架に止まつた。そして遂ひに指揮官が吾々をノールエー船でロシアへ送還するのだと、特長あるイギリス植民地風のやさしさで話したのは、吾々が嘗つて一ヶ月前に船から引致せられた時の樣に、興奮した一團の水兵達の間で、警備兵が將に吾々に手をかけんとした時であつた。大佐の

紫色の顔が痙攣的にゆがんだ。こいつ等が自分の手からすり抜けて行く、あゝ、アフリカの海岸だつたならば！　と考へると、大佐はやれ切れなかつたのである。

吾々が收容所から連れ出されて行く時、仲間の捕虜達は、吾々に印象深い別れをしてくれた。たとひ彼等は、自分達丈けの部屋に閉込められ、二三の者が隙間から鼻を突出してゐたに過ぎなかつたが、水夫と勞働者は兩側に列を作り、即席に作られた合唱團は、×××を歌ひ、四方から友情厚き手が吾々に向けられた。一人の捕虜は、×××に對する賞讃と×××に對する惡罵の短き演說をした。今でも吾々が、、、、、、にアムハーストに於て、ドイツの水夫達と手を握り合つてゐた事を思ひ起すと、喜びの感にうたれる。後年になつて私は、ドイツに居る彼等から多くの親切なる手紙を受取つた。

吾々を逮捕した英國の警官マッヘンは、吾々の出發に居合せてゐた。捨臺詞として、私は、『憲法議會に於ける私の最初の仕事は、英領カナダの官憲によつて、ロシア市民が不埒な待遇を享けた事について外相ミリウコフを詰問する事だ。』と彼に警告しておいた。彼は早速捩返した。――『君が決して憲法議會に入らないやうに祈つておくよ。』

第九章　ペトログラード入り

ハリファックスからペトログラードへの旅は、恰度トンネルを抜けるやうな單調なものであつた。そしてそれは實際、革命へと抜けるトンネルであつた。スウエーデン通過について記憶に殘つてゐるものと云へば、今まで見たことも無いパン切符くらゐである。フインランドでは、車中でヴアンデルヴエルデとド・マンとに會つた。彼等も亦ペトログラードへ行く途中であつた。

『私を憶えてゐなさるか？』とド・マンが尋ねた。

『憶えてゐる。全く人間は、戰時には大變變はるもんだが。』そして吾々の會話は、このあまり鄭重でない返辭で切れてしまつた。

青年時代にド・マンは、マルクシストにならうとして、ヴアンデルヴエルデと盛んに議論をたゝかはした。戰爭中に彼は、その青年時代の無邪氣な迷ひを政治に打込み、戰後になつて彼は、それを理論方面に打込んだ。彼は、政府の一代表者となり、それで終つてゐる。一方ヴアンデルヴエルデの方は、――インターナショナルの幹部連の中でも一番重要でない一人であつた。彼は、ドイツ人もフランス人もその椅子に居られないために議長に任命された。理論家としての彼は、單なる編纂者の如きものであつた。彼は、彼の國の政府が列强間でやつたと同樣に、種々なる社會主義的思潮の間を泳ぎ廻つた。然し決してロシアのマルクシストの間では、彼の權威は認められてゐなかつた。雄辯家としての彼は、單にすばらしい平凡人に過ぎなかつた。戰爭が進むにつれて、彼はインターナショナルの議長の地位を辭し、宮内大臣の地位に据つた。私は執拗に私のパリ新聞で彼を攻擊した。彼はその返答としてロシアの革命者達に、ツアーリズムと講和せんことを訴へた。今や彼

は、ロシア革命に向つて、ツアーリズムに代つて聯合國の仲間に入れとすゝめるために、ペトログラードへ行く途中であつた。吾々はお互ひに何んとも云ふ事はなかつた。

フインランド國境のベレオストロフ停車場で、吾々は、合同インターナショナリストやボリシエヴイキの中央執行委員會の代表者達の出迎へを受けた。メンシユヴイキからは一人も來ては居なかつたし、メンシユヴイキ中のマルトーフ一派のインターナショナリストも來て居なかつた。私は、二十世紀の初めにシベリアで會つた古い友ウリツキーをかき抱いた。彼はパリーのナツシエ・スロヴオ新聞の常設スカンヂナヴイア通信員をやつてゐた。そして戰時中はロシアと吾々とを聯絡する鎖として働いた。吾々がベレオストロフ驛で會つてから一年經つて、彼は、或若き社會革命黨員に暗殺された。初對面のカラハンもこの歡迎委員の中にゐた。カラハンは、後にソヴイエット外交官として有名になつた。ボリシエヴイキの代表者は、フイヨドロフであつて、間もなくペトログラード・ソヴイエットの勞働部の議長となつた金屬職工である。

*社會革命黨は、人民黨運動の右翼を代表してゐた。大體に於て、プロレタリアート及び農民の利害關係の同一なることを主張し、ツアー政府に對して、、、、、、、、を用ひる點に於て、社會民主々義者及びマルクシストと區別される。——英譯者。

吾々がベレオストロフに到着する前から、私はロシアの諸新聞を讀んで、チエルノフ、ツエレテリ及びスコベレフが聯立假政府に參加した事を知つてゐた。政治的グループの色が急にはつきりして來た。漠然としたものではあるが、私達が、早速取りかゝらなければならないものとして前途に

控へてゐたのは、ボリシエヴイキの人々と同盟して、メンシユヴイキ及び人民黨主義者に向つて執拗なる戰ひをいどむことであつた。

吾々はペトログラードのフインランド線最終驛で、すばらしい歡迎を受けた。ウリツキーとフイオドロフが、歡迎の辭を述べ、これに答へて、私が、第二次革命の——即ち私達のものとしての革命の準備の必要を力說した。そして彼等が突然私を胴上げした時に、私は、ハリフアツクスの事が思ひ出された。其處で私は、同じ樣な經驗をしたのである。然し今私をさし上げてゐる凡ての腕は、友人の腕であつた。吾々は無數の旗に取圍まれてゐた。私は、妻の興奮した樣子と子供達の面喰つた蒼い顏を認めた。子供達にはこれが良い兆候か惡い兆候か分らなかつたのである。子供達は既に前にも一度革命に欺かれてゐたのだ。

私の恰度まうしろのプラットホームの端に、ド・マンとヴアンデルヴエルデがゐるのを認めた。明かに彼等は、群衆に交じることを恐れてゐたらしく、故意に後ろの方に控へてゐた。ロシアの新しき社會主義大臣達は、此の二人の仲間に對して何等の歡迎の意を表さなかつた。きのふまでのヴアンデルヴエルデの役割は、みんなの心にあまりにも生々しい記憶だつた。

停車場に於ける歡迎後直ちに、私は、渦卷の中に卷込まれ、人と事件とが私の側を、奔流の上の藁屑のやうにくる〳〵と旋廻して行つた。今日になつてみれば、大事件といふものは個々人に關する記憶までは引受けてはくれない。なぜなら、かうした場合には、記憶力といふものがあまり澤山背負ひ込まないやうに氣をつけるのだ。私は、停車場から眞直ぐにソヴイエット執行委員會に出席

したやうに憶えてゐる。當時相變らず議長をしてゐたチハイゼは、多少、無愛想な挨拶振りだつた。ボリシエヴイキは、嘗つて一九〇五年に私がソヴイエットの議長をしてゐたのを理由として、執行委員に任命したいといふ動議を提出した。この提議は、執行委員會を混亂に陷れた。メンシュヴイキと人民黨主義者は、互ひにざわめき出した。當時、彼等は凡ゆる革命機關に絶對多數の權力を持つてゐたのだ。遂ひに私は、顧問の資格で執行委員會に加へられることになつた。私は委員章を買ひ、黑パンとお茶の饗應を受けた。

ペトログラードの町でロシア語を聞いたり、商店のロシア語で書かれた看板を見たりする時の子供達と同じ戸迷ひが私達夫婦にも、多少はあつた。私達は十ヶ年の間、この首都を離れてゐたのであつた。私達が首都を離れた當時、長男はほんの一歳になつたばかりで、下の子は、ウキンナで生れたのだ。

ペトログラードの守備隊は、すばらしく大きなものであつたが、然し、最早、、、、、に固まつてはゐなかつた。兵士達は行進中に××××、××に赤いリボンをつけてゐた。全く信じられない夢のやうだつた。兵士の調練は、依然として大通りで行はれてゐた。歩兵が、突擊のため伏せをしてゐるかと思ふと、一線に竝んで遠くまで走つて行く、かと思ふとまた伏せをした。巨大な怪物である××は、依然として革命の背後に立ち、其の影を投げかけてゐた。然し大衆は、、、、、、、とは信じなかつた。そして調練は、止め手が無い爲に、つづけられてゐるとしか思はれなかつた。××は不可能となつた。しかし、自由主義者(立憲民主黨)

も、それからいはゆる『革命的民主々義』の幹部連までが、まだ、そのことを理解できなかつた。彼等は三國協商のスカートを手離なすことをひどく恐れてゐた。

私は、ツエレテリといふ人間はほんのちよつとしか知らないし、ケレンスキーは全然知らず、チヒハイゼは多少知つてゐる。スコベレフは、私の古い弟子であつた。チエルノフとは、外國で屢々筆戰を戰はした。ゴツツとは今初めて會つたのだ。之等がソヴイエット民主政治の指導體であつた。

ツエレテリはたしかに、遙かに他を凌いでゐた。私は一九〇七年のロンドン會議で初めて彼と顔を合せた。其の時彼は、ロシアの第二國會内の社會民主黨の議員團を代表してゐた。當時から彼は、立派な雄辯家で、彼の道德的廉潔は非常な魅力を持つてゐた。シベリアに於ける苦役時代は、彼の政治的權威を一層高めた。彼は大人となつて、そして革命場裡に歸り、直ちに同志及び同盟者の上に立つた。この男は、私としても輕々しく取扱へない唯一の敵だつた。然し歷史上、よくある如く、ツエレテリが革命家でないと云ふ事を證據立てるためには、革命といふものが必要だつた。ロシア革命を論ずるに際して、混亂に陷ることを避けるためには、ロシアと云ふ一國の立場からではなく、寧ろ世界的見地から出發する必要があつた。然るにツエレテリは、ジョルジア及び第二國會に於ける經驗を背景として革命を論じた。彼の政治的視野は、全く狹隘なものであつたし、教育は、文字通りに淺薄なものに過ぎなかつた。彼は、自由主義に關して深い尊敬を持つてゐた。彼は生半可な教養のブルジョアの眼、——文化の保全を心配して慄へ上つた眼で、革命の不可抗力を觀

察した。目醒めたる大衆は、彼にとつては、、、、、、に見えて來た。彼の最初の言葉からして、私は彼が敵であることを認めた。レーニンは彼を稱して『のろま』と云つた。殘酷な評し方であつたが、然し適切である。――要するに彼は才能あり正直な人間であつたが、融通のきかぬ男だつたからである。

レーニンは、ケレンスキーを『けちな大ぼら吹き』と云つた。これ程うまく云ひあてた言葉は無いだらう。ケレンスキーは、ひよつくり浮び上つた人物、つまり歴史的な重要時期にあり勝な愛嬌者であつたし、今も尙ほさうである。革命の怒濤が、識別力の訓練を受けてない處女地の大衆に押寄せるとき、かうした英雄、つまり自分自身の威勢のために急に目がくらんでしまふ英雄を、波頭に押し出すのである。ケレンスキーは教父ガポンやクルスタリョフの直系だ。彼とは緣もゆかりもない一つの連續的因果關係中の偶然事の化身である。彼の最上の演說といへども、水盤の中で華かに踊つてゐる水に過ぎなかつた。一九一七年、此の水は沸騰し、湯氣を立て、湯氣の雲は、彼のためには後光となつた。

スコベレフは、初めヴイエンナで學生時代に、私の指導の下に政治運動を始めた。彼は、ウキンナのブラウダの編輯委員の地位を棄て、第四國會の選擧に立候補するため、故鄕のコーカサスへ歸つた。これはうまく行つた。國會では、メンシュヴイキの影響下に入りメンシュヴイキと共に二月革命を起した。我々と彼との關係はずつと前に絕えてゐた。ペトログラードで、私は、新設の勞働大臣をしてゐる彼に逢つた。彼は執行委員會で力みかへつて、私の方へやつて來て、執行委員會の

事をどう思ふかねと尋ねた。私は答へた。

『間も無く我々は、君を叩きつけてやるよ。』

六ヶ月後に事實となつてあらはれたこの睦じい豫言を、スコベレフが笑ひながら私に想ひ起させたことも、あまり古い話ではない。十月革命の勝利後間も無く彼は、ボリシエヴイキだと聲明した。レーニンと私は、彼の入黨に反對だつた。勿論、今日では彼は、スターリン黨の一人であり、これで萬事落ちつくところに落ちついたわけである。

私達親子は、やつと『キエフ旅館』に部屋を見つけた。二日目に、かゞやかしい顏をした若い役人が我々に會ひに來た。

『お分りになりますかね?』

私には誰だか分らなかつた。

『私は、ロギノウです。』

此の丁寧な若い役人を見つめてゐる中に、私は、此の青年が一九〇五年には鍛冶屋で、戰鬪部隊の一人として、官憲と共に市街戰に參加し、青年の熱情から私の心にしつかりと結び附けられた男であることが分つた。一九〇五年以來、私は彼の行先を見失つてゐた。この男はプロレタリアンのロギノフではなくて、富裕な家庭の出のセレブロウスキーと呼ぶ當時工藝學校の一學生で、若い時に勞働者の仲間に入つてゐたものであることを、私は、今、このペトログラードで、その男自身の口から始めて知つたのであつた。反動時代に彼は、一人前の技師となり、革命から逃避した。戰時

中は、ペトログラードにある二つの大きな工場の監督長官をしてゐた。然し二月革命は、彼を搖り醒まし、若い時代の事を思ひ起させた。彼は新聞で私の歸國を知り、今この私の前で、ぜひ家族と一緒に自分のアパートにしかも直ぐ今から引越して呉れと云ふ。暫く考へた後、私は引越すことにした。

セレブロウスキーと彼の若い妻とは、長官にふさはしい立派な贅澤な部屋に住んでゐた。彼等には子供が一人も無かつた。凡てが都合良かつた。半ば飢餓に瀕し荒廢してゐる町で、我々はまるで天國に居るかのやうに思へた。然し我々二人が政治論を始めると、突然、今までの二人の間は變つて行つた。セレブロウスキーは、愛國主義者であつた。しばらく經つと、彼が大のボリシェヴイキ嫌ひで、レーニンはドイツの代表者だと考へてゐることが分つた。最初から私は彼に反對した。彼は直ちに私に對して用心深くなつた。我々は一刻も彼と同じ宿屋に住むことは出來なかつた。そこで、私達はこの氣持のいゝ、然し私達にとつては全然無關係な人間の家を去つて、『キエフ旅館』の部屋へ歸つた。其後しばらくして、セレブロウスキーは、私達の子供を度々自分の家へ呼んでお茶や砂糖漬を御馳走した。子供達は、演說會で聞いたレーニンの演說の印象を、たのしげに彼に話した。子供達は喋つたり、砂糖漬を喰べたりしたので、うれしさで顏を眞赤にしてゐた。

『然し、レーニンはドイツのスパイだよ』とセレブロウスキーは云つた。

何といふ言草だらう。よくもそんなことが言へたものである。子供等はお茶とお菓子の手をやめて飛上つた。『とても、とても、胸糞が惡くてやり切れやしない。』——貧弱な語彙の中から適當な言

葉を探しながら、兄の方がきつぱりとかう言つた。すると今度は宿の主人が腹を立てた。こんな風で彼等との交際は終りを告げた。十月の勝利の後、私はセレブロウスキーに說いてソヴイエットの仕事にたづさはらせた。ソヴイエットの仕事をすると多くの者がおのづとさうなるのであるが、彼も亦その仕事をしてゐる中に、共產黨員になつてしまつた。現在、彼はスターリンの中央委員會の一員であり、スターリン政治の支柱の一つである。それにしても、若し彼が一九〇五年の革命に一個のプロレタリアで通ずることが出來てゐた以上、今日ボリシエヴイキで通すことはもつと容易だ。

七月時代——この間のことに就ては後に言ふことにする——の後、ペトログラードの町々には、ボリシエヴイキに不利な流言蜚語が旺んに行はれた。私はケレンスキー政府の手によつて逮捕せられ、追放から歸國して二ヶ月目に、馴染のクレステイー刑務所へ又しても入れられた。アムハーストのモーリス大佐は、朝刊新聞の記事で私の投獄一件を知つて嘸そよろこんだことであらう。そして、そんな風にして悅に入つた者は他にも幾人かあつたに相違ない。だが、子供等の蟲は治まらなかつた。さきには捕虜收容所で暮したお父さんが、それが濟むと軈て今度は刑務所で暮すことになつた。これが『革命』といふのなら、それは日頃から聞いてゐるものとは似てもつかないものである。どうして呉れる！　さう言つて子供等は母に駄々をこねた。母親は子供等の得心の行くやうに、今度のは本當の革命ではないのだと言つてきかせた。けれども、子供たちの胸には懷疑が喰ひ入つてゐた。

私が『革命的民主々義』の刑務所から釋放されると、私達一家は、或る自由主義的新聞記者の未亡人の持物になつてゐた大きなブルジョア屋敷の一部に間借りをして住むことになつた。十月革命の準備は全速力で進行してゐた。私はペトログラードのソヴイエットの議長に推された。新聞はありと凡ゆる言辭を弄して私を攻擊した。一方、私達の一家は、益々高じて行く敵意と憎惡の壁の中に取圍まれた。下女のアンナ・オシポウナは隣り近所のお內儀さん達の惡罵を忍んで、常に住宅委員會へパンの配給を受けに行つた。私の男の子は學校で皆に追ひ廻され、私に因んで『議長』といふ渾名をつけられた。私の妻が木工組合の勤めを終つて歸宅する時、門番頭は眼いつぱいに憎しみを罩めて彼女を睨みつけた。階段の上り下りは苦痛な不愉快なことであつた。家主は電話を何度もかけて來て、もしや部屋附の家具を私達がどうかしてはゐないかを確かめた。私達は引越したくなつた。――かと云つて行くところが何處にあらう？　ペトログラード中には私達を置いてくれる部屋はなかつた。

事態は益々堪へ難くなつた。ところが、何人かゞ卒然として此の住宅封鎖の障壁を不思議な力を以て取除いて呉れたかのやうに、或るよき日にこの住宅封鎖が止んだ。門番頭は私の妻に出會つた時、一番大事な間借人だけが受ける資格のあるお辭儀をしたのである。住宅委員會では、後廻しにされたり惡口を言はれたりしないでパンが貰へるやうになつた。誰も今は私達の鼻先で部屋の扉をぴしやりと締めるやうなことをしなくなつた。一たい誰のお蔭でかうなつたのか。魔術師は誰だ？この不思議な魔術の主はニコライ・マルキンであつた。私は此のマルキンのことを少しく叙べなけ

ればならない。實に此のマルキンの力で、かうしたマルキンの集團の力で、十月革命は勝利を得たのだ。

マルキンはバルチツク艦隊の一水兵であつた。彼は砲手であつた。そして彼はボリシエヴイキであつた。初めの頃、私達はマルキンの存在に氣付かなかつた。何か一言いふのにも骨が折れた。おまけにはにかみ屋で鈍重だつた。深く潛んだ力から來る鈍重さだ。樣子と來たら、極く平凡な、全く平凡な型だつた。彼が私達の家庭を護つて呉れようとした當座には、私は彼の居ることすら知らなかつたのである。彼は私の子供達と知合になり、スモルニーの酒保で、子供達に、紅茶とサンドキツチの御馳走をして呉れた。總じて、この不景氣時代には容易に味へなかつた樂みをマルキンは子供等に與へて呉れたわけである。自分が何者であるかといふことは決して知らさずに、萬事よく行つてゐるかどうかを訊きにだけ顏を出すのが、彼の常であつた。私はこの男の存在を怪しいとも思はなかつた。子供達とアンナ・オシポウナとの口から私達が敵の眞中で暮してゐるといふことを彼は聞いた。察するところ、マスキンは、單獨にではなくて若干の水兵達と一緒に、門番頭に會つたり住宅委員會に談んじ込だのであらう。私達の周圍の事情が俄に斯うも變つたといふのは、彼が何かすばらしく効目のある言葉を以てしたのに相違ないらしかつた。かういふ次第で、十月革命に先立つて、私達の住んでゐる所では既にプロレタリアートの獨裁權が行使されてゐた。私達一家の者が、この事態の好轉は私の子供の友達である水兵のお蔭であると知つたのは、その後しばらく經つてからのこ

とである。

ソヴイエツトがボルシエヴイキに轉向して來るや否や、ソヴイエツトの中央執行委員會は印刷工場の所有者の援助を得て、ソヴイエツトから機關紙を奪ひ取つてしまつた。そこで、吾々には新しい機關紙が必要であつた。私はマルキンに相談した。彼は何處とも知れず消え、必要な交渉をやり、印刷業者の折衝を重ね、數日を出ない中に、吾々は一つの新聞ができた。吾々はそれを『勞働者と兵士』と名づけた。マルキンは夜も日もこの新聞社で世話をやいてくれた。十月時代、黑いむつゝりした頭を持つた彼のがつしりした姿は、最も危急な時機に最も危險な場所に、いつも現れてゐた。彼が私の所へ來て言ふことは、萬事が都合よく捗つてゐるといふこと、私に何か要求がないかといふこと、この二つに限られてゐた。彼の活動の範圍は擴がつて來た。——彼はペトログラードに於てプロレタリアートの獨裁制を打樹てようとしてゐるのであつた。

市内にある富裕な酒藏の掠奪が、浮浪民によつて行はれ始めた。危險なこの運動の背後には何者かがあつて、此の度の革命を酒精の熱火の中に葬り去らうと企てゝゐた。マルキンは直ちに此の危險を見てとつて、進んでかうした『革命の冒瀆』と闘つた。彼は諸所の酒藏を警衛した。その警衛が不能であることが分ると、彼は寧ろ酒藏を破壞した。破碎された酒壜に充ちてゐた、高價な酒の洪水の中を、彼は長靴を穿いて、膝まで浸つて歩いた。酒は往來に流れ出て、泥溝傳ひにネヴ河に流れ込んだ。雪は酒に染められた。呑助共は路傍に四つ這ひになつて泥溝の中の酒を啜つた。拳銃を手にしてマルキンは、酒氣を帶びない『十月』のために奮闘した。肌まで酒が滲み込んで、最上

等の酒の匂ひを發散させながら、マルキンは私達の二人の息子が息をはづませて待つてゐる家へ歸つて來た。マルキンが反革命の酒攻めを退散させたのである。

私が外務大臣に任命せられた時には、何から始めてよいか分らぬやうに思はれた。次官からタイピストに至るまで、省内の誰も彼もが私に反抗して怠業を行つてゐた。戸棚には鍵がかけられ、その鍵の行衛は不明であつた。私は直接行動の祕訣を得てゐるマルキンを招致した。二三人の外交官が二十四時間を一室に監禁され、翌日になると、マルキンは私に鍵を持參して省務に就くことを促した。然しながら、私はスモルニー館で革命の全般的な仕事の處理に忙殺されてゐたので、暫くの間、マルキンが非公式に外務大臣をやつた。彼は人民委員の機構を敏速に呑込むと、貴族生れの泥坊猫式な外交官共を斷乎として罷免し、部署の改造を行ひ、依然として外交官の上品な鞄に收めて國外から密輸入されてゐた禁制品を沒收して、浮浪窮乏の人々を之を以て潤し、書類中、參考資料となるに足る祕密文書を摘出して、彼の責任の下に彼自身の註釋付きの小册誌として公刊した。彼は何等の學位を有たない。彼の文中には文法上の誤りがあつた。彼の註釋は時によると全く途轍もないものであつた。しかも、彼は概して確實に精密に外交上の機微に觸れて之を處斷した。キユールマン男爵やツエルニン伯爵等は、ブレスト・リトウスクに於て黃表紙のマルキンの小册誌を熱心に讀んだ人々である。

やがて内亂が始まつた。マルキンは多くの役割を果した。今や彼は東部一帶の地方にプロレタリアートの獨裁制を樹立するために盡力してゐた。彼はヴオルガの河上に小艦隊を指揮して、前面の

敵を追擊中であつた。危險な位置で戰かつてゐる男が、マルキンであると聞く度毎に私は安心した。けれども到頭いけなかつた。ヴオルガ支流のカマ河上の戰鬪で、敵の放つた砲彈がニコライ・ゲオルギエヴツチ・マルキンに命中して、嚴乘なこの水兵の脚をかつさらつてしまつた。彼の計報に接した時、恰も花崗岩の大圓柱が眼前に倒壞するのを見るやうな思ひがした。リボン附きの水兵帽を被つてゐる姿の彼の寫眞は、私の子供の卓子の上に立てかけられてあつた。

『坊、坊。マルキンさんが死んだよ！』

私がかう言つた時、私の眼前で、咄嗟の苦惱のために二つの蒼白い顏が歪んだ。子どもたち二人はあの憂欝なマルキンとは仲間同志だつた。マルキンは、此の幼い二人に、彼の計畫だの、自分の祕密だのを打明けてゐた。彼は曾て、たつた九つにしかならぬセリヨーザに、自分が非常に愛してゐる女があることや、その女が自分をずつと前に捨てゝしまつたこと、さうして之がマルキンの心に絕えず暗愁の影を投げてゐることなどを涙ながらに話した。セリヨーザは此の話を聞くと、彼もまたその眼に泪を湛へながら、マルキンの此の祕密を、ひそひそ聲で母親に物語つた。子供がまるで、自分の同輩でありでもするかのやうに、その魂を子供達に披いて見せる、このやさしい友達は、同時にすばらしいお伽噺に出て來るやうな年を積んだ海象であり、革命家であり、眞の勇者であつた。あの外務省の地下室で、拳銃や小銃の用ひ方を二人に敎へて呉れたそのマルキンが、今は死んでしまつてゐるなどゝいふことは、いつたい、本當かしら？　この計報のあと、夜の靜寂の中で、毛布にくるまつた二つの小さな軀がふるへてゐた。欷り泣きをじつと聽いてゐるほかに仕樣も

なかつた。

生活は、大衆集會の旋風であつた。私がペトログラードに到着した時、革命的辯士は誰も彼もが聲を涸らしてゐた。一九〇五年の革命は私に『聲』を大切にすることを敎へてくれてゐた。このお蔭でどうにか、私は辯士の列伍から落伍することをまぬがれた。演說會は工場や、學校、大學、劇場、サーカス、街頭、廣場などで行はれた。歸宅する時はいつも眞夜中であつて、私は疲れきつてゐた。半ばまどろみながら、私は、政敵に向けるべきすばらしい論鋒を探し出すのが常だつた。朝の七時、時によつてはもつと早く、定まつて、私は厭な耐へがたい入口の扉のノックの爲に、澁々と寢床から引つ張り出された。起き上がると、或はピーターホーフの演說會へ來るやうにと言ひ、或はクロンスタットへ來いといつて、既に水兵が河上に私を迎へるための曳船を用意して待つてゐると言ふ。その都度、とても今度の演說會はやり通せないらしく思へるのであつたが、而も、その度毎に、どこかにかくれてゐた精力の貯へが浮び出して來る。その勢で私は一時間なり二時間なりの演說をするのであつた。それが終ると、他の方面からやつて來た代表者達が幾重にも私を取卷いて、三つなり五つなりの場所に數千人の勞働者が集合してゐて、既に數時間、私の演說を聽かうとして待つてゐると私に告げるのであつた。當時に於ては、之等の新しく眼覺めて來た大衆はどんなにか待遠しい思ひで、新しい言葉を聞かうとしたことであつたか知れぬ！

『モダーン・サーカス』に於ける大衆演說會は、私にとつては全く特別なものであつた。私の政敵の者もまたそこを特別なものと考へてゐたが、それは私とは異つた意味に於てゞある。彼等政敵は

このサーカスを私の特別な要塞と思ひ、その中では演説しようとはしなかつた。但し、私がソヴイエット内の妥協主義者たちを痛撃し出す度毎に、『此處は君のモダーン・サーカスではないぞ。』といふ猛烈な叫號が私の演説を妨害した。この野次はお極りになつてしまつた。

このサーカスで私が演説するのは多くは夕方であつたが、時によると、夜更けになることもあつた。聽衆は勞働者、兵士、過勞の母親達、街頭の孤兒共、――一言にして言へば資本の下積みの人々であつた。隅までぎつしり詰まつて、誰も彼も極度に身を縮めた。少年は父親の肩車に乘つた。幼い者は母親の胸に抱かれてゐた。誰一人として煙草などは吹かさなかつた。露臺は人々の重みで崩れ落ちはしまいかと氣づかはれた。演壇へ通じる人垣の道は狹くて、時には、私は群集の肩越に其處へ、送り込まれることまであつた。待遠しい息づきの中にあつた空氣が、『モダーン・サーカス』獨特の激情的な叫喚の聲をどつと捲き起す。私の上方にも、私の横手にも臂と胸と頭とが犇々と重なり合つてゐる。人いきれにむつとする洞窟の底から私は呼びかけるのであつた。手を動かせば誰かの體に屹度さはつた。すると、觸られた男は、構ひませんよ、演説を中絶させないでどしどしつゞけてくれとでも云ふやうな、丁寧な身動きをする。どんな疲れ果てた時でも、一たび此の感激に燃え立つた集團の電壓を拒むことはできなかつた。彼等は聞きたかつた。聞いて理解したかつた。そして自分らの道を見つけたかつた。時として、この打つて一丸となつた群集のはげしい知識慾が、演説をしてゐる私の唇にも感ぜられるやうに思へることがあつた。さうした時には、あらかじめ考へ出されてゐた論旨や言葉が、此の嚴肅な知識慾に對する同情のために途切れて影を潜め、

演説者には全く思ひもかけない、而し聽衆には熱烈に求められてゐる他の言葉が、他の論旨が私の潜在意識の中から滾々として湧いて來た。こんな場合には、私は他の人の演説を聽いてゐるやうな氣がした。そしてもしも私の意識的な道理をきかせたら、この演説者は、夢遊病者のやうに屋根から落ちるかも知れないといふ懸念から、私はつとめてこの演説者の思ふまゝにしようと努めた。

モダーン・サーカスは右のやうなものであつた。モダーン・サーカスは、熱烈で、溫順で、狂的な、獨得の輪廓を具へてゐた。赤ん坊が無心に乳を吸つてゐるその母親の胸から、贊同的な或は怒罵的の叫びが起るのであつた。全聽衆が、また、渴き飢ゑた唇を革命の乳房に押しつけてゐるやうなものだつた。かくこの乳呑兒は素速く成長した。

モダーン・サーカスから出ることはそれに這入ることに比べると一そう困難であつた。群集は新くし築かれた結合を解體することに不承知であつた。彼等は解散しようとしなかつた。すつかり疲れ切つた夢心地で、人々の頭上を無數の腕に支へられながら、泳ぐやうにして、入口へ出るより外なかつた。時折り、かうした群集の中で、私は私の娘二人の顏を見かけることがあつた。この二人の娘はその母親と一緒に近所に住んでゐた。姉は十六で妹は十五だつた。娘達の興奮した眼ざしに答へて、私は眼配せするか、又は出がけに彼女達の溫い手を握るのが關の山で、群衆はその後からすぐ私達の間を裂いてしまつた。サーカスの門を出ると、『サーカス』が私の後に蹤いて來た。街路は叫び聲や足音でどよめいた。と、或門扉がさつと開く。私はその中へ吸込まれる。そして扉が閉まる。これは、私の友人のせいであつた。嘗てニコラス皇帝が踊り娘のクセシンスカヤに拵へてや

つた御殿の中へ彼は私を伴れ込むのであつた。其處にはボリシエヴイキの本部がおさまり込んでゐて、灰色の軍服を着けた人が絹物づくめの椅子に腰を下ろしたり、久しく磨きをかけられない床の上を重たい長靴で歩き廻つてゐた。其處で群集が消え去るのを待つてからでなくては、出て行くことが出來なかつた。

演說會後、漸く人通りも稀になつた暗がりの路を私が歩いてゐると、後の方で跫音がした。考へて見ると、前の晩にも、その前の晩にも同じやうに跫音が聞えたやうに思はれた。ブローニング連發を摑みながら、くるりと私は向きを變へて、二三歩つか〳〵と歩みを戻した。

『どうしたいんだ?』と、嚴かに私は質問した。私の前には一人の若い眞面目な顏があつた。

『護衞させていたゞきます。サーカスへ來る者の中には敵が居ります。』から答へたのは大學生ボズナンスキーであつた。その時以來、彼は常に私の側にゐて呉れた。革命の全期間中、いろんな種類の、しかしながら、いつも重大な責任を伴つてゐる特別の使命から、彼は私に隨伴した。彼は私の生命を護つて呉れた。戰地では彼は私の祕書官として働き、軍需品の精査を行ひ、重要な記錄を造り、新規な戰鬪部隊を編成して自ら陣頭に立つて戰ひもした。後には黨內反對運動に參加した。今は流刑中である。未來はふたゝび我々二人を一緒にするだらう。

十二月三日。『モダーン・サーカス』の聽衆に向つての演說中に、私はソヴイエット政府の活動に關する報告を行つた。ツアー時代やケレンスキーの臨時政府時代の外交信書を、吾々ソヴイエット政府の手によつて公刊することが、有意義である旨を私は說いた。私は其の理由を說明した。民衆

は、、、

つた。この逆宣傳を轉がし出した最初のものはブカナンである。そこで私は外務大臣（五月には既にミリユコフは職を去つて、テルエスチエンコがその任に當つてゐた）宛に公開狀を發し、審さに私の大西洋オデツセイ物語を敍べた。私の主張は次の如き質問に決着した。――『大臣さん、君は、かくの如き破廉恥の中傷を恬として醜ぢず、自己を改めるために指一本動かさうとしなかつた男が、英國大使として來てゐることを穩當と考へるのか？』

この私の言葉に對しては何等の應答もなかつたし、またあらうとも思はなかつた。けれども、ミリユコフの新聞が、横から口を出して聯合國の一員の大使に左擔し、自己辯護をくりかへした。私は出來る限り手酷しく、吾々の上に加へられた誹謗の下手人をやつゝけてやらうと決心した。恰かも第一回全露ソヴイエット大會が開會中であつた。六月五日の大會場は出席議員で滿場立錐の餘地もない。會が將に閉ぢられようとする時、私が起つて個人的な一場の演說を試みた。翌日、ボリシエヴイキに反對の立場にあつたゴルキーの新聞は、當日の私の演說の最後の言葉と當時の全體的空氣とを次のやうに報道した。

『ミルユコフは吾々がドイツ政府の傀儡であると稱して、吾々を攻擊する。私はこの革命的デモクラシイの演壇に於て、公明正大なロシアの新聞に向つて、（この時トロツキーは特に新聞記者席に身を向ける。）私の次の言葉がそのまゝ再錄せられることを望む者であります。ミリユコフにして彼みづから吾々に彼の加へつゝある攻擊的言辭を撤去しない限り、いつまでも彼の額には逆宣傳者としての汚名が烙きつけられてゐるであらう。』

さて同新聞は續けて言ふ。『トロツキーの力强い威嚴のある聲明は、滿場一致の喝采を受けた。彼の言葉が終つた時、大會の全員は、所屬黨派の別なく、數分の間、彼に對して嵐の如き拍手を送つた。』

しかも、同大會の議席の十分の九までは吾々の反對黨員によつて占められてゐた。しかし、次のことによつて明かな通り、その成功は一時的のものに過ぎなかつたのである。それは議會政治に附隨するパラドツクスの一つであつた。翌日、レチ（言語）紙は、應戰的な態度で、ニユー・ヨークのドイツ愛國主義聯盟が假政府顚覆のため一萬弗をトロツキーに提供したといふ記事を發表した。これは少くとも本當であつた。ちよつと說明するならば、私が歐羅巴へ向つて亞米利加の地を離れる二日前に、私が度々講演に行たことのあるニユー・ヨーク在住のドイツ勞働者が、アメリカ人、ロシア人、ラトギア人、ユダヤ人、リトアニア人、フインランド人などの私の知人と共に、私のために送別の會を催して呉れた。その際、×××××のための寄附金が集められた。その金は三百十弗の額に達したのであるが、その中で百弗は獨逸勞働者から、司會者の手を經て寄贈された。翌日、送別會の司會者側の同意を得て、右の三百十弗の金を、歸國しようとして旅費に不足を感じてゐたロシアの出稼ぎ人五名に分配したのである。これが例の一萬弗物語なのだ。ゴルキーの新聞のノヴヤ・ジズン（六月二十七日）の紙上で、次のやうな寓意的文言を以て終つてゐる論文によつて、當時私はそのことを詳說して置いた。――『將來、問題が起こつた時、正當な典據となるために、更に、嘘吐きや、中傷者や、カデツト黨新聞記者やその他一般に反動の犬共のためにも、私は生まれ

てから未だ嘗て一萬弗は愚か、その十分の一の金額さへも、自分の意のまゝに扱つたことはないと告白して置くことは緊要のことゝ思ふ。おそらく、かうした打明け話しは、ミリユコフ教授の精巧な暗示の何によりも一層有效に、カデツト黨支持者間に於て私の評判を臺無しにしてしまふであらう。然しながら私はもはや、ずつと以前から、自由主義的ブルヂヨア連中の贊助を失つても、息の根は止まらないといふ考へに安んじてゐるのである。

*ミリユコフ教授を指導者として組織せられた「立憲民主黨」。通俗に「カデツト黨」と呼びなしてゐる。これは原語の頭文字から來た語である。そして、この黨を「カデーツ」と呼ぶ。「カデート」といふ語はロシア語では「自由」といふ語と同義語になつてゐる——英譯者

このことがあつて以來、中傷的な物語は衰へて行つた。『逆宣傳の徒に答ふ』と題する小册子に於て這般の論爭を總括して、私は之を諸所の新聞雜誌に送つた。一週間を經て七月時代がやつて來た。そして、同月二十三日、ドイツ皇帝の手先になつて働いてたといふ罪名を負はせて、臨時政府は私を投獄した。その審問はツアーの統治に育てられた裁判官の手で行はれた。彼等裁判官は事實や辯論を正直に取扱ふ風習になじんではゐなかつた。しかも擾亂の時世であつた。起訴内容を讀みきかされた時、私はその箸にも棒にもかゝらない馬鹿々々しさがおかしくて、告發の惡辣さなどに對する憤激も消えてしまつた。九月一日の豫審調書に於て、私は次のやうに述べてゐる。

『提出された第一證據書類（目下のところ、司法省の役人の支持の下に、私及び吾々の黨に對して行はれた、迫害の主役を演じてゐる伍長エルモリエンコの陳述）は明かに、故意に捏造した證據であつて、これは事件を明かにしようとせずして、惡意を以て一切を疑惑の雲に包むために企てられたものである。又、裁判官アレクサンドロフが、この證據書類に關係した、最も重要な諸問題及び事情を審理することによつて、私とは未知のエルモリエンコの提出した證據の虚構が、必ずや暴露されるに拘らず、これらの諸問題及び事情を無視した事實以上によつて、私は告發の眞相を私の手にあるあらゆる手段によつて公衆の面前に暴露する權利を保留しておくと同時に、この裁判に加はることは私として道德的にも政治的にも一箇の墮落と考へる。』

まもなく、この告發は、裁判官のみならず全ロシアを含めて、勿論ケレンスキーの如きロシアの『新しい』英雄とても例外なく、一切を呑み盡した大事件のためにふつ飛んでしまつた。

それにしても、私はこの『逆宣傳問題』に今立ちもどらうとは思ひがけなかつた。しかし、一九二八年になつて、この古い逆宣傳を取上げて之を支持する著述家が現はれた。彼の名をケレンスキーと言ふ。革命的な事件がケレンスキーを急に浮び上がらせて、また必然的に押し流してしまつてから、十一ヶ年後の一九二八年に、彼は、レーニン及びボリシエヴイキはドイツ政府の手先であつて、大戰當時のドイツ參謀本部と關係があり、ドイツから金を支給せられ、ロシア軍の敗北と、ロシア國家の壞滅とを目論んでゐるドイツの祕密指令を實行に移したのであつたと斷言した。このことは彼のものした興味深い書物*に於て、特に二百九十頁以後三百十頁迄の間に、微に入り細を穿つて敍べられてゐる。一九一七年の成行からして、私はケレンスキーの智的、道德的存在に關して明

確な觀念を持つてゐたのであるが、何にもかもが一通り終つた今となつて、この非難をくりかへすだけの大膽さが彼にあらうとは思ひも寄らなかつた。しかし、事情正に斯の如くである。

*此處に指摘された個所はケレンスキーの原著のロシア語から、直接に譯出したものである。それ故、こゝに言ふ頁は原著の頁である。それの英譯はニュー・ヨークのアップルトン書肆から「カタストローフ」と題して出版された。その書に於ては、こゝに言ふ事柄は二百二十九頁から二百三十三頁に叙べられてゐる。――英譯者

彼は書いてゐる。『大戰中の危急存亡の秋に於て、レーニンがロシアを裏切つたことは明白にして確實な歴史上の事實である。』では、何者が何時、この明白確實の證據を提供したのであるか。ケレンスキーは先づ、まことしやかな口調を以て、どういふ風にしてドイツの參謀本部は、大戰の際に於けるロシア人捕虜の中からスパイ制策實行のための候補者を徵集し、どんな風に之をロシアの軍隊中に放つたかといふ說明をしてゐる。本物とも贋物ともつかない（と言ふのは、往々スパイは本物であるか贋物であるかを自分でさへ見分けがつかないものだから）一人のかうしたスパイが、ケレンスキーの前に現れて、ドイツのスパイ組織の內幕を御注進に及んだ。ところで、ケレンスキーは頗る浮かない樣子で、『こんなことを幾らほぢくつて見ても何んの足しにもならないことだが。』とことわつてゐる。全く以てその通りである。ケレンスキー自身の話から判斷しても、或るちつぽけな山師が彼を思ふ壺に嵌めようとしたものであることはたしかだ。こんな些細な事柄がレーニンに、引いてはボリシェヴイキ全體に關係を持つだらうか。斷じて否、このエピソードはケレンスキー自身

で言ふ通りに、何んの足しにもならぬ些細なことである。では、そんなことを何故また彼は口するか。それといふのは彼の話を豐富にし、それからあとの打明け話に一そうの重味をつけるためにすぎない。その密告者同樣に、ケレンスキーもまた讀者を思ふ壺に嵌めようと思つてゐるだけのことである。

彼によればかうである。第一の事件は取るに足らぬものであつた。ところが、また別の方面からケレンスキー等は『非常な價値のある』情報を受取つた。『ボリシエヴイキがドイツの參謀本部と密接な關係にある』といふことは『疑ひの餘地なく』暴露されたのである。この『疑ひの餘地なく』が曲者である。次に彼は言ふ。『かくの如き密接な關係が保たれる方法手段もまた、確證するに難くなかつた。』この『確證するに難くなかつた?』この言葉は曖昧だ。確證されたのか？ 今にわかる。しばらく御辛抱あれ。この打明話がこの話の創作者の胸で成熟するのに十一ヶ年間かゝつたのだ。

『四月、ウクライナ生れの一將校ヤルモリエンコなる者が總司令部のアレクセイエフ大將のところへやつて來た。』ヤルモリエンコ！ この名は吾々に聞き憶えがある。この男がこの大仕事の決定的な人物なのである。それから、ケレンスキーが言葉をぼんやりさせたくないときにすら、言葉を正確にし得ないことも見落せない。それといふのは、彼が舞臺に立たせたこの可憐な惡漢は、實は『ヤルモリエンコ』といふのではなく『エルモリエンコ』と稱するのだ。* このエルモリエンコといふ名は、少くともケレンスキー政府の裁判所に記錄されてゐる名前だ。

*ロシアニ於ては重母韻の「ヤ」と「エ」とは別な字母で表はされる――英譯者。

さて、伍長エルモリエンコ（ケレンスキーは彼を殊更に曖昧に『將校』など丶奉つてゐる。）はみせかけの獨探と自稱して大本營に出頭し、本物の獨探共の内情を事細かに申立てたのである。ボリシエヴイキに猛烈に反對したブルジョア新聞までが間もなく、疑はしい灰色の人物と評せざるを得なかつたこの大愛國家の出した證據は、要するに、レーニンは歴史上の大人物ではなくて、ルーデンドルフに買收された手先にすぎないと證明した。それでは伍長エルモリエンコはどうしてこの秘密を嗅ぎつけたか？　どんな證據でケレンスキーを魅了するに至つたか？　彼エルモリエンコの語るところによれば、彼はウクライナに於ける非國教派の宣傳を遂行するやうにとの指令をドイツ參謀本部から受けたことがあつた。『エルモリエンコは、』とケレンスキーは述べてゐる。

『ドイツ代表指揮官（！）と聯絡を保つ方法、手段に關する必要な心得や、必要な資金を引出すことの出來る各銀行（！）に關する心得や、それから、ウクライナの非國教派數各とレーニンを含めた有名な獨探連の姓名を授けられたものであつた。』

これらはすべて一言一句、彼の傑作の二百九十五頁から二百九十六頁へかけてに印刷されてゐる。これによつて吾々は少くともドイツの參謀本部が、そのスパイに對して如何なる態度を取つてゐたかは寛ひ知ることが出來る。ドイツ參謀本部はスパイ志願者として姿を現はした素情の知れない一知半解の伍長を、情報部の下級將校の監視の下に置くことはしないで、彼に直ちに『ドイツ代表の指揮官』と連絡を保たしめ、彼を直ちに獨探組織のからくりに全く通曉せしめ、彼に直ちに機

密費を手渡す銀行の一つではなく全部の銀行の一覽表を與へたのであつた。何んと言譯をしようが、いやしくもドイツの參謀本部ともあらうものが飛んでもない間抜けた眞似をしたものである。然しながら、これは吾々が本當にドイツ參謀本部の實情を踏査して得られた知識ではなくて、二人の伍長――一は陸軍の伍長エルモリエンコ、一は政治伍長のケレンスキーの『態公と八公』が描いたものである。

しかし、一介の、血の廻りのよくない、地位の高くない人間でありながら、エルモリエンコはドイツのスパイ組織の或樞要の位置に就くことが出來たのであらうか？　ケレンスキーは、吾々にさうと信じさせたいのらしい。けれども、吾々はケレンスキーの書物も、それから右のやうな情報の出所も幸にして知り拔いてゐるのだ。エルモリエンコと來てはケレンスキー以上に單純だ。馬鹿で、小心の冒險者にあり勝ちな調子で述べた證言中で、エルモリエンコは彼自身の直段につ次いてのやうなことを竝べてゐる。ドイツ參謀本部は正に一千五百ルウブル（ルウブル相場の激落の當時に於ける）をウクライナの獨立とケレンスキー政府顚覆とのための奔走の入費として、彼に與へた。彼の證言（それは現在すでに公刊されてゐる）中に於て、彼は思ふさまドイツ政府のケチ臭い處置を責めて、もつと出して欲しいとせがんだが駄目であつたと述懷してゐる。『どうしてそんなに少ないのですか！』とエルモリエンコは抗議した。しかしスパイ指揮官は何んと賴んでも耳を藉さうとしなかつたと言ふ。しかしながらエルモリエンコは、彼がルーデンドルフやヒンデンブルグや皇太子殿下や、さてはドイツ皇帝その人に直接に談じ込んだか否かといふことに就ては、全く吾々に告げ

てゐない。ロシア帝國××のために、旅行費のために、煙草のために、酒のために、金一千五百ルウブル也をエルモリエンコに渡した『スパイ指揮官』とは果して如何なる人物であつたか、その名を言ふことを彼はどうしても肯かない。そこで吾々は之を推測する外はない。惟ふに、大部分は酒のために右の千五百ルウブルを使ひ盡して、ポケットの中が淋びしくなると、彼はベルリンで言付けられた通りの銀行へは行かないで、身を挺してロシアの參謀本部である大本營に罷り出で、今後の忠勤を申出たわけである。玆に、その途上に於て、ポリシエヴイキ狩りをやつてゐたロシア情報部の或將校の手にエルモリエンコが引掛かり、その將校から入智慧されたものらしい。その結果として、云はゞ、二つの處世觀が融通の利かないこの伍長の頭の中に宿された。第一に、彼は彼に一千五百ルウブル以上は鐚一文も足し前を出して呉れなかつた、ドイツの陸軍中尉の奴が憎くて堪らなかつた。第二には、彼は自分が嘗つて「ドイツ代表指揮官」から、ドイツのスパイ組織竝びにその手先と銀行のことまで紹介されたといふことを忘れ切れなかつた。

それから、エルモリエンコがケレンスキーに打明けた『ウクライナの非國教派の面々』とは一たい誰々を意味するのか。これに關して書中ケレンスキーは一言も語らない。エルモリエンコの情けない嘘に幾らかの重味をつけるために、ケレンスキーは彼自身で案出した嘘を二三つけ加へた。エルモリエンコの證言によれば、彼が擧示したその非國教派の人物こそはスコロピス・イオルツコーフスキーであつたけれども、ケレンスキーはこの人物の名を口に出さないのである。なぜなら、若しこの名を口に出せば、彼はエルモリエンコが何等祕密の種を持つてゐなかつたことを承認せざる

を得ない破目になるからだ。イオルツコーフスキーと言ふ名は既に誰にも耳新しくなつてゐた。大戰中、新聞は幾度かこの名を報道した。イオルツコーフスキー自身からして、彼がドイツの參謀本部との關係のあることを祕密にしようとはしなかつたものである。一九四四年の暮ごろ既に、パリーのナシエ・スロヴオ紙で、私はドイツの陸軍當局と結托してゐる非國教派の小さな一團に烙印を押して置いた。それらの人物を一々私は憶えてゐるが、その中の一人がイオルツコーフスキーである。だが、エルモリエンコは『數名のウクライナに於ける非國教派の人物の名』を説明したばかりでなく、その中にレーニンの名を加へたのであつたと吾々はケレンスキーから聞かされた。何故に非國教派の人物の名が擧示されたかといふわけは理解できる。といふのは、エルモリエンコは非國教徒の宣傳に油を注ぐためにドイツから金を貰つて赴いた者である。だが、何故レーニンがエルモリエンコの口の端に上つたか。ケレンスキーはその故はもとより語らない。と言つて、云ひ落したわけでもない。

エルモリエンコは淺墓にも辻褄の合はないところへ『レーニン』の名を持出したものである。ケレンスキーをそゝのかしたこの人間は、彼が『愛國』の一途からどんな風にして金を貰つて獨探になつたかを物語る。更に、どんな風にして彼の受取つた機密費（一千五百の戰時ルウブル）に對して割增を要求したかといふこと、どんな風にして彼が彼の未來の使命、例へば間諜とか橋梁爆破とか等の役目を言付けられたかといふこと、さうしたことを物語る。次いで、彼の申立てによれば、（この申立と、右に述べた彼の話とは一向に無關係なのであるが）ロシアに於て彼と同樣の使命の下

に働いてゐる人間は『彼一人だけではない』といふことを、聽かされた（誰から？）のださうである。そして、『レーニンと彼の同志とがエルモリエンコと同一（！）の方面で働いてゐるのである。』といふことを告げられたのださうである。これは彼の口述そのまゝである。橋梁爆破に從事する程度の渺乎たる間諜が、何等特別な實際上の理由もないのに、レーニンとルーデンドルフとの間の關係といふやうな祕密を紹介されたらしい。彼の證言の終りに至つて、他の陳述と明らかに關係のない、どう考へても誰かの入智慧に相違ないらしい不用意な文句を附加へてゐる。それはかうだ。『レーニンがドイツ參謀本部の重要人物達と共にベルリンで商議をしたといふことを私は聞かされました。（誰から？）又、私自身でも後ほど知つたことでありますが、レーニンはスコロピス・イオルツコーフスキーの家に逗留してゐたといふことを同じ人から聞かされました。』これで彼の證言は終つてゐる。それならどうして彼がそれを知つたのか、それについて一言も彼は云つてない。

裁判官アレクサンドロフは、エルモリエンコの供述の中の『事實』の斷片一つにも興味を持たなかつた。この伍長はレーニンが大戰中にベルリンにゐたこと、また同じレーニンがスコロピス・イオルツコーフスキーのところに滯在してゐたのを『どんな工合にして』知つたかといふ極くあたり前の質問すら裁判官はやらなかつた。或ひは、事によると、アレクサンドロフはそれについての質問を行なつた（行はざるを得なかつたであらう）のであつたかも知れない。けれどもその答辯が牛の鳴聲のやうに不正確なものであつたために、それを記錄に殘さうとは全く思はなかつたのであらう。それにきまつてゐる！　このとりとめもない話に就て、私達は『どこの馬鹿が信ずるものか？』

と云ふ資格はなからうか？然しながら、こゝに立派に、それを信じてゐるやうに自分で率先して見せかけた上に、人にもそれを信じさせようとしてゐる所謂政治家が、其處彼處に見受けられるやうである。

兎に角これだけのことなのか。さうだ。陸軍の伍長はこれ以外には何にも云ふことはなかつた。政界の伍長は假定と憶測を逞うした迄である。少しくこの政界の伍長の言ふところを聽かう。ケレンスキーは辯じて言ふ。『今も假政府は重大な問題に當面した。即ち、エルモリエンコによつて示唆せられた問題の絲を手繰つて、レーニンとルーデンドルフの間を往復してゐる徒輩を追跡し、その奸惡な罪狀を現行に於て發見しなければならなかつた。』

この仰々しい宣言は二筋の絲を撚り合せたものである。即ち、嘘と臆病である。ルーデンドルフといふ名が初めて顏を出した。エルモリエンコはドイツ人の名は一つも口に出さなかつた。この伍長の頭は容積の小さいのが特徴だつた。ケレンスキーは、レーニンとルーデンドルフの間を往復した人間に就ては、用意深く言葉を濁してゐる。一方に於ては、言ふところは『奸惡な罪狀を現行に於て發見』された特殊な、そして既知の人物を指してゐるかのやうに思はれる。他方に於ては、ケレンスキーは間諜といふものに關してプラトニックな觀念しか持たないやうにも思はれる。ケレンスキーが若しも『レーニンとルーデンドルフの間を往復してゐる徒輩を究迫』しようと心掛けるのであつたら、彼の問題は未知の、匿名の、結局は非實在の人物の跡を追つかけて行くことに外ならない。ケレンスキー流に氣取つて言へば、彼はアキレスの踵の祕密を嗅ぎ出さうとするにすぎない

か、或ひは、これをもつと現代的に言換へるならば、自己の馬脚を露はすまでのことである。

ケレンスキーの言ふところによれば、糺察は極めて祕密裡に行はれたゝめ、四人の大臣を除いては何人もこれに與かり知らなかつた。司法大臣ペレフエルツエフも氣の毒なことにそれを知らせて貰へなかつたといふ。これが本當に『政治家らしい』態度といふつもりなのである！ ドイツの參謀本部が猫にも杓子にも機密費の置場所まで打明けて、その上、同參謀本部とロシア最大の革命的政黨の大立物との關係までも明言してゐた場合に、ケレンスキーの遣口は全くその反對であつた。ルーデンドルフの手先共の後をつけることの出來るほど無神經な大臣は、ケレンスキーの他に三人しかなかつたのだ。

そこでケレンスキーは『この仕事は非常に困難な、複雜を極めた、いつになつても埒の明かないものであつた。』と愚痴を言ふ。吾々から見ても、これには首肯できるのでちる。しかし、終に、彼の愛國的な努力は成功を贏ち得た。その成功に就て、ケレンスキーは縷述してゐる。その一部を引けば、『何には兎もあれ、吾々の成功はレーニンにとつては致命的な打擊である。彼がドイツと結托してゐたことは明白に確證された。』と。

『明白に確證された』といふ言葉を記憶しよう。だが、如何なる方法で、如何なる人物によつてか？

探偵小說がこの點まで來ると、ケレンスキーは二人の著名なポーランド革命家ガネツキー及びコツロフスキーと、それからズーメンソン夫人なる一女性とを引合ひに出してゐる。このズーメンソ

ン夫人とは一たい誰のことなのか。彼女は全く闇雲の存在である。こんな女性が居たといふことは只今までには聽いてゐない。ケレンスキーは之等三人が問題の媒介役を演じた人間であると斷言してゐる。今は死んでるコツロフスキーと、まだ生きてゐるガネツキーの二人を、ルーデンドルフとレーニンとの間の橋渡しだとした理由は何んであるか？ それに就ては何等說明されてゐない。エルモリエンコはかうした人物の名はおくびにも出さなかつた。これらの人物の名前は一九一七年の七月時代の新聞紙面に、からくり人形――このからくりの絲を引くものはロシア帝政の情報部であつた。――の如くひよつくり出て來たと同じやうに、ケレンスキーの本に飛出して來る。

ケレンスキーは次のやうに話してゐる。『ボリシエヴイキの獨探がストックホルムからやつて來た。彼はレーニンとドイツの最高幹部との間の關係を明白に物語る數通の文書を携帶してゐるのだつた。その彼をロシアとスエーデンとの國境で逮捕する手筈になつてゐた。その文書の內容は疑ふ餘地のないものであつた。』と。

ケレンスキーは明言しないが、この『獨探』こそはガネツキーであるのらしい。思ふに、四人の大臣樣達は――その中で總理大臣が最も賢明でゐらせられるのは理の當然であるが――働き甲斐のある働きをなされたものである。ストックホルムから來たボリシエヴイキの獨探は、ケレンスキーには前以て『詳細に分つてゐた』證據物件を携帶してゐたといふ。レーニンはルーデンドルフの手先であるといふことを雄辯に物語る證據物件を携帶してゐたといふ。だが、ケレンスキーは何故この證據物件の內容を明らさまに言ふことをしないのであるか。たとひ一言半句でも、それが如何な

るものであるかを具體的に述べても差支えないではないか？　その內容をどうして知るに至つたかを彼はどうして言はうとはしないのか？　ポリシエヴイキは凡べて獨探であるといふことを有體に證明してゐる文書を携帶してゐるそのポリシエヴイキ間諜は、いつたいどんなことを考へてゐたのか、それをなぜ彼は說明しないのか。　ケレンスキーはかうしたことについては口を緘して語らない。敢て再問する。このケレンスキーを信ずる馬鹿がどこにあるか？

ところが、このストツクホルムの獨探は事實に於ては遂に逮捕されなかつたのだ。ケレンスキーには一九一七年に『詳細に分つてゐた』が、讀者には一九二八年になつてもまだ判明しないその驚くべき文書は、決して沒收されはしなかつた。ポリシエヴイキの獨探は刻々ロシアとスエーデンとの國境に近づいてゐたが、而も、決して其處へは到達しなかつたのである。これは一體どういふことか。そのわけは、此の獨探の健脚に追ひつくことのできなかつた司法大臣ペレフエルツエフが、エルモリエンコが捧呈した偉大な祕密を餘りにあつさりと蓋を開けたからである。しかも、成功は、かくも手近に、かくも容易な所に轉つてゐたわけである。

『二箇月に亙る臨時政府（主としてはエルモリエンコ）のボリシエヴイキ陰謀摘發の企ては失敗に終つた。』然り、この『失敗に終つた』といふ語はケレンスキーの言葉である。前の頁では、『吾々の成功はレーニンにとつては致命的な打擊である。』と言ひ、又、ルーデンドルフとレーニンとの關係は『牢固として拔き難い事實』であると言つた口が未だ乾く間がない今、二箇月間の仕事は『失敗に終つた。』と空うそぶいてゐる。お道化みたいな話ではないか？

傳說的なズーメンソン夫人の跡をつけて行つた四人の大臣の失敗にも拘らず、ケレンスキーの元氣は挫けなかつた。彼はボリシエヴイキとルーデンドルフの關係に就て次の如く公言した。――『私は歷史の面前に十分の責任感を以て、ペトログラードの地方裁判所の檢事の言葉をくりかへし得るのである。』と。これが彼の芝居の山だ。かうして彼は、一九二七年、公開の演壇に立つて、『歷史の面前に十分の責任感を以て。』『左傾』軍人や大學豫科の學生や民主々義の若奧樣達を魅惑したのである。玆に他人の追隨を許さない『ナルシザス』ケレンスキーの全幅がある。この莊嚴な宣誓があつてから數頁の後に、今一つ、重大な懺悔がある。　曰く、『吾々假政府は、かくてレーニンの陰謀を決定的に文書の內容を根據として立證する見込みを永遠に失つてしまつた。』

『永遠に失つてしまつた。』エルモリエンコの双肩に土臺を置いた全仕組のうち何一つ殘らなかつた。結局のところ、歷史に對する誓ひの言葉以外には。

だが、これで話は終つたのではない。ケレンスキーの嘘と臆病は、私の事件の取扱にはもつと猛烈にあらはれてゐる。彼の命令で逮捕されることになつてゐたといふ獨探のことを一通り叙べた後で、ケレンスキーはおとなしく云つてゐる。即ち、『それから數日後、トロツキーとルナチヤルスキーが逮捕せられた。』のだと。　彼は、後にも先にも一度だけ、此處で私をドイツのスパイ組織に捲き込んでゐる。　しかも用意深く言葉を濁し、例の勿體ぶつた美辭麗句はもとより、『名譽にかけての誓言も』此處では出し澁つてゐる始末だ。これには深い仔細がある。ケレンスキーが私も一括して槍玉に擧げないではゐられなかつたといふのは、彼の政府が立派に、レーニンに向つて提起し

たのと同じ罪狀で私を逮捕したからである。しかし、彼が私に不利な證言について述べたくない、或ひは、論じ得ないわけは、私の事件では、彼の政府が前にも言つた『馬脚』を見世物にさらすことになるからであつた。

裁判官アレクサンドロフが製造した私の唯一の罪跡は、私がレーニンと同道で、密封列車でドイツを通過したといふのであつた。帝政の裁判所の老ぼれたこの番犬はレーニンの同行者が、私ではなくて、メンシユヴイキの首領マルトーフであつたといふことを微塵ほども思つて見なかつた。然るに、私は、ニユー・ヨークを出發してから、カナダの捕虜收容所やスカンヂナヴイヤ經由で、レーニンよりは一箇月も後れて、ロシアに歸つて來たのであつた。何時、如何なる道を通つて私が歸國したかといふことは、一寸だけ新聞記事を讀み直して見れば直ちに分ることであるのに、それはしないで、ただ虛構の言辭を弄することしか知らない。かうした愚劣な嘘吐きの手で、ボリシエヴイキ攻擊の材料は揑ね上げられてゐたのであつた。その時その場で、私は裁判官の面の皮をひんむいてやつた。穢らはしいこの調書を彼の顏に投げつけると、私は彼に背を向けた。それから、私は抗辯書を假政府へ送つた。ケレンスキーの讀者に對する不德さ加減は、この點に關する淺薄さに益々はつきり出てゐる。彼は、彼の下に行はれた裁判が私を罪に陷れるためにはどんなに不正な方法を講じたかといふことを知つてゐる。それだからこそ彼は十把一からげに、ドイツのスパイ組織中に私を織込みはしたものゝ、彼自身及び三大臣が、私がカナダの捕虜收容所にゐる時分にドイツを通過したといふ私の足跡を、どうして探してゐたかに就ては一言も云はないのである。

この逆宣傳家は次のやうに概括した。『レーニンにして若しドイツの宣傳機關と間諜組織との物質的乃至技術的能力の一切の支援を受けるのでなかつたら、彼は絶對にロシア顚覆には成功してゐないのである。』と。舊ロシアの國家組織（と、それに殉じたケレンスキーとは）はたか〳〵ドイツのスパイの手で覆滅の淵に投込まれたのであつて、革命的な民衆の手によつて審判を受けたものではないとケレンスキーは信じてゐたいのだ。いやしくも强大な一國の生命とは、その隣接國のスパイ機關が意の儘に弄ぶ道具に過ぎないものである、といふやうな歷史哲學を信奉することは、どんなに心ゆくことであらう！　然し、若し、ドイツの軍事的乃至技術的能力がケレンスキーの民主政治をわづか數箇月で顚覆し、その後へ、トリツクでボリシエヴイキの政府を拵へたのであるとすれば、所謂協商國の物質的乃至技術的機關を以てして、人工栽培のボルシエヴイズムを、十二箇年といふ歲月の今日まで、どうして粉碎することが出來なかつたのか？　だが、吾々は歷史哲學などゝ言ふ領域へ這入つて行くのは止めよう。吾々は現實の世界にとゞまつてゐよう。如何なる點に、ボリシエヴイキに對するドイツの技術上竝びに財政上の援助は姿を現はしてゐるか。ケレンスキーはこのことに關しては何事も叙べてゐない。一九一七年、ペトログラードのボリシエヴイキは、戰前の一九一二年に發行してゐたやうな、さうしたさゝやかな新聞を發行してゐた。彼はビラを發行し、アヂテーターを持つてゐた。言換へれば、吾々は革命的な政黨であつたのである。その時、ドイツのスパイ組織の援助がどこにあらはれたといふのか？　このことに關しても亦ケレンスキーの書物は一言も言及してはゐないのである。ともあれ、この點に關して誰が文句をつけることができ

ようか？

吾々は嘔吐を抑へ、船酔ひの時のレモンのやうに時には必要な皮肉の貯への力を借りて、ケレンスキーの『歴史の前に』提供した證據を吟味して見た。この吟味の間にも、こんなやくざな本を、いつたい、調べる價値があるかどうかの疑問に惱まされながらも、それでも一言一句を精細に吟味し續けた。ルーデンドルフ、ヒンデンブルグ、その他、當時のドイツ軍の樞機に參じてゐた多くの大立物や、同時にその下にあつて活躍した人達は今日なほ生存してゐる。そこで、若しもルーデンドルフが自分とレーニンとの關係をエルモリエンコ式の人物に打明けるとすれば、それと同樣に、このロシアの伍長の關知した程度の消息に通じてゐる人物が、他にも多數に存在するのは必定である。かうした人物、ボリシエヴイキの敵であり、十月革命の敵であるかうした不滿の徒は、何故こぞつて沈默を守つてゐるのか。

成程、ケレンスキーはルーデンドルフの回想錄のことは叙べてゐる。けれども、ルーデンドルフの回想錄が齎す事實はたつた一つだ。卽ちルーデンドルフはロシアの革命が――最初は二月革命、次に十月革命が――ロシアの軍隊に統制を失はしめる端緒となつて呉れゝばいゝと希望したことである。ルーデンドルフの胸中のこの希望は、何にも回想錄を讀まなくとも知れきつたことではないか。そこで彼がロシアの革命家の一團にドイツ國内の通行を許したといふことも首肯できる。ルーデンドルフにとつては、これは、當時のドイツの重大な軍事的形勢が命令した冒險であつたのだ。レーニンはこのルーデンドルフの計畫を、レーニン自身の計畫を進めるために利用したのだ。ルーデンドルフの本音はかうだつたのだ。――『レーニンはロシアの帝政派をやつゝけるであらう。さうすれば、その後で吾輩はレーニンとその同類共をやつゝけてやるのだ。』と。ところが、レーニンの本心はかうであつたのだ。――『俺はかうしてルーデンドルフの提供して呉れた汽車でロシアへ歸つて行くのだが、このルーデンドルフの恩に報ひるのに、俺は俺流の方法を以てしてやらう。』

思ふに、ケレンスキーのやうな探偵的才能の士を俟つ迄もなく、正反對な關係にある歴史的な畫策が一定の點で交叉した、そしてその交叉點が『密封列車』であつたことは證明される。何によりも歴史が證據だ。それ以後、歴史はレーニンとルーデンドルフの双方の計算に決算を與へるだけの間を持つた。一九一七年十月二十五日（十一月七日）にボリシエヴイキは權力を獲得した。そして、まさしくその一年後に、ロシア革命の大きな影響を受けて、、、、、、、、、、はルーデンドルフ及びその主人たちを××した。そしてその時から十年後に、歴史が精に觸つた民主々義者の『ナルシツサス』は、レーニン一人に對してゞはなく、一個の大國民とその革命とを向ふに廻して、馬鹿げた逆宣傳を蒸し返さうと試みたのである。

第十一章　七月から十月まで

ケレンスキーは戰線で攻擊準備をしてゐたので、それに關して私の發した七月四日の宣言は、ソ

ヴイエット大會においてボリシエヴイキ分派によつて朗讀された。この攻撃は正に、××の存在そのものを脅かすものだ、と我々は指摘した。だが、臨時政府は、自分の口から出る堂々たる演說に、自分で夢中になつてゐた。閣僚達は、××××は革命によつて骨の髓まで動かされてしまつて、思ひのままにどりにでもこね上げられる、ひどく柔かい粘土のやうになつてゐると思つてゐた。ケレンスキーは××を巡歷し、×××をすかしたり、おどかしたりし、大地に跪いて、接吻し——一口に言ふと、ありとあらゆる仕方で道化た眞似をしたが、一方彼は、××達を惱ましてゐる當面の問題には、何一つ答へることが出來なかつた。彼は、安直な效果だけですつかり自己を欺いて、ソヴイエット大會の支持を確信し、攻擊を命じたのだ。ところで、曩にボリシエヴイキが警告した災禍がいよ〳〵やつて來た時には、ボリシエヴイキは犧牲の羊とされた。彼等は狂暴に驅り立てられた。立憲民主黨(カデット)が後楯となつてゐた反動勢力は、あらゆる方面からのしかゝつて來て、我々の首級を要求した。

臨時政府にたいする大衆の信賴は、絕望的に覆へされた。革命のこの第二段階で、ペトログラードは再び餘りにも先走つた先陣に立つた。七月の騷擾中に、この前衞隊は、ケレンスキー政府と公然に衝突した。だがそれはまだ蜂起ではなくて、深くさぐつて行つた偵察に過ぎなかつたのだ。しかし七月の出會ひによつて既に次のことが明白になつた。ケレンスキーは背後に全然『民主的』な軍隊を持つてゐないこと、我々に敵對して彼を支持する勢力は、反動革命の勢力であること、これだ。

七月三日、冬宮で會議が開かれてゐる時に、×××が示威運動を開始し、他の×××や、工場勞働者にアピールしてゐるといふことを、私は知つた。この報知は私には寢耳に水だつたのだ。その示威運動は、大衆自身の發議で、自然發生的に行はれたものだが、翌日には更に擴大し、こんどは我々の黨派もそれに參加した。冬宮へは民衆が洪水のやうに押し寄せた。彼等はたゞ一つのスローガンしか持つてゐなかつた——『ソヴイエットへ權力を渡せ!』

冬宮の前面で、群衆から離れて立つてゐた迂散臭さうな一團の人間が、××××のチエルノフを摑まへて、自動車のなかへ押し込んだ。群衆は、それを無關心に見守つてゐた。とにかく群衆はチエルノフに少しも同情を持つてゐなかつたのだ。チエルノフが捕へられ、その身に危險が迫つてゐるといふ報知が冬宮に達した。人民黨員(ポピユリスト)はその首領を救ひ出すために機關砲車を使用することに決した。彼等は人氣が衰退したので神經質になつて居り、こゝで斷乎たる態度を示したいと思つたのだ。私はチエルノフと一緒にその自動車で群衆から遠ざかつて見ようと決意し、さうすれば後になつて彼を救ひ出せようと思つた。しかしボリシエヴイキのラスコルニコフ——彼はバルチック海軍の中尉で、クロンスタットの水兵等を率ゐて、、、、、、、、、、、、、のだ——は、興奮して、即時にチエルノフを釋放せよと言ひ張つた。と言ふのは、チエルノフを捕へたのはクロンスタットの人間だと言はれるのを防がうがためだつたのだ。私は、ラスコルニコフの希望を實現させてやらうと決心した。彼自身に說明させよう。

『同志トロツキイの干涉がなかつたら、大衆の騷擾はどれだけつゞくか、知れたものではなかつ

た。』と、この直情的な中尉は、彼の回想錄で言つてゐる。『トロツキイはその自動車の前へ飛び乘つて、一刻も待つて居れない人のやうに、精力的に手を打ち振つて、靜まれとの合圖を與へた。その瞬間、すべてのものが靜まり返り、死のやうな靜謐があつた。高い、明晰な、リン〳〵響くやうな聲で、レウ・ダヴイドヴイツチは、短い演說をなし「チエルノフに暴行を加へることに贊成のものは手を擧げよ！」と結んだ。誰も口を開くものさへ無かつた。』ラスコルニコフは猶ほ續ける。『反對の言葉を發するものは唯の一人もなかつた。「市民チエルノフ、君は釋放された。」とトロツキイは言つて、嚴肅に農務大臣の方へ體を向け、手を波打たせて、彼に自動車を離れるやうにと合圖した。チエルノフは半死半生だつた。私は、彼を助けて自動車から下してやつた。彼は、疲れ切つた。無表情な眼をして、まご〳〵した、危つかしい足つきで、石段を上り、冬宮の玄關に消えて行つた。レウ・ダヴイドヴイツチは、勝利に滿足して、彼と一緒に歩いて行つた。』

この記述の不必要な感傷的な調子を割引すれば、その場の光景は、正確に描かれてゐる。だが、それは敵意を持つ新聞が、私が私刑をするつもりでチエルノフを捕へたと確言することを妨げはしなかつた。チエルノフは、氣恥しげに沈默を守つた。考へて見れば、『人民』の大臣たるものが、自分の名聲のお蔭でなくて、一ボリシエヴイキの干渉のお蔭で、生命の安全を保つたと、どの面下げて告白することが出來よう？

委員は後から後からと押しかけ、示威運動の大衆の名において、執行委員會が權力を執らんことを要求した。チハイゼ、ツエレテリー、ダン、及びゴツツは、彫像のやうにプレシヂユームに坐つ

てゐた。彼等は委員達には一言も答へず、ぼんやりと空間を見やつたり、當惑した、隱密の目なざしを交してゐた。ボリシエヴイキは、代る代る言葉を發して、勞働者と兵士の委員を支持した。プレシヂユームの人々は沈默してゐた。彼等は待つてゐた——だが、何を？　こんな風で數時間が經つた。ところが、眞夜中に、冬宮の廣間々々に不意に、勝ち誇つたやうな嚠喨たるラツパの響きが鳴り渡つた。プレシヂユームの人々は、恰も電流に打たれたやうに甦つた、或る者が嚴肅に、ヴォリン聯隊が中央執行委員會の命のまゝに行動するために戰線から到着した、と報告した。ペトログラード守備隊のうちには、どこを搜したつて、『民主々義』政府が賴りになる兵隊は、たゞの一隊も無かつたのだ。そこで、武裝軍が戰線から到着するまで待たざるを得なかつたのだ。

今や、凡てがからりと變化した。委員達は追ひ出され、ボリシエヴイキは演說することを許されなかつた。民主々義の指導者達は、大衆から與へられた恐怖にたいする復讐を我々の上に加へた。執行委員會のプラツトフオームの演說は、×××は遂に革命の正規軍によつて鎭壓されたと報告した。ボリシエヴイキは反革命黨だと宣言された。實にその一ヴォリン聯隊の到着が、これらをすつかりやつたのだ。しかもその時から三箇月半の後、その同じ聯隊は、ケレンスキー政府の顚覆に誠心誠意共力したのだ。

五日の朝、私はレーニンに會つた。大衆の方からの攻擊は打ちのめされてゐた。『此度は彼奴等は一人々々、我々を射殺すだらう。』とレーニンが言つた。『いまが彼奴等にとつて丁度いゝ時だ』だがレーニンは、反對黨を過重評價してゐた——彼等の害毒でなく、彼等の行動の勇氣と能力を過

重評價してゐた。彼等は、それと餘り變らぬことをやるにはやつたが、一人々々我々を射殺しはしなかつた。ボリシエヴイキは、街路で打ちのめされ、殺害された。××××の生徒は、クセンスカヤ宮殿及び『ブラウダ』の印刷工場を掠奪した。その工場前の通りには、一杯に原稿や手記が撒き散されその破毀された手記の中には、私の小册子『讒謗者に與ふ』が混つてゐた。七月の突込んだ偵察は、一方だけの戰鬪に變型した。敵は容易に勝利を博した、と言ふのは、我々は戰はなかつたからだ。黨はそれにたいして高價な犧牲を支拂つた。レーニンとジノヴイエフは隱れてゐた。打擊につゞいて、一般的の逮捕——これが當時の日程であつた。×××××と××××生徒とは、これは『ドイツの金だ。』と言ふ口實で逮捕されたものゝ貨幣を收奪した。我々の同感者及び半ば友達だつた者達の多くは、我々に背を向けた。冬宮では我々は反革命者と宣告され、實際上、法律の保護の外におかれたのだ。

黨の指導部分の狀態は惡るかつた。レーニンは遠くにをり、カメネフの一翼が頭を擡げてゐた。多くのもの——而してその中にはスターリンも含まれてゐた——は、たゞ事件の自ら進行するまゝに委せてゐるだけで、彼等の智慧を示すのは、後になつてからだと言つた調子だつた。中央執行委員會内のボリシエヴイキ分派は、冬宮のうちで孤立を感じてゐた。當時私はまだ黨員ではなかつたが、ボリシエヴイキ分派は私に委員を送つて、目下の形勢に就て教へて欲しいと求めた。——黨への私の正式參加は、やがて開かれる黨大會まで延期されてゐたのだ。勿論私は承知した。ボリシエヴイキ分派と私との談合は、敵の重い重い彈壓の下でのみきたへ上げられる種類の精神的結盟をつ

くり上げた。その時私は言つた。この危機の後で、我々は急激な上向を期待しなければならない。大衆は、事實に依て我々の宣言の眞理であることを確認した場合、以前に二倍して强く我々に附着して來るであらう。さう言う瞬間には、人々は誤らない秤皿で測られるものだから、革命的な動向は何一つ見のがさないやうに嚴重に見張つてゐる必要があると。いまでも私は、彼等と分れた時、彼等が私に示してくれた熱情と感謝を想ひ出して、うれしくなるのだ。ムラロウは言つた。『レーニンは遠くに行つてゐる。他の人達のうちでは、トロツキイだけが平然自若としてゐた。』

若し私が、別箇の事情の下で——尤も事情が變つてゐたら、回想錄などは全然書かなかつたであらうが——この回想を書いたのなら、この書の中で述べてゐることの多くをその中に含めるのに二の足を踏んだでもあらう。だが今、私は、過去のことについて手廣く仕組まれた、かの虛僞——それが亞流共の主なる活動の一つだ——を忘れることは出來ないのだ。私の僚友達は、或は牢獄にあり、或は流刑になつてゐる。私は、他の事情の下では決してやらなかつたやうな仕方で、私自身について語らざるを得ないのだ。私にとつては、それは歷史的眞實の問題であるばかりでなく、また同時に、いま猶進行しつゝある政治的鬪爭の問題なのだ。

私とムラロウとの斷えることない戰鬪上の友情及び政治上の友情は、その時に始まつた。私はこゝで、この人について尠くとも數言を費さなければならない。ムラロウはモスコウで一九〇五年の革命を通つて來た古いボリシエヴイキだ。一九〇六年、セルプコーウで、彼は黑百人團のユダヤ人虐殺團の手に捕へられ——お定りのやうに、警官隊の保護の下で、運び去られた。ムラロウは體軀

の偉大な巨人で、親切であると同時に大膽無比な男だ。彼は他の二三の人達と一緒に、敵——自治官廳の建物を包圍してゐた——に取卷かれてゐるのを發見した。ムラロウは拳銃を手にして、その建物から出て來て、平然と群衆の方へ歩み寄つて行つた。群衆は少し後へすさつた。しかし黒百人團の選拔團が彼の途に立ちふさがり、御者達は彼に罵聲を浴せかけた。巨人は、拳銃をもつた手を擧げて、少しも前進をゆるめることなく『途を開け！』と命令した。ばら〳〵と數人の人間が彼につかみ掛つた。彼はその中の一人を射ち仆し、他の者に手傷を負はせた。群衆は再び後へすさつた。ムラロウは、同じ平然たる足取りで、碎氷機のやうに群衆の中に途を拓いて、モスコウの方へ歩みつゞけて行つた。

その後彼の裁判は、二箇年つゞいた。當時反動革命が氣狂ひのやうに全國にみなぎつてゐたに拘らず、彼は放免された。ムラロウは、熟達した農業の專門家で、帝國主義戰爭の間には自動車隊の兵士をつとめ、モスコウの十月戰鬪にはその指導者となり、勝利を得た後には、モスコウ軍團の最初の司令官となつた。彼は、革命戰爭の大膽無比の大將で、いつもしつかりしてゐて、單純で、ものに動じなかつた。戰鬪に際しては、彼は、疲れを知らない生氣潑溂たる標本であり、また農業上の助言を與へたり、自分で穀物の刈入れをやつたりし、手の空いてゐる時には、人間にも牛にも醫術上の處置を施した。極めて困難な情勢の下では、彼は平靜と、溫かさと、自信とを發散した。戰爭が終つて後、ムラロウと私とは、いつも一緒に我々の暇な時を送つた。我々はまた二人共狩獵が好きであつたので、それでも仲よくなつた。我々は、熊や狼をたづねて、或はまた雉や鴇を求めて、

北部や南部をかけめぐつた。ところで現在、ムラロウは、流刑にされた反對派として、シベリヤで狩獵をやつてゐる。

一九一七年の七月事件中にも、ムラロウはいつものやうに、平然自若として、多くの他の人々を鼓舞してゐた。その時期には、冬宮の廊下や廣間を頭を下げないで濶歩するには、我々は誰も彼も多分の自制が必要だつた。と云ふのは我々はそこで狂暴な眼差の苦刑に會ひ、毒氣のあるさゝやきを浴せられ、齒軋りをされ、『見ろ！見ろ！』と言つたやうな示威的な肘つき合ひを見せつけられたからだ。およそ憤怒のうちで、下らない驕つた『革命的』俗物共が、突然彼を頂上へせり上げた革命がこんどは彼の一時的の光輝を正に脅かしてゐると認め始めた時に抱く憤怒ほど、大きなものはないのだ。

この頃、執行委員會の酒保へ行く道は、小さなゴルゴタであつた。そこで茶が分配され、黒パンのサンドウイッチ及びチーズ又は赤カビヤが分配されたが、後者はスモルニー館に、後にはクレムリン宮にどつさりあつた。夕食の獻立は、肉塊のまぢつた植物性のスウープであつた。その酒保はグラフォウといふ兵士の擔任になつてゐた。ボリシエヴイキの食事が最も惡いとき、卽ちレーニンがドイツのスパイだと宣言されて、小屋に隱れなければならなかつたときのこと、そのグラフォウが溫い茶をそつと私の方へ辷らして寄越したり、他のよりよいサンドウイッチをそつとくれたりして、その間に私を正視しないやうに努めてゐるのを認めた。彼は明かにボリシエヴイキに共鳴してゐたのだが、それを上役に祕密にしておかざるを得なかつたのだ。私はこれまでよりも注意して周

圍を眺め始めた。グラフォウばかりではない。スモルニー館の下級者の全部——門番、使者、監守達——がまぎれもなくボリシエヴイキに共鳴してゐた。その時私は、我々の仕事は半ば勝利を得たと感じた。だが、それは半ばに過ぎなかつたのだ。

諸新聞紙は、ボリシエヴイキにたいして竝ならぬ毒氣のある、破廉恥な鬪爭を行つてゐた——この點でその鬪爭を凌駕したものは、數年後に反對派に向つてスターリンの行つた鬪爭くらゐのものであつた。七月に、ルナチヤルスキーは若干曖昧な聲明を發したが、諸新聞紙は自然その聲明をもつてボリシエヴイズムの廢棄だと解釋した。或る新聞紙は、私に對しても同じ言說を加へた。七月十日に私は、臨時政府へ一書を提出し、その中で私がレーニンと完全に一致してゐる旨を聲明し、次の言葉でその書簡を結んだ。『諸君はレーニン、ジノヴイエフ、及びカメネフを逮捕すべき布告を出したが、その布告の實行から私を除外すべき何等の理由も、諸君は持ち得ないのだ。卽ち私が上に述べた同志等と同樣に、臨時政府の一般政策に徹頭徹尾反對してゐることを疑ふ可き何等の理由も、諸君は持ち得ないのだ。』閣僚各位は、この書簡から當然の結論を引出して、ドイツの手先だといふ名目で、私を逮捕した。

五月のこと、ツエレテリーが水兵達を追つ拂ひ、機關砲隊の武裝解除をやつてゐた時、私は彼に警告して、君はいまそんなことをやつてゐるが、革命を絞め殺さうとして絞首繩をみがいてゐる××を向ふに廻して、、、、、、、、、、、、、、、、やうな時が、恐らくさう遠くはないだらう、と言つた。八月になつて、さういふ××がコルニロフといふ人物の姿をとつて現れて來たの

だ。ツエレテリーはクロンスタツトの靑ヂヤケツ達の援助を求め、彼等はそれを拒まなかつた。巡洋艦オロラはネバ河の水を分けて入つて來た。かくも速かに私の豫言が適中したのを見た時、私はすでにクレスチーの牢獄に在つた。××達はオロラから特別委員をその牢獄に寄來して、私の助言を求め、冬宮を防禦すべきか、それとも强襲して占領すべきか？　と訊ねた。私は彼等にコルニロフをやつつけてしまふまで、ケレンスキーとの取引の結着をつけるのを延ばすやうにと勸告した。『我々のものは、やはり我々から逃げはしないだらう。』

『逃げないか？』

『逃げない。』

牢獄にゐた間に、私の妻と小供達は、私に會ひに來た。小供達はその時までに、彼等自身で若干の政治的經驗を獲得してゐた。彼等は夏の間を、或る退役大佐の家族の田舍の家で暮してゐた。訪問者がよくその家へ來たが、その多くは士官で、ウオツカで力がつくと、彼等はボリシエヴイキを罵倒するのが癖だつた。七月の日の間は、その罵倒が頂點に達した。（これらの士官の或る者等は、その後間もなく南部へ赴き、そこでは旣に未來の『白衞』軍が集められてゐた。）食事の時のこと、或る若い愛國者がレーニン及びトロツキイをドイツのスパイだと呼んだ。すると私の上の子供は椅子をもつて、下の子供は食卓ナイフをつかんで、その男に向つて襲ひかゝつた。大人が引離したので、子供達はヒステリツクにすゝり泣きをしながら、自分達の部屋に閉ぢ籠つた。彼等は、そこでボリシエヴイキにどんなことが起つてゐるか、それを見極めるために、徒步でペトログラードに行

かうと祕密に計畫をめぐらしてゐた。が、幸にも母がやつて來て、彼等をなだめて、連れ去つた。しかしペトログラードの市中でも、狀態はよくは見えなかつた。諸新聞紙はボリシエヴイキを攻擊してをり、父は牢獄にあり――革命は飽までも絶望的だつた。しかしそのことは牢獄の面會室で、妻が金綱越しにそつと小形ナイフを私に渡すのを彼等が見守つてうれしがるのを妨げはしなかつた。本當の革命はこれから來るんだぞ、と言つて私は彼等を慰めつゞけた。

私の娘達は、それよりもつと積極的に政治生活に引入れられてゐた。彼女達は、モダーン・サーカス館の集會に參加し、示威運動に加はつた。七月の日の間に、彼女達は二人とも、群衆におしこくられて、一人は眼鏡を失くし、二人とも帽子を失くした。彼女達は、地平線に姿を現したばかりの父を見失ひはしまいかと惧れてゐた。

コルニロフがペトログラードへ前進してゐる時期の間、牢獄の統治は危機に瀕してゐた。若しコルニロフが市中へ入つて來れば、彼は即刻、ケレンスキーによつて逮捕されたボリシエヴイキの全部を殺戮するに相違ないと、誰も彼も信じてゐた。中央執行委員會はまた、諸牢獄が首都の白衞軍的要素によつて侵入されるだらうと惧れてゐた。そこで大部隊の軍隊がクレスチー監獄を護衞するために割當てられた。勿論、その軍隊は『民主々義』政府の味方でなく、ボリシエヴイキの味方であり、いつでも我々を釋放しようとしてゐた。だが、さういふ行動は、即時××の合圖となつたであらうが、××の時はまだ來てゐなかつた。その間に、政府自身が我々を釋放し始めた。その理由は、曩に冬宮を護衞するためにボリシエヴイキの水兵を招いたと同じものであつたのだ。私はクレ

スチー監獄から眞直に、革命防衞のために新たに組織された委員會に赴き、其處で、曩に私をホーヘンツオーレルン家の手先だとして投獄し、まだその告發を撤去してゐない當の紳士達と席を同うしたのだ。私は率直に告白しなければならぬが、人民派やメンシユヴイキ達のその顏付を見てゐると、コルニロフが彼等の頸根つこを引捉へて、空中で振り廻してやればいゝと思はしめるものがあつた。だがこの願ひは、非禮であるばかりでなく、反政治的であつた。ボリシエヴイキは身を固めて立上り、いづこにおいても防衞の第一線に在つた。コルニロフ叛亂の經驗は、七月の事件の經驗を完成したもので、こゝで、繰返して、ケレンスキーとその一黨は、彼を擁護する彼等自身の勢力を何等持つてゐないといふ事實を暴露したのだ。コルニロフに反抗して立上つた××は、十月革命の準備された××であつたのだ。我々はこの危機を利用して、××××××させたが、その×××たちこそ、曩にツエレテリーが汗みどろになつてその××××につとめたものなのだ。

この數日間、首都はヒツソリしてゐた。コルニロフの入都は、或るものは希望をもつて、他の者は恐怖をもつて、これを待つてゐた。私の子供達は、誰かゞ『明日はやつて來るよ。』と言つたのを聞いて、翌朝、衣物を着ない中に、窓から外をのぞき見してコルニロフが到着したかどうかを窺つた。しかしコルニロフは到着しなかつた。大衆の革命的上向力がいかにも强力だつたので、彼の叛亂は譯もなくちり〳〵ばら〳〵に退散してしまつたのだ。だが痕跡も殘さない譯ではなかつた。と言ふのはその叛亂はことごとくボリシエヴイキの仕事に利益を與へたからだ。

『應報の來るのは遲いものではない。』と私はコルニロフ事件の當時に書いた。『追ひまくられ、追

害され、誹謗されながら、我々の黨はこれまで現在ほど急速に成長しつゝあることはなかつた。而してこの過程は首都から地方へ、地方から農村及び××へ……擴がつて行くであらう。我々の黨は、プロレタリアートの階級組織であることを一瞬たりとも止めないで、迫害の熱火のなかで、一切の抑壓され、踏みにじられ、欺かれ、追ひ立てられた大衆の眞の指導者に轉化するであらう。』

我々は上向力と辛うじて歩調を保つことが出來た。ペトログラード・ソヴイエット内のボリシエヴイキ黨員は、日に日にその數を增して行つた。我々はソヴイエット成員の約半數を代表してゐたが、それでもまだプレシヂユームに一人のボリシエヴイキもゐなかつた。そこで我々は、ソヴイエツト・プレシヂユームの改選問題を提議した。我々は、メンシエヴイキ及び人民派との聯立プレシヂユームを形成しようと申し出た。後になつて分つたことだが、レーニンは當時それを悅ばなかつた、と言ふのは、そのことによつて我々の側に妥協的傾向が生じやしないかと惧れたからだ。しかし何等の妥協も行はれなかつた。對コルニロフの鬪爭で、我々はついその前に共同鬪爭をやつたに拘らず、ツエレテリーは聯立プレシヂユームの形成を拒否したのだ。

我々はそれを望んでゐた。黨の方向に沿つた候補者の名簿にたいする投票のみが、現在の問題を解決することが出來るのだ。私は、我々の反對派の名簿にケレンスキーが含まれてゐるかどうかを訊ねて見た。彼は、ソヴイエットに參加しなかつたが、形式上は、プレシヂユームの一員であり、あらゆる仕方でそれに對する無視的態度を示してゐた。この改選問題はプレシヂユームをびつくりさせた。ケレンスキーは好かれてもゐなければ、尊敬されてもゐなかつたが、かりにも首相たるも

のを否認することは、不可能だつた。プレシヂユームの成員達は、お互ひに協議したあとで、『勿論、彼はその中に加へられてゐる。』と答へた。我々はそれ以上は何も望まなかつた。こゝに議事錄からの拔萃がある。『ケレンスキーは最早プレシヂユームに居ないものと我々は信じてゐた。(騷然たる喝采。)が、今、我々の誤つてゐたことを知つたのだ。ケレンスキーの影は、チハイゼとザヴエヂエの間にふらついてゐる。そこで諸君が、プレシヂユームの政治的整列者の承認を求められる場合には、諸君はかくして實にケレンスキーの政策の承認を求められてゐるのだ、これを記憶しなければならぬ。(騷然たる喝采。)』このことによつて、これまで動搖してゐた委員の更に他の百名内外が、我々の側に投じて來たのであつた。

ソヴイエットの會員數は、一千名をはるかに越えてゐた。投票は、扉の外に出て行く方法で行はれた。そこには恐しい興奮があつた。と言ふのは、當面の問題はプレシヂユームでなくて、革命だつたからだ。私は、仲間たちと、控室をあちこちと歩いてゐた。我々は、我々の得票は半數に百票足らないだらうと計算し、それでも成功だと考へてゐた。ところが俄然我々は、社會革命黨とメンシエヴイキの聯合體よりも、百票多くの投票を得たのだ。我々は勝利者だつた。私は議長席についた。ツエレテリーは、議長席を離れながら、諸君は、我々が革命を指導してゐた期間の半分だけ、ソヴイエットにとゞまつてゐて欲しいと述べた。言葉を換へて言ふと、我々の反對派は、三箇月以上は我々に信用賣りをしなかつたのだ。

彼等は大きな誤算をやつた。我々は途を踏み迷はず、眞直に××への行進をつゞけてゐたのだ。

第十二章　審判の夜

革命の第十二時間目は近づいてゐた。スモルニー館は要塞に轉形しつゝあつた。望樓には舊執行委員會からの遺産の若干の機關砲があつた。スモルニー館の司令官グレコウ大尉は、まぎれもない敵であつた。他方、××××××は、私のところへやつて來て、××××はみんなボリシエヴイキの味方だと告げた。私は誰か――多分マルキンだつたらう――に指令して、機關砲を檢閲させた。機關砲はどれもこれも、長くうつちやらかしておいたので、役に立たない狀態になつてゐることが分つた――××達は、ケレンスキーを防衛する意欲がなかつたので、すつかり弛緩してゐたのだ。私は、新たな、もつと手頼りになる機關砲隊をモスルニー館に呼び寄せた。

十月二十四日*　灰色の朝、早朝。私は建物のうちをそちこちと徘徊した。一つには運動のため、一つには萬事が甘く行つてゐるかを確かめ、必要な人員を鼓舞するためだつた。スモルニー館のはてしのない、まだほの暗い廊下の石疊にそつて、××達が、心からの掛け聲をかけ、高い足音をさせて機關砲を曳きずつてゐた――これが曩に私の呼び寄せた機關砲隊であつたのだ。まだスモルニー館にとどまつてゐた若干の社會革命黨員とメンシュヴイキとは、おびえたやうな顔を我々から外向けて、眠むさうにそこらをぶらついてゐるのが見られた。機關砲の音樂は、彼等の耳には兇兆だ

つたのだ。彼等は次々と取急いで、スモルニー館を去つて行つた。我々は今や、その建物を完全に支配したのであり、そしてその建物は、この都市及び全國の上に、ボリシエヴイキ的頭角を高くもたげる準備をしてゐたのであつた。

*これは當時まだロシアで公の暦であつた舊暦によつたものだ。ヨーロッパで普通に用ひられてゐる暦では十一月六日だ。この革命が、或は十月革命と呼ばれ、或は十一月革命と呼ばれるのは、これがためだ――エル・デイ・トロツキイ――。

その朝早く、男と女の二人の勞働者が、黨の印刷所から驅けて來て、ハツ〳〵と呼吸を切らしながら、階段のところで私に衝き當つた。政府が、黨の中央機關紙とペトログラード・ソヴエットの新聞を閉鎖してしまつたのだ。政府の代表者等が兵學生を伴つてやつて來て、印刷工場へ封印をしてしまつたのだ。一瞬間、この報知は我々をビツクリさせた。かういふ遣り方が、合法的手續でもつて、、、、、、、、、、、なのだ。

『封印を破つてもよいでせうか？』とその女が訊ねた。

『破つちまへ。』と私は答へた。『それから君達の安全のために、信用の出來る護衛をつけてやらう。』

『私達の次の室に××××が居ります。××達が私達を保護してくれることは、たしかです。』とその女の印刷工は、自信をもつて言つた。

軍事革命委員會は即刻命令を發した。『一、革命的諸新聞紙の印刷工場は作業を開始すべし。二、編輯局員及び記者を召集して新聞紙の發行を繼續すべし。三、反革命の攻擊から革命的印刷所を防

衞する名譽ある義務は、これをリトウスキー××及び×××××の勇敢なる××に委任す。』

而してこの時以來、印刷工場は中斷なく作業し、兩新聞紙は發行を繼續した。

二十四日に、電話交換局に故障が起つた。兵學生がそこを塹壕で圍んでしまひ、彼等の保護の下で電話交換手がソヴイエットの反對派側に加擔し、我々の方の電話の交換を拒んだのだ。これが最初の任意なサボターヂュであつた。軍事革命委員會は、水兵の一部隊を電話交換局に派遣し、その部隊は交換局の入口の前に二門の小砲を据ゑた。電話のサーヴイスは回復された。かくて×××××が始まつたのだ。

スモルニー館の三階の小さな隅つこの部屋に、軍事革命委員會はひつ切り無しに會議をひらいてゐた。軍隊の動靜、兵士及び勞働者の態度、諸兵營内での×××××、ユデヤ人虐殺の組織者の企圖、ブルジョア政治家や外國大使達の陰謀、冬宮での出來事——これら一切に關する報道がこの中心に向つて集まり、諸黨派の會議の報道は、正式にソヴイエットに達した。報告者はあらゆる方面からやつて來た——勞働者、××、官吏、門番、社會主義的×××、奴僕、薄給官吏の細君。彼等の多くは全くやくざなことしか報告しなかつたが、中には重要な、極めて價値のある報道を供給したものもあつた。

その一週間、私はスモルニー館から殆ど一歩も出なかつた。毎夜々々、着物を脱がないで革の寢臺に横たはり、時々思ひ出したやうに眠りを攝り、そして絶えず早打や、斥候や、オートバイ使者や、電話手や、引切りなしにやつて來る電話の呼出しで、呼び覺された。決定的の瞬間は目睫の間

に迫つてゐた。もうかうなつては後戻りなどのあり得ないことは、明々白々であつた。

二十四日の夜、革命委員會の委員達は、さま〳〵な方面へ出向いて行つて、私だけが獨り殘つた。しばらくすると、カメネフがやつて來た。彼は××には反對だつたが、この決定的な夜を我々と一緒に送るためにやつて來たので、我々は相携へて三階の例の小さな隅つこの部屋に居つた。そこは丁度革命のこの決定的な夜の司令塔のやうであつた。

我々に隣つた大きなガランとした部屋に電話室があつて、重大な事柄やつまらないことで、ベルがとめどもなく鳴る。ベルが鳴る度に、沈默の警戒が高まる。灯がほの暗く、海から來る秋風の吹きまくるペトログラードの荒凉たる街路、おじけて寢床にもぐり込み、この危險で奇怪な街路に何が起つてゐるかを推知しようとしてゐるブルジョアや官吏達、兵舍の深い眠りで靜まりかへつてゐる勞働者街——この光景は誰でも容易に心に描き出せるだらう。政府側の諸黨の委員會や協議會は、ツアーの諸宮殿の中で、疲れ切つてすつかり無能力になつて居り、そこではデモクラシーのこの生きた亡靈達と、まだその邊にうろついてゐる王政の亡靈達とが、肩をこすり合はせてゐる。時時、廣間々々の絹飾や鍍金飾類が、闇黑の中に沈んでしまふ——石炭の供給が不足になつたのだ。諸々の地區では勞働者、××及び×××××が、絶えず警戒してゐる。若いプロレタリアは、小銃や機關銃の負皮を肩にかけてゐる。街路の見張番は、街々で火をたいて體を温めてゐる。この秋の夜、一つの時代から次の時代へと頭を突込んでゐる首都の生命は、一塊りの電話機のまはりに集

中されてゐるのだ。

あらゆる地區、郊外、首都の近接地からの報道は、三階の部屋を焦點に集まつてゐる。指導者は各々部署についてゐる。連絡は確立されてゐる。忘れたことは何も無いやうだ。

もう一度、それを心に想ひ起し、繰返して見よう。この夜が萬事を決するのだ。ついこの夕方のことだ、私はソヴイエットの第二回大會の委員へ送つた報告のなかで、自信をもつてかう言つた。『諸君が若し頑張れば、內亂はなく、我々の敵は直ぐに降伏するだらう。而して諸君は、當然諸君に屬する地位を占めるだらう。』勝利をうることについて、何等疑ひはあり得ない。この場合およそ××の勝利が確實であると同樣に、それは確實だ。しかしまだこの數時間は緊張し、危險に滿ちてゐる。と言ふのはこの夜が萬事を決するのだから。政府は、昨日士官候補生を動員すると同時に、巡洋艦オロラにネバ河を退去せよと命じた。彼等は、去る八月にスコベレフが頭を下げて、コルニロフの攻擊から冬宮を防衞して欲しいと賴んだその同じボリシエヴイキ水兵であつた。その水兵達は、軍事革命委員會に訓令を求め、その結果、オロラ號は昨日投錨してゐた場所に、今夜も同じく投錨してゐる。ハヴロウスクから私にかゝつた電話の報知によると、政府は、同地から砲兵一枝隊、ツアールスコエ・セロから選拔兵一大隊、ピーターホーフ兵學校から學生士官を招致しつゝあると言ふ。ケレンスキーは冬宮のなかへ・兵學生、士官及び婦人選拔軍を引入れてゐる。私は委員達に對して、ペトログラードへの近接地一帶に、信賴するに足る軍事的防衞を配備し、政府の招致した諸部隊には××××××を送るやうにと命令する。我々の訓令や報道はことごとく電話で送ら

れ、××××××はそれを妨害する地位にある。だが、彼等は我々の通信を左右することが出來るか？

『彼等を言葉で止めることが出來なかつたら、××××××。諸君は生命にかけて、その責任を持つだらう。』

私はこの句を時々繰返す。だが私はまだ、私の命令の力を信じないのだ。この革命はまだ餘りに信賴的で、餘りに寬大で、樂天的で、氣樂なのだ。それは、實際に××を使用するといふよりも、寧ろ××で脅かすことを選んでゐる。この革命はなほまだ、一切の問題が言葉で解決され得ることを期待してをり、且つその限りで、これまで成功をおさめてゐるのだ。——敵對的要素は革命の熱い呼吸の前に、消散してゐる。その日（二十四日）の朝早く、××××し、もし街上でユデヤ人虐殺の兆候があつたら、何ものにも屈するなとの命令が發せられた。だが我々の敵は、街路のことを敢て考へることすらせず、隱れ家へ逃込んでしまつてゐる。街路といふ街路は我々のものだ。我々の委員達はペトログラードへの近接地全部を警戒してゐる。士官學校と砲手とは、、、、、、、、、、、、。ただオラニエンバウムの兵學生の一隊が、我々の防禦を通りぬけて、行進することに成功しただけだ。しかし私は、電話を通じて彼等の行動を見守つてゐた。彼等は結局、スモルニー館へ使者を送つてよこした。××は援助を求めたが無駄だつた。彼等の脚下で大地は辷りつゝあつたのだ。

スモルニー館の外部防衞は、新しい一機關砲枝隊の增援を受けた。守備隊のあらゆる部分との連

絡は、妨害されることはない。服務隊は、聯隊といふ聯隊で警戒に從事してゐる。委員はその部署についてゐる。各守備隊からの委員は、スモルニー館に屯して、軍事革命委員會の指揮の下に在り、一朝守備隊との連絡が切斷された場合には、直ちに使用されることになつてゐる。諸地區からの武裝枝隊は、諸街路にそつて行進し、門のベルを鳴らし、又はそれを鳴らさないで門を開き、一施設から他施設へと次々に××する。殆どいたるところでこれらの枝隊は、しびれを切らして彼等を待つてゐた友達に迎へられる。鐵道の諸終點では、特別に任命された委員が、上り下りの列車を警戒して居り、特に××の動靜を警戒してゐる。そこからは何一つ混亂のニュースは來ない。市内の最も重要な地點は全部、殆で無抵抗、無戰鬪、事故無しに、我々の手に引渡された。電話だけが我々に報告する『我々はこゝにある！』と。

萬事うまく行つてゐる。これ以上うまくは行き得なかつたらう。さあもう私は電話を離れてもよからう。私は寢臺に坐る。緊張した神經がゆるんで來る。だるい疲勞の感じが襲つて來る。

『煙草をくれないか。』と私はカメネフに言ふ。（その頃は私はまだ煙草をすつてゐたが、それも思ひ出したやうに時々吸ふだけだつた。）私は一二度プーと煙を吹く。だが、突然、『これだけが不足だつたたんだ！』といふ言葉と共に、私は失神する。（私は母からの遺傳で、肉體上の苦痛とか病氣とかで惱むときは、一種失神の魅力を感ずる性質をもつてゐる。或るアメリカの醫師は、私を癲癇病者だと言つたが、それはこれがためだ。）意識を回復すると、私は、カメネフがおびえたやうな顏をして、私の上にかゞんでゐるのを見る。

『藥を持つて來ようかね？』と彼は訊ねる。

『何か食べものを持つて來てくれたら、その方がずつといゝんだがなア。』と私は一寸考へたあとで答へる。私は、このまへ食べものを攝つたのは何時だつたか、想ひ出さうと努める。だが、想ひ出せない。とにかく、それは昨日のことではなかつたのだ。

翌朝、私はブルジョア、メンシュヴイキ、人民派の諸新聞紙を掴み取つた。彼等は××のことは一言すら言つてゐない。諸新聞紙は曩に、やがて行はれる××××の行動や、掠奪のことや、河のやうな流血の避けがたいことや、暴動のことについて、恐しくわめき立てゝゐたので、いま、實際に××が起つたときに、それを××と認める能力がなかつたに過ぎないのだ。諸新聞紙は、參謀總長と我々との商議を額面高通りに受取つて、我々の術策的聲明をもつて、態度動搖の兆だとしてゐた。その間に一方では、スモルニー館から發せられた命令にしたがつて、混雜もなく、市街戰もなく、殆ど發砲も流血もなく、一つの施設は他の施設に次いでつぎ〳〵と、××××の諸枝隊及び赤衞軍によつて占領されてゐた。

ペトログラードの市民は、新しい統治の下で、恐怖した眼を擦つた。ボリシエヴイキが政權を掌握するなんて、そんなことが實際あり得ることだつたか？　市會からの委員が私に會見を求め、二三のとても眞似の出來ない質問をした。『あなたは××××を提議されますか？　もしされるとすれば、何で、何時？』その場合市會は『二十四時間以内に』それを知らして貰はねばならない。ソヴ

イエットは安寧秩序を保證するためにどう云ふ手段を講じたか？　それからつまりさう言つた類のこと。

私は、革命についての辨證的見解を説明して、彼等に答へ、市會から軍事革命委員會へ委員を送つて、その事業に參加するやうにと勸告した。この勸告は、××そのものよりも以上に、彼等を驚愕させた。私は、いつものやうに、武裝的自衞の精神をもつて言葉を結んだ。『もし政府が鐵を使用すれば、鋼鐵をもつてそれに答へるでせう。』

『あなたは、ソヴイエットへの政權移讓に反對してゐるといふ廉で、市會を解散する意嚮がありますか？』

私は答へた。『いまの市會は昨日を代表してゐるものです。もし紛議が起れば、我々は市民に對して、權力問題について、新しい市會を選出せんことを提議します。』委員は來たときと同じで歸つて行つたが、その去つたあとには、我々の勝利は確立されたといふ感情が殘つた。その夜の間に或るものが變化してゐた。三週間前、我々はペトログラード・ソヴイエットで過半數を獲得した。我々は一本の旗より以上のものは殆ど持つてゐなかつた――印刷工場もなく、資金もなく、支部もなかつた。政府が軍事革命委員會の逮捕を命じ、我々の居所を夢中で搜索してゐたのは、すぐ前の夜のことだ。今日は、市會の委員が、市會の運命について尋ねるために、その『逮捕された』軍事革命委員會へやつて來たのだ。

政府はまだ冬宮で閣議を開いてゐたが、それは最早一箇の影に過ぎなかつた。政治的には、それ

は存在をやめてしまつたのだ。二十五日は終日、冬宮はあらゆる方面から我々の××によつて包圍されてゐた。午後の一時、私はペトログラード・ソヴイエットで情勢報告をやつた。新聞の報道はからうであつた。『軍事革命委員會の功によつて、臨時政府は最早存在しなくなつたことを、こゝに私は宣言する。（喝采）　數人の××は既に逮捕された。（『ブラボー』）　他の××達は數日中乃至數時間中に逮捕されるであらう。（喝采）　軍事革命委員會の手配の下になる革命守備隊は、憲法議會を解散させた。（大喝采）　我々はこゝで終夜警戒してゐた。而して革命的な勞働者、××の守備隊の諸枝隊は、默々として各自の仕事に從事してゐたので、我々は電話で彼等の行動を知つた。市民達は、一つから他への××の移動も知らずに、平和に眠つてゐた。停車場、郵便局、電話局、ペトログラード電話本局、國立銀行は××された。（大喝采）　冬宮はまだ××されないが、その運命は次の數分間内に定まるであらう。（喝采）』

この露骨な記述は、その集會の氣分について、誤つた印象を與へるかも知れない。私の回想はその特殊點を補ふ。私がその夜中に行はれた××の變移を報告した時に、そこには數分間、緊張した沈默があつた。次いで喝采が始まつたが、それは嵐のやうに激しいものでなく、寧ろ考へ深い喝采であつた。大會は緊張し、待つてゐた。勞働階級は鬪爭のために準備してゐた間は、名狀すべからざる熱心によつて摑まれてゐたが、我々が一度×××の閾に立つた時、この無思慮の熱心は、困惑した考へ深さに道をゆづつた。確固たる歷史的本能がこゝに自らを顯現したのだ。我々の前途には恐らく、舊世界からの最大の抵抗があり、そこには鬪爭と、饑餓と、寒冷と、破壞と、流血と、